公益財団法人明日佳

パラスポーツ研究成果報告書

2025 (No.9)

Journal of Parasports Research Vol.9



スポーツ基本法（平成23年法律第78号）（前文）

スポーツは、世界共通の人類の文化である。

スポーツは、心身の健全な発達、健康及び体力の保持増進、精神的な充足感の獲得、自律心その他の精神の涵（かん）養等のために個人又は集団で行われる運動競技その他の身体活動であり、今日、国民が生涯にわたり心身ともに健康で文化的な生活を営む上で不可欠のものとなっている。スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利であり、全ての国民がその自発性の下に、各々の関心、適性等に応じて、安全かつ公正な環境の下で日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない。

巻 頭 言



令和７年度は本道の特別支援学校におけるスポーツ活動がより一層の広がりと深まりを見せた一年でした。

特に第62回札幌OSEALフォーラムにおいて実施された特別支援学校フットサル大会に係る特別研究では、北海道札幌あいの里高等支援学校の生徒とFリーグ・エスポラーダ北海道の交流試合等が行われ、東アジア各国から来訪したライオンズクラブの方々に日常の活動の成果を披露することができ、その姿は多くの方々の感動を呼びました。

さて、当財団は、発足以来、特別支援学校や特別支援学級で学ぶ児童生徒のスポーツ活動を応援することを目的に、スポーツ用具の寄贈、フットサル大会の開催、そして実践研究への助成を継続して行って参りました。

令和７年度は、先に触れたOSEALフォーラムでの特別研究を含む計10件が実践研究助成の対象となり、各校・各学部において、障がいのある児童生徒一人一人の特性に応じたパラスポーツの在り方がより実践的かつ創造的に探究されました。

本研究成果報告書に収められた実践は、児童生徒の障がい特性を丁寧に把握した上で、指導内容や環境設定を工夫し、試行錯誤を重ねながら取り組まれたものです。そこには児童生徒が「できた」「わかった」と感じる瞬間を大切にし、成就感・達成感を引き出そうとする教師の皆様の熱意が込められています。報告書の文面からは児童生徒が主体的に活動へ向かう姿や、仲間とともに挑戦する喜びが鮮やかに伝わって参ります。

結びになりますが、障がいのある児童生徒の教育に携わる教師の皆様はもちろん、普通教育や療育、地域スポーツの現場で活動される皆様にも本報告書が新たな視点や実践のヒントとなれば幸いです。パラスポーツを通じて、すべての児童生徒が自らの可能性を広げ、豊かな学びを積み重ねていくことを心より願っております。

令和８年２月
公益財団法人明日佳
理事長　小野寺　眞　悟

目 次

巻頭言　公益財団法人明日佳　理事長　小野寺眞悟

特別研究助成
特別支援学校フットサル大会参加校の生徒のフットサル意識の実態
オセアルフォーラム札幌実行委員会事業委員会環境担当　片山　雅裕 …… 1

論文１　視覚障がい及び知的障がいを併せ持つ児童生徒も楽しめる運動の機会の創出
～協応動作を高める運動の実践～
北海道帯広盲学校　教諭　宍戸　威之 …… 9

論文２　特別支援学校（知的障害教育校）児童が自ら取り組む“遊び”を通して
～特別支援学校小学部低学年の遊びを通した授業改善～
北海道札幌養護学校　教諭　岩本　茉依
北海道札幌養護学校　教諭　天内　幸乃
北海道札幌養護学校　校長　上村　喜明 …… １５

論文３　フットサル部指導実践
～「わかる」「できる」「やってみる」を増やす工夫～
北海道紋別高等養護学校　教諭　岡野　俊平
北海道紋別高等養護学校　教諭　酒井　　駿 …… ２０

論文４　地域とともに「パークゴルフプロジェクト」
～スポーツを通して地域と共に～
北海道札幌養護学校白桜高等学園　指導実習助手　西村　信弥 …… ２４

論文５　ゴール型競技における生徒の実践
～車椅子サッカーによる生徒の意識の変化について～
北海道手稲養護学校三角山分校　教諭　梅野　綾人 …… ３０

論文６　知的障害生徒の「人間関係の形成」を目的とした体操指導の取組
～体育科と自立活動の関連を図ったペア・グループ活動を中心とした実践～
北海道東川養護学校　教諭　霜山　　生 …… ３６

論文７　つながる　ひろがる　北海道から全国へ
～全国盲学校フロアバレーボール大会を中心としたスポーツへの多様な
関わり方の実践
北海道札幌視覚支援学校　主幹教諭　三上友佳子 …… ４７

論文８　パラスポーツのデジタル支援
～自己効力感の向上を目指して～
北海道星置養護学校ほしみ高等学園　教諭　立石　光平 …… ５４

論文９　生徒の主体性を高めるスポーツ活動の推進と活躍の場について
～卒業後の暮らしと地域でのスポーツ活動の関わり～
北海道札幌稲穂高等養護学校　教諭　永易　健太 …… ６０

特別研究助成

特別支援学校フットサル大会参加校の生徒のフットサル意識の実態

オセアルフォーラム札幌実行委員会事業委員会環境担当　片山　雅裕

Ⅰ　はじめに

公益財団法人日本ライオンズ（以下「当法人」）が主催する全国特別支援学校フットサル大会は、特別支援学校で学ぶ障がいのある児童生徒が主体的に参加し、仲間と協働することを通じて、社会的・感情的・身体的な成長を促す教育的実践である。

近年、教育現場において「インクルーシブ教育」の理念が広く浸透しつつある中、スポーツを媒介とした共生の場づくりが注目されている。特にフットサルのようなチームスポーツは、個々の特性を尊重しながらも、共通の目標に向かって協力する経験を提供するという点で、インクルーシブ社会の形成に資する重要な教育資源と言える。

本大会は全国12の地区大会を含めた試合だけではなく、日常の各校の練習において、児童生徒が各々のポジションを担い、仲間と声を掛け合いながらプレーする中で協調性・責任感・自己効力感などの社会的スキルが自然に育まれる。また、勝敗やミスを通じて感情を調整する力や、他者の立場を理解する共感力も養われる。これらの力は学校生活のみならず、将来の地域社会での自立と共生に向けた基盤となる。

さらに、本大会は特別支援学校で学ぶ生徒全体を出場対象としていることから、視覚障がいや聴覚障がい、発達障がいなど、さまざまな背景を持つ児童生徒が一つのチームとしてプレーすることになり、これは「違いを超えて共に在る」ことに繋がる実践であり、インクルーシブ社会の縮図とも言える。競技の場において、誰もが役割を持ち、貢献できる構造が整えられていることは教育的にも倫理的にも極めて意義深い。

本稿では、OSEAL フォーラム in Sapporo に参加した北海道立特別支援学校高等部生徒を対象にフットサルに係る意識調査を行い、その結果とともに、フットサルに係るその周辺の事項を整理し、インクルーシブ社会の進展に向けた教育的可能性などについて考察するものである。

Ⅱ　（公財）日本ライオンズは、何故、フットサルに着目したのか

1　北海道の特別支援学校高等部卒業生の進路・就労の実態

現在、北海道内の特別支援学校高等部（以下「支援学校高等部」）を卒業した生徒のうち、約９割が一般就労または福祉施設での就労という進路をとっている（表１）。

令和６年度　道内特別支援学校卒業生の進路状況(北海道教育委員会統計)

道内特別支援学校卒業者の33%は、卒業後、就職し、
福祉施設での軽作業等就労を含めると、91%が就労する。
（道内高等学校　34,989名中6,082名　17%が就労）

								進学	進学
卒業生		6	14	1,012	60	6	1,098	3	3
就職			3	347	7	1	358	2	2
進学	専攻科等	1	4				5		
	大学等	2	5		1		8		1
	教育訓練機関等			29	1		30		
福祉施設利用		3	2	588	46	1	640		
その他（入院、自宅療養等）				48	5	4	57	1	

強い体、仕事や作業に集中する力、他と協調する力

＜表１　令和６年度道内特別支援学校卒業者の進路状況＞

2　就労に求められる基礎能力 ― 強い体・集中力・協調性

就労する上で障がいのある生徒に求められるのは、実は専門的な知識技能以前に、基礎的な労働習慣・身体的・精神的・社会的スキルの充実である。

国立障害者リハビリテーションセンター　自立支援局　別府重度障害者センター発行の「就労に向けて求められるもの（令和４年３月発行）」で大きく指摘されている６項目を整理すると、「強い体：体力」「仕事や作業に集中する力：集中力」「他と協調する力：協調性」として整理することができる（表２）。

○体力の育成
　体力の強化：スポーツは筋力・持久力・柔軟性・敏捷性など、体力を総合的に高める。
○集中力の育成
　心理的スキルの強化：試合や練習では「一瞬の判

断」「持続的な注意力」が求められることから、注意の切り替え・持続・抑制といった集中力が鍛えられる。

〇協調性の育成

社会的協調性（チームワーク）：特にチームスポーツは、仲間との役割分担・意思疎通・相互信頼が不可欠なことから、社会的協調性の発達に寄与することが示されている。

＜表２　就労に求められる基礎能力＞

3 在学中からの体力、集中力、協調性養成とスポーツの意義

特別支援学校の在学期間において、「体力・集中力・協調性」を同時に育成できる最も総合的かつ実践的な手段はスポーツを取り入れることである。この３分野の育成に係るスポーツの意義を次のように整理することができる。

⑴ スポーツは単なる体力向上にとどまらず、集中力や協調性といった「心」と「社会性」を同時に育む実践的な場となる。

⑵ スポーツは「体力・集中力・協調性」を培うための最適な方策として、特別支援学校では推奨すべきことと考えている。

4 特別支援学校でのフットサルの意義

2005年にイタリアで誰も排除しない「社会連帯」を掲げ、年齢・性別・障がい・犯罪歴などに関わらず参加でき、精神医療や社会的弱者支援の一環として、また治療的・教育的効果を持つ活動として「ソーシャルフットボール」が展開され、我が国にも2011年に大阪に導入された。

このソーシャルフットボールは、フットサルのルールと同様であり、女子が含まれる場合は最大６名で行われる。そこで、当法人としては、前記３で述べた「体力・集中力・協調性」ほ総合的に育成することを目的としてフットサルを採用し、全国大会を開催することとした。

フットサルは、狭いコートで連続的に全身を動かすため、短いダッシュ・急停止、方向転換、持久的な移動・身体接触・バランス維持等、多くの身体能力要素が統合的に要求されるスポーツである。また、フットサルは、ルールの理解、ゲーム展開の先読み、瞬間的な判断、反復動作への没頭といった集中力を自然に訓練できる競技である。

加えて、フットサルは、チームとしての「目標意識」の共有や役割分担（攻守の入れ替わり、即応性）、選手相互の声かけやアイコンタクト等“非言語も含めた”協調行動、「失敗を責めず、助け合い、称え合う」空気の中でのプレーなど、小さなフィールドで５人という少人数制は一人ひとりの責任感と連携意識を高めることに優れたスポーツ種目といえる。

当法人は、このようなことを踏まえ、全国特別支援学校フットサル大会を主催し、全国の特別支援学校に働きかけることとした。

Ⅲ 全国特別支援学校フットサル大会の開催

1 大会の概要

当法人が主催する全国特別支援学校フットサル大会は、2022年（令和４年）に第１回全国大会札幌大会を開催した。この全国大会は全国８地区の地区大会で優勝した学校を招待して開催した。

なお、この全国大会を開催するにあたり、2020年（令和２年）から大会開催を担当する全国組織の整備に取りかかり、2021年（令和３年）に当法人設立記念大会を開催すべく推進していたが、新型コロナ感染症が急激に拡大して、この記念大会の開催を見送ることとした。

全国大会は、各地区大会の予選で勝ち抜いた学校を招待して、第１回大会は札幌、第２回大会は福岡、第３回大会は名古屋、第４回大会は東京で開催した。

スポーツ庁及び全国特別支援学校長会の後援名義使用の許可を得て開催している。各地区大会の参加校数は表３のとおりである。

年度	参加校数
2022（令和4）年度	７０
2023（令和5）年度	１１０
2024（令和6）年度	１２１
2025（令和7）年度	１３８

＜表３　全国特別支援学校フットサル大会各地区大会参加校数＞

2 大会の理念

当法人は本大会を開催するにあたり、特別支援学校卒業生の進路先の大半が一般就労や福祉的就労であることを踏まえ、生徒が主体的能動的に活動することを推進するため、「自立」と「リスペクト（尊敬）」を２大理

『自立とRESPECT』

○ 自立への願い

公益財団法人日本ライオンズは、特別支援学校の多くの生徒が、卒業後、実社会に出て就労することを踏まえて、生徒が自ら判断し、自立的行動が可能になるように、生徒の主体的判断を尊重する大会を目指しています。

このため、通常の競技会では許されている監督・コーチのベンチでの生徒への指示・命令を一切禁止しています。監督・コーチは、選手交代及び緊急時以外はベンチに座り、状況を見守り、生徒の自立的行動を肯定的かつ正確に把握して、穏やかな態度で、生徒が主体的な判断・決定・実行する力を高めるよう、温かな思いやりのある教師行動を期待しています。

○ RESPECTへの願い

生徒は、卒業後、実社会に出た場合、ＲＥＳＰＥＣＴ「他人への思いやりの心」「相手に敬意を表する心」があれば、大抵のことは円滑に進めることができます。この大会を通して、自校や他校の生徒同士、学校の先生、大会関係者、特にゲームでは審判等運営者へのＲＥＳＰＥＣＴを示す行動を全ての場面で示す大会を目指します。

このため、自校の生徒同士、引率の先生、対戦相手校の生徒、審判、大会関係者などには、相手を認めて、敬意を表する「こんにちは」や「お願いします」「ありがとうございます」などの具体的な礼儀や言葉遣いを行うことを期待しています。

＜表４　『 自立とRESPECT 』＞

念として中核に掲げ、表４の内容を大会に参加した生徒と教師等に徹底的に求めて大会を運営するこことした。

Ⅳ 特別支援学校生徒のフットサル意識と実態等について

1 調査対象の生徒

第62回 OSEAL FORUM in SAPPORO は、2025年10月23日（木）～26日（日）までの間、アジアのライオンズクラブから10, 600人が札幌市内を会場にして、奉仕活動の共有化、国際理事の推薦、地域課題の協議を通じて参加者相互の友好と協力を深めた。大会会場には当法人が主催する全国特別支援学校フットサル大会の特別パネルを展示して周知を図り、日本からの参加者だけではなく、各国の大会参加者に特別支援学校に学ぶ生徒の理解欄式の推進に係る活動も行った。

札幌市内の特別支援学校高等部生徒と日本フットサルリーグに所属するエスポラーダ北海道のエキシビションマッチは、このフォーラムの正式な特別プログラムとして実施された。

2 調査内容と方法

アンケートは知的障がいの生徒が主体であるため、設問は難しい言葉を使わないように、また回答は複数の選択肢の中から自分の考えと会う内容をチェックする形式として実施した。

アンケート実施校は、小野寺眞悟杯北海道特別支援学校フットサル大会で毎年常に上位の成績を残している学校に依頼した。アンケート調査を依頼した当該校は、2025（令和7）年10月25日、札幌市産業振興センター体育館で開催された第62回東洋・東南アジアライオンズフォーラム「北海道特別支援学校パラスポーツプログラム」において、Ｆリーグ所属エスポラーダ北海道とのエキシビションマッチの後に、表５のアンケート用紙を用いて当該校の引率教師からの説明を受けながら実施した。対象生徒は14名である。各設問に対しての回答は一つとのことで行ったが、１名の回答が複数回答であったため、調査基数から除外した。

オセアルフォーラム札幌実行委員会
このアンケートは、フットサル大会に　みなさんの声をいかすためのものです。
※　各問の一つの　□　に　レ　をつけます。

1　あなたは、フットサルをどう思いますか？ □ とても楽しい　□ まあまあ楽しい □ あまり楽しくない　□ まったく楽しくない □ その他（くわしく書いてください）
2　あなたは、フットサルをしているとき、どんな気持ちになりますか？ □ たのしい　□ うれしい　□ つかれる □ こわい　□ かなしい　□ よくわからない □ その他（くわしく書いてください）
3　あなたは、フットサルをして、じぶんのどんなところがよくなったと思いますか？ □ からだが　つよくなった　□ ともだちと なかよくなった □ じぶんに じしんが ついた　□ よくわからない □ その他（くわしく書いてください）
4　あなたは、フットサルで楽しいことは、どんなところですか？ □ 点をとったとき　□ パスがつながったとき □ ゴールを守ったとき　□ 相手のボールをとったとき □ その他（くわしく書いてください）
5　あなたは、フットサルをしているとき、どんなことをがんばっていますか？ □ チームのみんなと協力すること　□ さいごまであきらめずに走ること □ 相手のボールをうばうこと　□ ゴールをねらってシュートすること □ ルールを守って楽しくプレーすること □ その他（くわしく書いてください）
6　フットサルでいちばんたのしかったことをおしえてください。

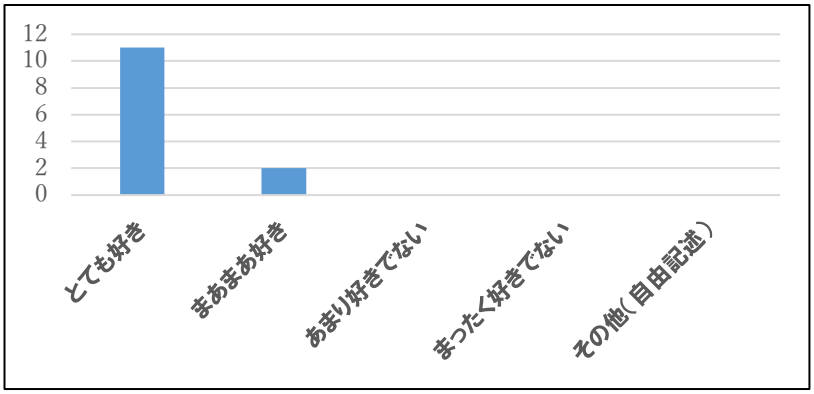
＜表５　アンケート設問用紙＞

3　調査結果

(1) 設問１「あなたは、フットサルをどう思いますか？」

①集計結果

選択肢	回答数	備考
とても好き	１２	フットサルへの強い好意が見られる
まあまあ好き	２	興味はあるが熱中度は中程度
あまり好きでない		苦手意識または関心が薄い可能性
まったく好きでない		該当なし



②考察

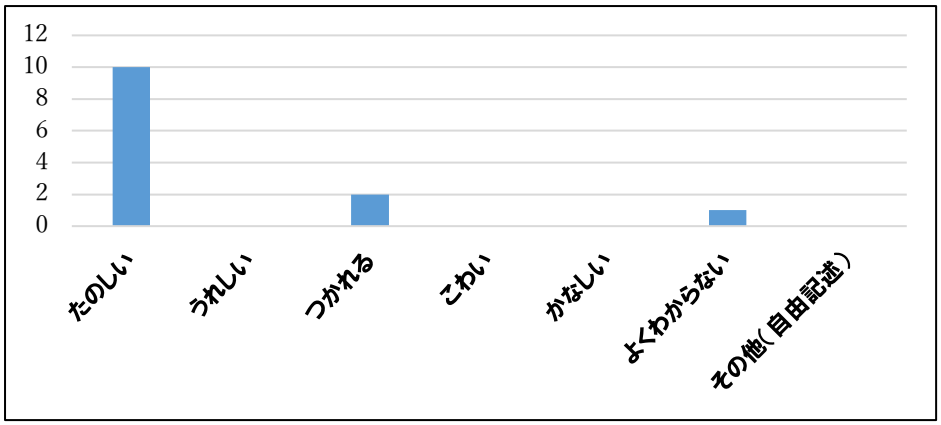
好意的な回答が圧倒的多数（13名中13名）と、「とても好き」「まあまあ好き」を合わせると全員が肯定的な回答をしており、フットサルに対する全体的な印象は非常に良好である。なお、「あまり好きでない」「まったく

好きでない」の選択肢に該当者がいないことから、苦手意識や拒否感はほとんど見られない。

（2）設問2「あなたは、フットサルをしているとき、どんな気持ちになりますか？」

①集計結果

選択肢	回答数	備考(感情分類)
たのしい	１０	ポジティブ感情(喜び)
うれしい		ポジティブ感情(達成感)
つかれる	2	ネガティブ感情(身体的負荷)
こわい		ネガティブ感情(不安)
かなしい		ネガティブ感情(悲哀)
よくわからない	1	意識未形成または混乱



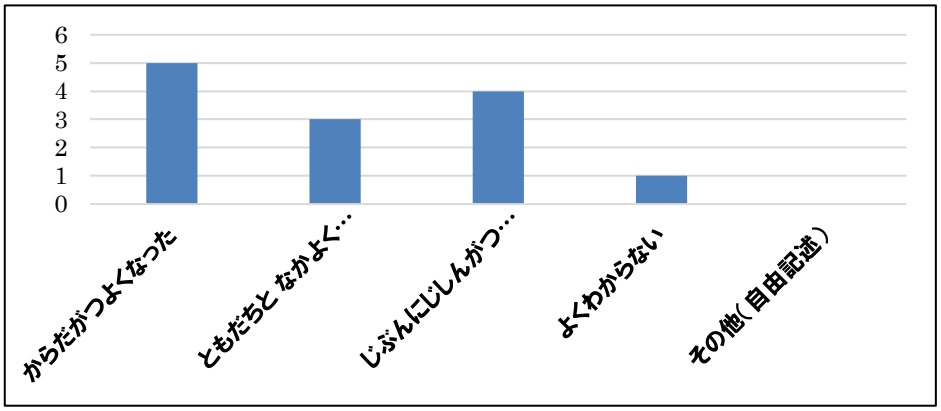
②考察

「たのしい」が圧倒的多数（10名）で、フットサル中の感情として「喜び」が最も多く、活動自体がポジティブな体験であることがうかがえる。一方、「つかれる」が２名おり、身体的な負荷を感じている生徒も一定数いることが推測されることから、運動強度や体力面での配慮が必要性かもしれない。「よくわからない」が１名おり、感情の整理がついていない、または経験が浅い可能性があり、今後の継続参加によって変化が見られるかもしれない。

（3）設問3「あなたは、フットサルをして、自分のどんなところが良くなったと思いますか？」

①集計結果

選択肢	回答数	備考（成長の側面）
からだがつよくなった	5	身体的成長
ともだちと　なかよくなった	3	社会的成長（協調性）
じぶんにじしんがついた	4	精神的成長（自己肯定感）
よくわからない	1	意識未形成または実感なし



②考察

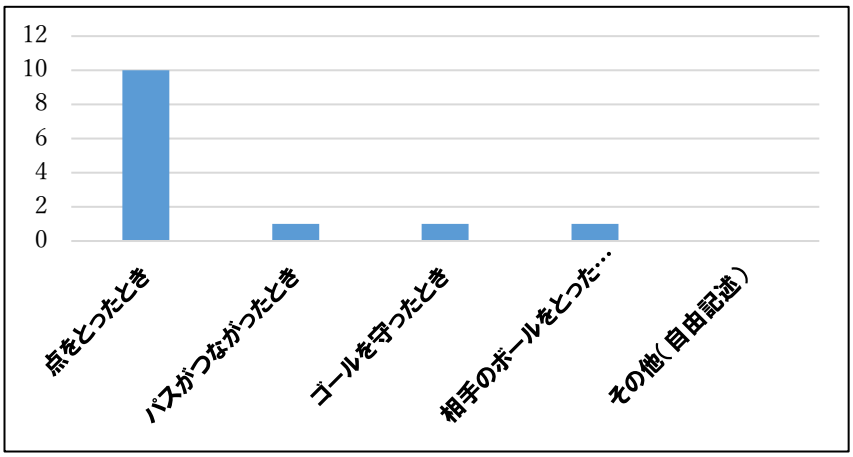
身体的・精神的・社会的成長がバランスよく分布しており、生徒はそれぞれ異なる側面で成長を実感しており、フットサルが多面的な教育的価値を持つことが示されている。

「じぶんにじしんがついた」が４名おり、自己肯定感の向上は継続的な参加や成功体験による心理的な充足感を反映していると考えられる。また、「ともだちと　なかよくなった」が３名いて、協調性や友情の形成が見られ、社会的なつながりの促進にも寄与していることがわかる。なお、「よくわからない」が１名と、成長の実感がまだ形成されていない可能性があり、今後の継続参加や振り返りによって変化が期待される。

（4）設問4「フットサルでたのしいところは、どんなところですか？」

①集計結果

選択肢	回答数	備考（楽しさの要因）
点をとったとき	１０	得点への達成感
パスがつながったとき	1	協力・連携の喜び
ゴールをまもったとき	1	成果・達成感
相手のボールをとったとき	1	戦略的成功



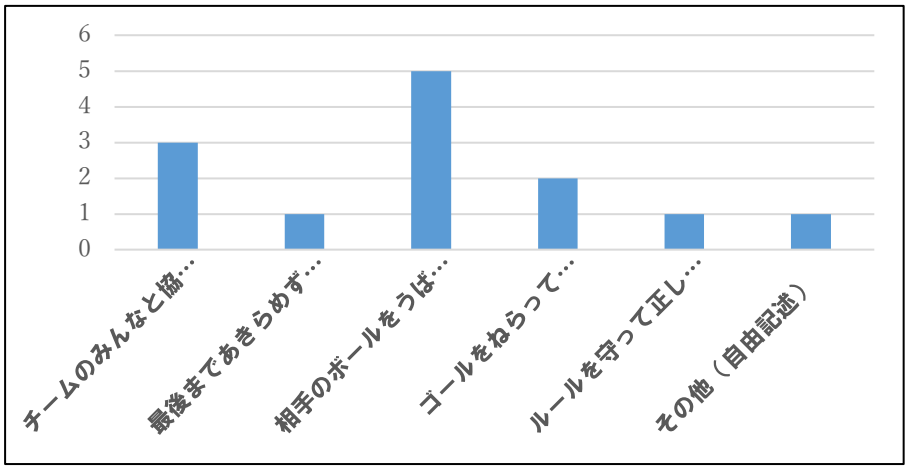
②考察

「点をとったとき」が圧倒的多数（10名）で、得点という明確な成果が生徒にとって最も楽しい瞬間であることが示されている。これは達成感や自己効力感に直結する要素である。また、少数ながら多様な楽しさの要因も確認でき、「パスがつながった」「ゴールを守った」「相手のボールをとった」といった回答から、協力・守備・戦略といった多様な側面でも楽しさを感じている生徒がいることがわかる。

（5）設問5「あなたは、フットサルをしているとき、どんなところをがんばっていますか？」

①集計結果

選択肢	回答数	備考（意識されている努力）
チームのみんなと協力すること	3	協調性・連携
最後まであきらめずにプレーすること	1	忍耐力・継続力
相手のボールをうばうこと	5	守備意識・積極性
ゴールをねらってシュートすること	2	攻撃意識・挑戦
ルールを守って正しくプレーすること	1	公正さ・規律
その他(自由記述)	1	「声を出す」「仲間を助ける」などの記述を分類可能



②考察

「相手のボールをうばうこと」が最多（５名）で、守備への積極性が最も多く挙げられており、競技中の集中力や反応力が重視されていることがわかる。また、協調性・挑戦・規律など多様な努力が確認でき、かつチームプレー、粘り強さ、ルール遵守など、参加者はそれぞれ異なる側面で努力を意識しており、教育的・社会的な価値が多面的に育まれていることが示唆される。また、「声を出す」「仲間を助ける」といった記述は、協力・支援・コミュニケーション力の育成に関わる重要な要素であり、今後の指導や評価に活かすことができる。

4 総合的評価と考察

本調査は、児童・生徒がフットサル活動を通じてどのような感情を抱き、どのような成長を実感しているかを明らかにすることを目的として実施した。その結果、以下のような特徴が見出された。

(1) フットサルに対する全体的な印象

まず、設問１ 「あなたは、フットサルをどう思いますか？」においては、回答者全員が「とても好き」または「まあまあ好き」と回答しており、否定的な回答は一切見られなかった。これはフットサルが児童・生徒にとって高い関心と好意をもって受け入れられていることを示しており、活動の導入や継続において極めて良好な基盤が形成されていると評価できる。

(2) 活動中の感情体験

設問２「フットサルをしているときの気持ち」では、「たのしい」が圧倒的多数を占め、活動そのものが喜びや楽しさを生む場となっていることが明らかになった。一方で「つかれる」と回答した者も一定数存在し、運動強度や体力差に対する配慮が必要であることが示唆された。また、「よくわからない」と回答した者もおり、経験の浅さや感情の言語化の難しさが背景にあると考えられる。。

(3) 自己成長の実感

設問３ 「フットサルをして良くなったと思う点」では、身体的成長（体力向上）、社会的成長（協調性）、精神的成長（自己肯定感）のいずれもがバランスよく挙げられた。特に「自分に自信がついた」という回答は成功体験を通じた心理的充足感を反映しており、教育的意義が大きい。また、「友だちと仲良くなった」という回答からはチームスポーツとしての社会的つながりの促進効果も確認できた。

(4) 楽しさの要因

設問４ 「フットサルで楽しいこと」では、「点をとったとき」が最多であり、得点という明確な成果が達成感や自己効力感に直結していることがわかる。加えて、「パスがつながった」「ゴールを守った」「相手のボールをとった」といった回答も見られ、協力・守備・戦略的成功といった多様な側面でも楽しさを感じていることが示された。これは、活動の中で児童・生徒がそれぞれ異なる価値を見出していることを意味している。

(5) 意識されている努力

設問５ 「フットサルで意識している努力」では、「相手のボールをうばうこと」が最多であり、守備面での積極性や集中力が強調されていた。同時に「協力」「挑戦」「規律」「継続力」といった多様な努力の方向性も確

認され、児童・生徒がそれぞれ異なる観点から主体的に取り組んでいることが明らかとなった。さらに、自由記述に見られた「声を出す」「仲間を助ける」といった内容は、協力や支援行動、コミュニケーション力の育成に直結する重要な要素であり、今後の指導や評価に積極的に取り入れるべきである。

（6）総合的示唆

本調査を総合すると、フットサルは特別支援学校の生徒にとって「楽しさ」と「成長」を同時に実感できる活動であることが明確となった。

特に、得点による達成感を中心としつつも、協力や守備、戦略的成功といった多様な価値を見出している点は注目に値する。また、身体的・精神的・社会的成長がバランスよく育まれていることから、フットサルは教育的に極めて有効な活動であると評価できる。

一方で、「つかれる」「よくわからない」といった回答も存在することから、体力差や経験差への配慮、感情や成長を言語化する振り返り活動の導入が今後の課題である。これらを補完することで、より多様な児童・生徒が安心して参加し、自己の成長を実感できる環境づくりが可能となるだろう。

Ⅴ おわりに

公益財団法人日本ライオンズはスポーツ庁及び全国特別支援学校長会の後援の下、全国特別支援学校フットサル大会を開催し、特別支援学校の児童・生徒が高等部を卒業した段階で就労することを踏まえた「強い体」「集中力」「協調性」と共に、「自立とリスペクト」が身に付くようにとの願いで、我が国の約3、000のライオンズクラブに所属する約10万人の会員に働きかけ、全国1，148校の特別支援学校に目を向ける活動を行っている。

今回、2025年10月25日（土）、札幌市で開催された第62回 OSEAL FORUM in SAPPORO（ライオンズクラブ国際協会が定める東洋・東南アジア地域「OSEAL=Orient & Southeast Asian Lions」）に集った日本・韓国・台湾・フィリピン・シンガポール・マレーシア・タイなど各国からの参加者１万２千人に、特別支援学校のフットサル大会の実態に係る展示パネルを掲示するとともに、本道特別支援学校の生徒がフットサルを披歴したことは特別支援学校の生徒の理解・認識の推進だけではなく、障がい児・者の一般就労への高い能力を持っていることを改めて示す良い機会になった。

また、同時に実施した生徒へのアンケート調査により、公益財団法人日本ライオンズが主催する全国特別支援学校フットサル大会は、身体的健康の促進をはじめ、協調性・自己肯定感・挑戦意識・規律の育成など、幅広い教育的価値・教育的意義を持つことが明らかになった。

今後もより一層全国特別支援学校フットサル大会を充実させ、障がいのある児童・生徒の社会参加を推進し、インクルーシブ社会がより充実するように努めてまいりたい。



論文 1

視覚障がい及び知的障がいを併せ持つ児童生徒も楽しめる運動の機会の創出

～協応動作を高める運動の実践～

北海道帯広盲学校　教諭　宍戸　威之

Ⅰ 北海道帯広盲学校



＜写真１ 校舎の外観＞

本校は、今年度創立88年目を迎える。

創立に当たっては、小樽盲唖院の訓導であった岩元悦郎先生・ヒデ先生ご夫妻が、道東の地に盲児・聾児のための教育施設がないことを知り、「この地方の盲・聾児を教育することができるならば彼らの幸福であり、ひいては社会に貢献できる」と考え、昭和12年７月１日に私立帯広盲唖院として開設したのが始まりである。本校は、道内に４校ある盲学校・視覚支援学校の中で、十勝・釧路・根室管内の全域及びオホーツク・上川管内の一部を校区としている（写真１）。

本校には居住地が遠方にあることで通学に困難さがある幼児児童生徒のために寄宿舎「ふしこ寮」が併設されており、幼児児童生徒が利用している（写真２）。



＜写真２　寄宿舎の外観＞

在籍数は幼稚部４名、小学部２名、中学部２名の合計８名である。全員が弱視で８名中７名がダウン症等の知的障がいを併せ持っている。

Ⅱ 対象生徒の実態

対象生徒は、現在、中学部３年生男子生徒１名（以下Ｓさん）である。

主障がいは視覚障がい（弱視）で、知的障がいを併せ持っており、ダウン症候群と診断されている。見え方については令和７年１月現在で遠方視力が両眼 0.1、右眼 0.1、左眼 0.04、近方視力が両眼 0.5、最大視認力 0.9（14㎝）。眼振があり、心臓の疾患により激しい運動は控える必要がある（田中ビネー　CA ９歳10ヶ月　MA ２歳６ヶ月 IQ25 【R2】）。

体育科における実態は、リズムに合わせて体を動かすことが好きで、ダンスや体操が得意である。体育活動全般に対して意欲が高く、教師の動きを真似して様々な運動に積極的に取り組もうとする姿勢がみられる。課題としては、少々肥満傾向にあるため、持久力に欠ける点があげられる。また、敏捷性を必要とする運動が苦手、協応動作を必要とする運動が苦手である点があげられる。それぞれの例として、持久力については体育館を２周程度ランニングすることができる。敏捷性については反復横跳びを20秒間で15回程度、協応動作についてはゆっくり転がってきたボールやバウンドしたボールをキャッチすることができる。

Ⅲ 研究の目的

本研究では、視覚障がいおよび知的障がいを併せ持つＳさんの協応動作の向上を図ると共に、「将来的に自ら進んで身体を動かすことを楽しめるようになること」を目的とした。

Ｓさんの「見えにくさ」や「認知的特性」に配慮しながら、楽しさを感じられる体育活動を通して、協応動作の能力を育成し、将来にわたって主体的な運動機会の創出につながるよう実践を行った。

Ⅳ 研究の内容・方法

協応動作の能力を高めるために取り組んだ実践を２つ紹介する。

また、生涯にわたり自ら進んで身体を動かすことを楽しめるようになるための実践を１つ紹介する。

1 実践1 サウンドテーブルテニス(STT)

(1) サウンドテーブルテニスとは

サウンドテーブルテニス（STT）とは、視覚障がい者向けの卓球競技で、金属球が入ったボールが転がる音を頼りに、ラケットで打ち合う競技である。選手はアイマスクを装着し、ネットの下をボールが転がってラリーが続くようにプレーする。本実践では、生徒が弱視であり、ある程度ボールが見えることから、アイマスクを着用せず、保有する感覚を頼りにボールを追うことで、協応動作の能力を高めようと考えた（写真３）。

実施期間は５月。週３回、各１時間。合計９時間の実践である。



＜写真３　STT の様子＞

(2) 協応動作の能力を高めるために

目と手の協応動作の能力を向上させるために、的当てを行った。相手コートに薄い用紙にキャラクターを描いた的を置き、その的を狙ってボールを打つ練習をした（写真４）。手元にあるボール、相手コートにある的、それぞれ視線を移動し、ボールを打つ角度を考えなくてはならない。



＜写真４　的当ての様子＞

より楽しい活動になるように、二人で協力して的を倒したり、全部倒すまでの時間を競い合ったりした。

(3) ゲームの様子

ゲームは、対教師、対友達、ダブルス等、様々なバリエーションで行った。STT は相手コートのエンドフレーム部分、サイドフレーム部分に触れずにボールが落下すると相手の得点なる。エンドフレーム部分とサイドフレーム部分がより見えやすいように黄色のビニールテープを貼った。Ｓさんは教師の「黄色のテープめがけてボールを打つよ」の指示を理解し、ボールを返球していた（写真５）。



＜写真５　ゲームの様子＞

2 実践2 フィールドホッケー

(1) フィールドホッケーとは

フィールドホッケーとは、先の曲がったスティックでプラスチック製のボールを操り、パスやドリブルを駆使して相手のゴールへシュートして得点を競い合うスポーツである。本実践では安全に配慮し、プラスチック製のスティックを使用する。また、視覚的配慮として、通常よりも大きくカラフルなボールを使用した。実施期間は７月。週３回、各１時間。合計６時間の実践である。

(2) 協応動作の能力を高めるために

STT と同様に、相手コートに的を置き、的をめがけてボールを打つ練習を行った。STT よりも手元からボールまでの距離が長い分、難易度が高くなる。また、スティック先端の丸い面を床に向けてスティックを持つことを意識しないと上手にボールをヒットすることができない。打ち方に慣れさせるため、ボールを多数用意し、相手のコートにより多くのボールを返す練習もゲーム形式で行った。相手コートから動いてくるボールを打ち返すためにボールの動きをよく見て予測しなければならない。そして、タイミングよくスティックを振る必要がある。さらに、自分から離れたところに転がったボールを打つために、自分が移動しながら動いているボールを打たなければならない。

(3) 指導の実際

様々な大きさや硬さのボールで試した結果、テニポ

ン用のボールを使用した。このボールは通常のボールよりも大きく、しかも軽くできている。そのため見やすく、空気抵抗も大きいため、ボールスピードが通常よりもゆっくりになる。Sさんの能力に合っているため、このボールを使用することにした。

はじめに、スティックの持ち方から練習した。スティック先端の丸い部分が下になるよう持つこと、スティックは大きく振りかぶったり、高く上げすぎたりしないようにすることを、教師が後ろから手を添えて、スティックの扱い方を指導した（写真6）。



＜写真6　スティックの扱い方＞

スティックを正しく扱うことができるようになってから、ボールを止める練習を行った。

パス練習を行おうとすると、Sさんは来たボールを止めることなく、そのまま打ち返していた。ボールを止めないで打つので、狙った方向にボールを打つことができなかった。そこで「ボールを止める」「ボールが止まったら打つ」ことを指導した。教師が後ろから手を添えてスティックを持ち、ボールを止めるとはどういうことなのかを体感させた。また、「ボールを止める」という動作を理解しやすくするために「ボールピタッ」という擬音語も使い、ボールを止める動作を身につけさせた。

その後、ゴールに向かってスティックでボールを運び、最後にシュートする練習も行った。ゴールに近づいてシュートを放つものの、ゴールを見ていないため、ゴール枠を外れてしまう場面が多く見られた。そこで、ゴールのネットに鈴を付け、ゴールが近づいたら指導者が鈴を鳴らし、ゴールの位置を目と耳で確認してからシュートをするように指導した。その結果、ゴール枠内にボールが入る確率が格段に高くなった（写真7）。



＜写真7　ボールを運んでシュート＞

ボールを止める、運ぶ、シュートする動作が身についてきたところで、1対1、2対2などのゲームを行った。ボールの動きを見て、自らボールを追ったり、相手からボールを奪おうとしたりする動きが見られるようになった。またゴールを決めることができたときには嬉しそうにガッツポーズする姿が見られた。

3　実践3　生涯にわたる主体的な運動機会の創出

（1）運動機会の減少

本校は在籍児童生徒数が極めて少ないため、必然的に集団での運動機会が少なくなる。在籍児童生徒数が多かった頃は部活動もあり、体育以外でも体を動かす機会が多かった。しかし、在籍数の減少と共に部活動は消滅し、運動機会は徐々に減っていった。またコロナ禍により、一定期間、児童生徒の運動機会が奪われた時期があった。

（2）対象生徒の実態

Sさんは小学4年生の時に本校に転入してきた。その時にはすでに本校の部活動は消滅しており、Sさんの運動機会は週3回の体育の時間のみであった。前述で生徒の実態を記したとおり、心臓に疾患があるため強度の運動は制限されており、保護者及び担当医と相談しながら運動の強度を考えて体育を行うことにした。転入当初は疲れやすく、座って学習している途中に眠ってしまうこともしばしばあった。

（3）体力をつける取り組み

Sさんは体を動かす事は好きであるが、疲れやすいため、まずは体力をつけることを目標にした。体育では、授業のはじめにゆっくりしとしたウォーキングとランニングを行うようにした。また、体力作りとして、毎朝、体育館もしくはグランドでゆっくりとウォーキ

ングやランニングを行うことにした。毎日の取り組みにより徐々に体力がついてきた。運動会等の短距離走の記録からも体力の向上がうかがえる（表１）。

年度	距離	タイム	秒速
R 4	70 m	33 秒	2.1 m
R 5	80 m	30 秒	2.6 m
R 6	80 m	23 秒	3.4 m
R 7	100 m	27 秒	3.7 m

＜表１　記録の変化＞

（4）北海道障がい者スポーツ大会への参加

Ｓさんが中学２年生の時、帯広にて「北海道障がい者スポーツ大会」が行われた。Ｓさんは体力も向上し、100mを休まず走り切ることができるようになっていた。授業中に疲れて眠ることもほとんどなくなった。そこで、本人と保護者に相談して大会に参加することになった。大会では、100m走と400mリレーに参加した。100m走では、最後まで全力で走りきることができた。400mリレーも第一走者としてしっかりと第二走者にバトンを渡すことができた。Ｓさんは競技をとても楽しんでおり、終始笑顔で参加していた。保護者もＳさんの成長に大変感激し、「次年度もぜひ参加させたい」と話していた（写真８）。



＜写真８　北海道障がい者スポーツ大会　帯広大会の様子＞

（5）陸上部の設立

Ｓさんの運動経験をもっと豊かにするために、今年度から「陸上部」を設立した。対象は小学部５年生以上とし、週に１回、放課後40分程度、陸上のトレーニングを行うことにした。陸上部の設立に関しては保護者も大変喜んでくださった。小学部１名、中学部２名（Ｓさんを含む）、指導者３名、合計６名での活動となった。

函館で開かれる北海道障がい者スポーツ大会の他にも、毎年９月に全道の盲学校４校による「北海道盲学校文化体育活動発表大会」もあり、それらの大会でよりよい成績を収めることを目標に活動を行っている（写真９）。練習時間は短いが、児童生徒はスタートの仕方や走る時のフォームなど、楽しく集中して練習に取り組んでいる。



＜写真９　陸上部の様子＞

活動の様子は、月に一度発行する部活通信「オビモーランナーズ」に写真等を掲載して、保護者にお伝えしている（資料１）。



＜資料１　陸上部通信「オビモーランナーズ」＞

（6）北海道障がい者スポーツ大会函館大会への参加

9月28日（日）、函館市千代台公園陸上競技場にて「第63回北海道障がい者スポーツ大会函館大会　陸上競技の部」が開催された。

この大会に向けて、Ｓさんが前年度の大会よりもより速く、よりかっこよく走ることができるように、陸

上部の時間を中心にスタートの練習を重点的に行った。

スタートはこれまでスタンディングだったものをクラウチングスタートに変更した。まずは教師の真似をして、「しゃがむ」「腰をあげる」「スタートダッシュする」動作の練習を行った。一連の流れが身についたところでフォームの細かな修正を行った。



＜写真１０　スタートの指導＞

Ｓさんはしゃがんだ状態の時に両膝が外側に向いてしまう傾向があった。そこで手を添えて、「膝をまっすぐ前に向けてしゃがむよう」に指導した（写真１０）。

また、練習時からスターティングブロックを使って練習を行った。スターティングブロックの使用も、大きな大会でなければなかなかできない経験であるために、ぜひ使用させたいと考え、練習に取り入れた。Ｓさんも積極的に練習に取り組んだ。本番ではしっかり膝を前に向けて、上手にスタートを切ることができた（写真１１）。



＜写真１１　スターティングブロックを使用してのスタート＞

大会当日は晴天に恵まれ、気温も高すぎず、好条件の中で競技を行うことができた。しかし、一つだけ不安な点があった。それは、100mスタート付近は、トラックのコーナーラインと、100mのラインが交差しており、100mの直線が非常に見えにくい状態になっていることであった（写真１２）。



＜写真１２　スタート付近のライン＞

Ｓさんにとってこのラインの交差は非常に理解しにくく、いつもはまっすぐに走れるのだが、当大会のような正式な競技場で行うと、まっすぐに走ることができなくなる。交差するラインに誘導されて、隣のレーンに行ってしまうのである。前回大会の時には伴走者がついており、伴走者の声かけとサポートによってラインからはみ出すことなく走ることができた。

しかし、今年度は自分の力で他競技者と共に競い合う経験をさせたいと思い、伴走者を付けなかった。事前に大会本部に連絡し、よりラインが見やすくなるように、白色のテーピングテープを点線部分が隠れるように貼ることができないか交渉したが、大会の運営上難しいとのことだったので、本番前の練習で確認することにした。

本番前に時間を見つけて、スタート後に真っ直ぐ走る練習を行った。予想通り、他のラインに誘導され左右にコースアウトしてしまったが、「足下を見ずに真っ直ぐ遠くをみること」を伝え、繰り返し練習した。徐々に真っ直ぐ走れるようになり、本番では一度もコースアウトすることなく、ゴールまで走り切ることができた（写真１３）。



＜写真１３　本番スタート後の様子＞

念願の金メダルを手にすることができて、本人もとても嬉しそうだった（写真１４）。



＜写真１４　金メダルを受け取り喜ぶＳさん＞

Ⅴ 成果と課題

1 STT の実践

STTの実践では、Ｓさんが積極的に用具の準備や後片付けを行い、STTを楽しみにしている様子が見られた。はじめは相手コートから転がってきたボールを返球することが難しかったが、徐々にボールの軌道を予測し、打ち返すことができるようになってきた。ゲームを通して、様々なスピードのボールに対応できるようになってきた。協応動作に関しては、返球の正確性が増したことから、能力が向上したと考えられる。課題としては、自分で移動してボールを打つ動作が身についておらず、手の届かないボールは見送ってしまうことが多かった。基本的なフットワークを指導し、自分で移動してボールを返球することができるようになると、さらに活動が楽しくなると思われる。

2 フィールドホッケーの実践

STTの反省を生かし、「自分から動いてボールを打つ」ことを指導した。指導者がＳさんから離れた場所にボールを送り、自分で移動してボールを返球することができた時には大いに称賛した。またボールの種類を配慮し、ボールスピードをコントロールすることで、自ら動くとより多くのボールを返球することができることを実感させた。ゲームの様子を見ると、自ら積極的にボールを追い、タイミングよくボールをとらえ、返球することができるようになった。課題としては、左右どちらでも打ち返せるように、体の向きの入れ替えが素早くできるなど、ボディーイメージをより高める必要があると感じた。

3 主体的な運動機会の創出

コロナによる学校機能全般の停滞、小規模校であるが故の運動機会の減少など、本校に在籍する児童生徒は、運動の機会に恵まれていたと言えない。しかし、コロナ後に学校機能が徐々に回復し、朝の体力作りなどを取り入れることで、児童生徒の運動の機会は増えていった。また、部活動の設立、北海道障がい者スポーツ大会への参加を通して、学校の授業時間以外の運動機会も増えてきた。部活動の活動時間は30分程度と短いものの、様々な運動要素を取り入れることで、Ｓさんの運動能力を引き出すことができたと思う。例えば、今までは筋力トレーニングで腕立て伏せを行う姿勢をとることができなかったが、毎回少しの時間でも繰り返し行うことで、上手に腕立ての姿勢を取ることができるようになってきた（写真１５）。


＜写真１５　腕立ての姿勢をとるＳさん＞

今年度の北海道障がい者スポーツ大会は函館で行われた。Ｓさんの家庭では、家族旅行も兼ねて大会に参加した。特別な支援を必要とする生徒にとって、義務教育終了後の運動機会の減少は大きな課題であると思われる。このような大会への参加をモチベーションとし、家族みんなで楽しみながら生涯にわたり運動を継続していって欲しいと心から願う。



＜写真１６　函館大会を終えて＞

論文 2

特別支援学校(知的障害教育校)児童が自ら取り組む“遊び”を通して

～特別支援学校小学部低学年の遊びを通した授業改善～

北海道札幌養護学校　教諭（小学部第１学年主任）　岩本　茉依
北海道札幌養護学校　教諭（小学部第２学年主任）　天内　幸乃
北海道札幌養護学校　校長　上村　喜明

Ⅰ　はじめに

北海道札幌養護学校は昭和33年に白石区平和通りに開校し、平成4年に現在の厚別区厚別町山本に移転した。令和10年度には開校70周年を迎える。

道内特別支援学校知的障がい教育校義務校の中では歴史が古く、道内の特別支援学校の代表校として歩んできた。児童・生徒在籍数の増加による狭隘化を受け、令和4年には高等部が完全分離移転し、本校舎は小中学部のみとなったが、現在も児童・生徒数は増加しており、令和7年9月現在、小中学部で現在198名が在籍している。札幌養護学校全体では、本校198名、札幌養護学校白桜高等学園（分校）135名、札幌養護学校共栄分校（分校）21名、計354名の児童・生徒が在籍している。本研究論文では札幌養護学校（本校：厚別区）の取り組みについて執筆する。

Ⅱ　札幌養護学校本校の教育課程

1　学校経営方針

学校経営方針は札幌養護学校３校を「札幌養護学校Group」として基本的に目指すところを共通に示した。学校経営方針については以下を学校教育目標（Group mission）として掲げた。

学校教育目標(Group mission)
“一人一人のよさ・可能性を
最大限に伸ばし、健やかで主体的に
学び続ける児童生徒が育つ学校”

そして、以下を学校の未来像（Group vision）とした。

学校未来像(Group vision)
“学校・家庭・地域の共育による
児童・生徒の確かな学びと
社会参加・自立を支える学校になる”

2　教育課程編成の方針

教育課程の方針は次のとおりである。

ア　学校全体として組織的、継続的に児童・生徒の教育を実施するために必要な教育計画であり、教育活動を進めていく上で基準となるもの。
イ　関係法令及び学習指導要領に基づき、児童・生徒一人一人の障がいの状態や発達段階及び学習上の特性に即し、地域や学校の実態を考慮しながら編成していくもの。
ウ　児童・生徒の可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指していくもの。
エ　児童・生徒の学習上の特性、学習履歴等を考慮し、教科別の指導と各教科等を合わせた指導を効果的に組み合わせて、取り組むもの。
オ　学校教育目標の達成を目指して、学部のつながりと社会を見据えた教育内容とするもの。

上記の５点を現在の教育課程（教育内容）に照らし合わせ、現在在籍している児童・生徒の状態に合わせていかなければならないと考える。

3　小学部の教育(学部目標)

小学部は１年生から６年生までと幅広く、児童の状態の差も大きい。小学部では次の学部のねらいとして教育活動に取り組んでいる。

ア　基本的な生活習慣が育つ。
イ　楽しく体を動かすことを通して丈夫な体が育つ。
ウ　いろいろな経験を通して、人との関わりを広げ、自分や他人に対する意識が育つ。
エ　人に伝える経験や伝わる喜びを通して、表現する力が育つ。
オ　たくさんの経験から興味・関心を広げ「やってみよう」という気持ちや態度が育つ。



＜写真１　小学部第１学年学習の様子
ボールプール＞

Ⅲ 小学部低学年の概要

現在、小学部低学年（第１・２学年）では、児童の発達年齢や段階を考慮して、生活単元学習の中で“遊び”に取り組んでいる。小学部１年生25名、小学部２年生20名の児童が在籍している。ほぼ全員が特別支援学校での学びが必要な児童であり、その中でも重度・重複障がいや特段の配慮が必要な児童が複数在籍している。

1 “遊び”を中心とした学習内容の検討

令和６年度の学校評価、年度末反省では、小学部１・２年生の障がいの状態等から認知や体の発達、人との関わり、コミュニケーションなど総合的な発達が必要なことから“遊び”の充実が必要であるとの意見・反省が上がった。そのことを踏まえ、令和８年度以降を見据え、小学部低学年（第１・２学年）で、現在の生活単元学習の中で取り組んでいる“遊び”についてさらに充実させるために“遊び”について授業改善に取り組むこととした。

2 “遊び”の年間指導計画の検討

昨年度まで取り組んできた内容をベースに“遊び”について年間指導計画（案）を立てた。今年度は授業の中の“遊び”を中心として内容を見直している。年間指導計画もその都度変更を加え、次年度以降に向けて進めている。

生活単元学習などの時数としてのカウントか、新しく遊びを特化した授業内容にしていくのかも含めて検討を進めている。

Ⅳ “遊び”について

1 直接的な経験を通じて学ぶ

遊びにはいろいろな種類の遊びがある探索的な遊び、創造的な遊び、構造的な遊び、非構造的な遊び、競技的な遊び、感覚的な遊びなど、それぞれが異なる形で学びを促進することやこれらの遊びが組み合わさることで、多面的なスキルと知識、身体的な発達が促され、身に付けることができる。

2 子どもの発達を支える

障がいのある児童は、障がいの状態から発達にもアンバランスさが見られる。子どもは、自発的な興味関心に沿い、遊びの中で主体的、意欲的に自分の周りの環境にかかわり、心身を働かせて活動を作り出して発展させていく。そこで児童の「発達」という視点が欠かせない。

児童とかかわる教職員は、児童の発達について理解し、指導・支援をすることが重要である。

〈年齢に応じた遊びの様子〉

およその年齢	遊びの様子
１歳	・物に見合った扱い方が多くなり、スプーンを口に入れたり、コップで飲むまねをしたりする。
１歳６か月	・物自体や物の用途に応じた扱い方が増え、おもちゃの自動車を走らせたりブラシで歯を磨くまねをしたりする。
２歳	・物を特別なものに見立てた単純なごっこ遊びが成立してくる。物と物を組み合わせ、ぬいぐるみに布団を掛けたり、人形に菓子を食べさせたりする。
３歳	・ストーリー性のある簡単なごっこ遊びが見られるようになる。人形を運転手にして配達ごっこをしたり、人形と一緒に食事ごっこをしたりする。
４歳～５歳	・多様な物を使ったままごと、お店屋さんごっこ、電車ごっこ等、より想像的なごっこ遊びに発展する。

〈遊び方の発達の例〉

遊び方	時期の目安	特　　徴
一人遊び	0 歳～1 歳頃から	一人で工夫しながら遊ぶ
傍観遊び	1 歳～2 歳頃から	他の子どもが遊ぶのを見ている
平行遊び	2 歳～3 歳頃から	同じ場所で同じ遊びをするが、互いの関わりは少ない
合同遊び	４歳頃から	3～4 人でやりとりしながら遊ぶ。役割分担等はない。
協同遊び	６歳頃から	遊びのルールや役割分担が現れてくる。遊びのテーマが明確で、ストーリー性のある展開が増える。



＜写真２　小学部第１学年　学習の様子
ボールプール＞

Ⅴ 取り組みの実際

本研究の対象を小学部第１学年と小学部第２学年とし、“遊び”を通して、学部目標や学校教育目標（Group mission）の達成、児童一人一人が育つ授業作りに向けて取り組んでいる。

小学部第１学年と小学部第２学年の児童を対象にこれまで取り組んできた遊びの授業を小学部低学年期が特に”遊び“が重要であると押さえ、さらに改善してい

く必要があると考えている。児童が主体的に自ら取り組む遊びを目指して進めている。

1 小学部第2学年の“遊び”の授業から

今年度は“遊び”に焦点を当てて授業を構成することとした。“遊び”に関わる授業の年間の計画を作成し取り組んでいる。

■“遊び”のみを取り上げて作成した年間計画（案）

	単元期間	題材名	主な学習活動
1学期	4/8～5/2	仲良く遊ぼう（他設定遊び）	エアトランポリン、三輪車キャタピラー、ミニトランポリンなど
	5/7～6/6	校庭遊具で遊ぼう	滑り台、ブランコ、ジャングルジムなど
	6/9～7/25	公園へ行こう（他設定遊び）	公園遊具
2学期	8/25～9/26	段ボールで遊ぼう	積む、くぐる、家作り、乗り物に見立てなど
	9/29～11/7	ゲームで遊ぼう（他感覚遊び）	キャスターボード簡単ラグビー、転がし遊びなど
	11/10～12/22	いろいろ感触で遊ぼう	小麦粉、片栗粉等の粘土、素材を使用して
3学期	1/16～2/13	雪で遊ぼう	雪上ゲームそり滑り
	2/16～3/24	光で遊ぼう	ブラックライト、蛍光塗料、風船、絵本の読み聞かせ

（1）児童の遊びの様子

学級編成の変更や転入生も入ってスタートした４月は、学級遊びでは明るい雰囲気の中、新しい学級の友達を意識したり、遊具を共有して遊んだりできる児童が多かった。学年の遊びでは４月は昨年度に経験したコーナー遊びを中心に行った。特にダイナミックに体を動かしたり、揺れる感覚を楽しんだりできるエアポリンを好む児童が多かった。





＜写真３　新聞紙遊び、トンネルくぐり＞

（2）児童の遊びの変化

昨年度から引き続き取り組んでいる遊びについては安心して遊びに取り組めている様子が見られた。特に校庭の遊具遊びでは、自分からジャングルジムに登ろうとしたり、アスレチックやターザンロープに挑戦しようとしたりする姿が多く見られた。また、新聞紙遊びでは、破いたり、丸めたり、穴を開けたりしながら、自分で新しい遊び方を生み出す児童も出てきた。

前年度は、各学級で順番にコーナーを回る遊びをしていたが、今年度は１学期末の遊びで、児童全員が一斉に自分の好きなコーナーを回れるように設定してきた。安全に遊べるように遊具を工夫したり、歩行の不安定さや他児への不適切な関わりになってしまう児童にも十分留意をしたりしながら取り組んできた。児童たちは、いつも以上に意欲的に、笑顔で躍動感にあふれた学習となってきた。

（3）遊びの学習の工夫(手立て)の変化

安全面に配慮しながら児童が主体的に体を動かし、期待感をもって取り組める遊びの題材を豊富に取り入れてきた。１学期末からコーナー遊びに自由に遊べる形にしたことで、児童の主体性がより発揮でき、発想を巡らせながら工夫して遊ぶ児童が多く見られた。

今後はさらに児童同士が誘ったり誘われたりする関わりを促す場の設定の工夫を考えている。



＜写真４　好きな遊びコーナーで遊ぶ様子　トンネル＞

2 小学部第1学年の“遊び”の授業から

今年度は“遊び”に焦点を当てて授業を構成することとした。“遊び”に関わる授業の年間の計画を作成して取り組んでいる。

■“遊び”のみを取り上げて作成した年間計画（案）

	単元期間	題材名	主な学習活動
1学期	4月～5月	みんなで遊ぼう	ブランコ、キャスターボード、ハンモック、ボールプール、エアポリンなど
	6月～7月	お外で遊ぼう	校庭遊具遊び、水遊び、公園遊具遊びなど
2学期	8月～9月	お外で遊ぼう	
	10月～12月	ゲームで遊ぼう	リレーゲーム、ボウリング、段ボールなど
3学期	1月～3月	雪で遊ぼう	雪遊び、そり、光遊びなど

（1）児童の遊びの様子

入学当初の遊びでは、時間や順番を守ることなどルールや約束の理解が難しかったことに加え、経験や性格、特性などの違いにより、遊びへの興味関心や参加の状況差が大きかった。また、教師が主導の設定遊びを中心に取り扱っていたため、児童が主体的に遊びへ

向かう姿は少なかった。

（2）児童の遊びの変化

学校生活が定着し、教師の指導・支援を受けながら、集団で遊ぶ上でのルールや約束を理解しながら遊ぶことができるようになってきた。また、設定された活動場所の範囲内で、自分の遊びたい遊具や物を使ったり、場所に行ったりして、自ら遊びを探求、発展させようとする姿が見られるようになってきた。



＜写真５　新聞コーナーでの様子＞

（3）遊びの学習の工夫(手立て)の変化

遊ぶ場所や順番、時間をすべて指定した教師主導の設定遊びを主としていた当初から、遊ぶ範囲や遊具を設定した上で、教師を定点に配置し、児童の主体的な遊びを引き出すという方向性へ方針の転換を行った。全て指導者主導での遊びではなく、「児童が自由に遊ぶことを尊重する」という共通理解のもと、教師が同じ目線で一緒になって遊び、充実感を共有しながら関わることを手立ての一つとして、児童の主体的な遊びを支え、児童自身が考えて遊ぶ姿を引き出し、遊びを通して学ぶという視点を新たにもつことができた。





＜写真６
好きな遊びコーナーで遊ぶ様子
上 キャスター滑り台
下 ブランコ＞

Ⅵ 成果と課題

1 成果

（1）小学部第1学年と第2学年の違い

今年度“遊び”に焦点を当てて、小学部低学年の学習に取り組んできた。その中で第１学年においては、時間や順番を守ることなどのルールや約束などの理解・定着が難しかったこと、遊びへの興味関心や参加状況の差が児童間に見られたが、第２学期以降から集団で遊ぶ上でのルールや約束を理解しながら遊ぶ様子が見られてきたり、自分の遊びたい遊具やものを使ったり、遊びたい場所に行ったりして、自らの遊びを探求、発展させようとする様子が見られてきた。

第２学年においては４月は学年が変わり新しい友達や新しい学級に変わる時期である。その中でも友達を意識したり、遊具を共有して遊んだりできる児童が多く見られた。また、ダイナミックに身体を動かしたり、揺れる感覚を楽しんだりできる児童が多く、中には、自ら「(もう１回やってほしい) お願い」を表現する児童も見られている。第２学年になると新しい遊びや遊具に挑戦しようとする児童の姿が見られてくる。そして、自分から新たな遊び方を生み出そうとする児童も見られてきた。

第１学年児童と第２学年児童での成長、発達が見られ、現在取り組んでいる“遊び”の成果が見られた。

（2）遊びの学習の工夫、指導体制の変化

これまでは教師主導型で遊びの指導を進めることが多かった。児童の安全面に多くの配慮を有していた。そこで「児童が自由に遊ぶことを尊重する」という姿勢を教師間で共通理解し、児童の期待感を持たせること、遊びの題材を複数取り入れ、児童が「遊んでみたい」という意欲をもち選択して遊べるように取り組んだ。教師を児童の状態に応じて配置するが、常に児童に着くのではなく「遊び場」に教師を定点配置しその場に遊びに来る児童全てに目を配り、安全面の確保と児童が主体的に遊びができるように視点を広げた。教師が児童と同じ目線で、一緒になって遊び、充実感や達成感を共有しながら関わるように改善した。

児童の主体的な遊びを支え、児童自身が考えて遊ぶ姿を引き出し、遊びを通して学ぶことが大切であるという視点を新たに共有することができた。

2 課題(今後に向けて)

(1) 低学年の発達段階に応じた指導内容の整理に向けて

低学年の児童の発達の状態において、学習指導要領各教科の具体的な内容の１段階との関連が多い。遊びは生活科を主として位置づけられていると考える。遊びの本質は、主体的（自発的）な活動自体を楽しむ活動として展開されていく中で、各領域、各教科の内容が様々な形で統合されて指導される形態である。

低学年の児童の状態の発達をしっかりとアセスメントし、どのような“遊び”の内容（授業）を設定することができるかである。そのためには、“遊び”の年間指導計画を整理する必要がある。

知的障がい教育の必要な児童の発達を押さえると、発達が未分化な段階にある本校の児童には“遊び”を中心とする活動の中で統合されて経験されると考えるため、教育課程の整理が必要になる。

(2)“遊びの指導”から“生活単元学習”“作業学習”へのつながりの深化

小学部低学年の“遊び”を中心とした学習は、生活科及び生活科を中心とした合科指導、小学部中学年以降への発達の分化による思考の発達などから各教科の学習につながる。知的障がい教育で有効な“各教科等を合わせた指導”の形態（各教科を学ぶための方法・手立て）は「日常生活の指導」「遊びの指導」「生活単元学習」「作業学習」がある。

知的障がい教育が必要な児童において、指導の形態としての遊びは、発達が進むにつれて次第に課題性を強め、「生活単元学習」へと発展していくことになる。その意味では遊びの指導は、生活単元学習と最も関係の深い指導の形態とも言える。

現在、本校で取り組んでいる「生活単元学習」や「作業学習」を見直し、“遊び”を含めた教育内容の整理に取り組む必要がある。

Ⅶ まとめ

子どもたちが主体的に取り組む“遊び”の授業を通して、小学部高学年、中学部、高等部そして、社会自立・参加につながる“遊び”の授業の充実が図れる一助にしたいと考えて取り組んだ。

子どもたちの状態から、ある程度提示された題材に向かい、遊べるようになってきているものの、一人だけで楽しんだり、遊びが広がらない、自ら人と関わって遊ぶことが少ない等といった課題が挙げられる。子どもの状態から考えると生活そのものが遊びといわれ、遊びの中で遊びを通して発達していく子ども（特に発達年齢１歳～３、４歳）にとっての遊びの意義、重要性を押さえる必要がある。障がいのある本校の児童（特に低学年段階）にとって、主体的（自発的）に何かに取り組もうとする力に弱さがあり、自ら遊んだり、遊びを発見したり、組み立てたりすることに苦手さが見られる。遊びが狭く、他と関わりをもった遊びが難しい等の状態には遊びの学習の役割がより重要となると考える。遊ぶということ、楽しいということは、大人にとっても大きな意味がある。児童は楽しかったことや何かを成し遂げた満足感、成就感と言ったことが自信となり、次の課題や困難なことに対しても向かっていく気持ちや意欲となると考える。それは生涯にわたって楽しいという気持ちや満足感というものが生きる上での生活全般の支え、さらには生きる力につながっていくと考える。低学年段階の遊びの変化は目には見えにくい面もあるが大切な心をも育てている重要な役割を担っているということができる。

小学部の低学年の早い段階で、将来の生活の基礎になる力を遊びを通して養い、高学年、中学部、高等部、そして社会へとつながるよう常に授業や教育内容の検討を進めていく必要がある。

今回、小学部低学年の遊びの授業を通して、改めて、子どもたちに必要な力、授業改善、教師の関わり方等捉えることができた。よりより教育がよりよい社会を作ることができるよう研鑽を積み重ねる必要があると考える。

このような機会をいただけたことに心より感謝申し上げるとともに、教職員はもとより家庭、地域と協力してより一層児童生徒一人一人のよさ・可能性を最大限に伸ばし、健やかで主体的に学び続ける児童生徒が育つ学校を目指していきたい。

【引用、参考文献等】

1）特別支援学校 遊びの指導ガイド/平成29年3月/秋田県教育委員会
2）遊びの指導 指導内容段階表/令和元年7月/大分大学教育学部附属特別支援学校
3）遊びの指導の手引/平成5年/文部省
4）北海道鷹栖養護学校実践研究/平成3～平成6年度

論文 3

フットサル部指導実践
～「わかる」「できる」「やってみる」を増やす工夫～

北海道紋別高等養護学校　教諭　岡野　俊平
北海道紋別高等養護学校　教諭　酒井　　駿

Ⅰ 研究の目的

本研究は、部活動におけるフットサル指導を通して、生徒が「わかる」「できる」「やってみる」と実感できる場面を意図的に増やすための指導上の工夫を明らかにすることを目的とする。

近年、部活動の教育的意義が再評価される中で、技能の習得だけでなく、生徒の主体性や協働性を育む指導が求められている。特にフットサルはルールが比較的簡潔で、少人数でのプレーが可能なため、初心者でも取り組みやすく、達成感を得やすい競技である。

技術習得だけでなく、主体的な参加や協働的な学びを促すことを重視し、視覚教材の活用、段階的な技術指導、生徒同士の協力活動などの工夫を通じて生徒の意欲や自信の向上を図る。これにより、部活動が生徒の成長を支える教育的な場としてさらに充実することを目指す。

Ⅱ 研究の内容

本研究では、以下の視点から指導実践を検討する：

①技術習得を段階的に促す練習メニューの設計
②生徒の「わかった」を助ける視覚的・体験的な指導方法
③「できた」という成功体験を積み重ねる場面の創出
④生徒同士の協力や振り返り活動を通じた「やってみる」に繋がる学びの深化

これらの工夫を通じて、生徒が自ら挑戦し、仲間とともに成長する部活動の在り方を探求する。

Ⅲ 研究の方法

1 技術習得を段階的に促す練習メニューの設計

(1) 基礎ボールコントロール漸進

①目的：タッチの安定と視線確保。
②段階：A　短いその場タッチ（10 回）
　　B　移動しながらタッチ（10 回）
　　C　コーン回避を含む連続移動（20 タッチ）。
③成功基準：各段階で２回中１回以上クリア。
④指導キー：視線を上げる、コンパクトタッチ。

(2) パス精度とタイミングの段階化

①目的：距離別の精度と受け手の動き出し。
②段階：4m（基礎）→8m（ワンツー有）→12m（軽度の守備圧）。
③成功基準：各距離で規定回数の連続成功。
④指導キー：踏み込みの強さ、パス後の動き出し。

(3) 1 対 1 仕掛けの漸進導入

①目的：フェイント選択と判断。
②段階：静止守備を抜く→動く守備に対応→スピード変化＋ターンでゴール到達。
③成功基準：3回中３回の突破または有効シュート。
④指導キー：１つのフェイントに集中、観る位置。

(4) ポジショニングと連携の段階化ミニゲーム

①目的：役割理解とスペース利用。
②段階：役割固定（指示多）→役割交換（指示減）→自由役割でミッション達成。
③成功基準：ミッション達成率・連続パス回数の向上。
④指導キー：簡潔な役割カード、コート内のターゲット設定。

(5)シュート決定力のマイクロゴール練習

①目的：決定機での落ち着きと精度。
②段階：近距離確実化→コントロール→プレッシャー下でのシュート。
③成功基準：段階ごとの成功率（例 2/3）。
④指導キー：軸足位置、シュート前の目線。

2 生徒の「わかった」を助ける視覚的・体験的な指導方法

(1)ピクトグラム提示法

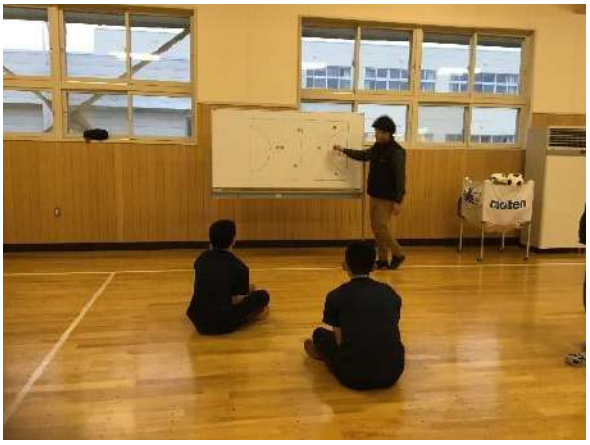
①ピクトグラムでルール、役割、動きの順序を提示

する。

②選手のアイコン：ポジションや役割に応じて、選手を異なるマークで表現する。

③矢印：パスやドリブルの方向、選手の走るコースなどを矢印で具体的に示す。

④動きのパターン：オフェンス（旋回、パラレラなど）やディフェンス（プレス、カバーなど）の動きのパターンを図として描き、全体像を共有する。



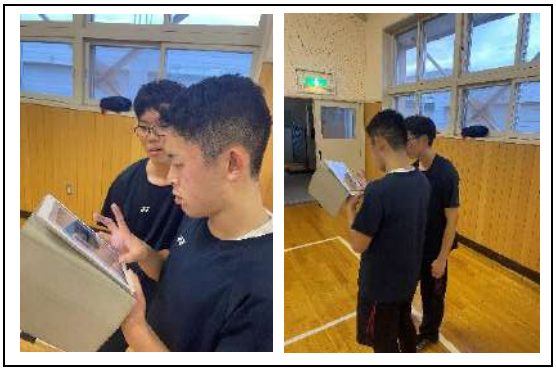
＜写真１　ヒストグラム提示法＞

（2）動画デモとスロー再生フィードバック

①指導者や上達例の短い動画を見せ、キーポイントをスロー再生で示す。

②生徒自身のプレイをスマホで撮り、成功場面を抜粋して即時に見せる。

③１～２分以内に要点をまとめ、視覚と音声で「何を見るか」を指示する。



＜写真２　動画デモとスロー再生フィードバック＞

（3）ライン･マーカーによる空間可視化

①コート上にカラーコーンやテープで動線、パスの通り道、守備ラインを視覚化する。

②具体的タスク（「ここに入ってパスを受ける」等）を場で体験させる。

③段階的に線を減らして最終的に自由な判断へつなげる。



＜写真３　コート上にカラーコーンやテープで動線、パスの通り道、守備ラインを視覚化する＞

（4）手順分解とマイクロタスク練習

①技術を細かい動作単位に分解し、視覚図（動きの矢印）を提示して順に練習させる。

②各マイクロタスクで成功基準を明示し、達成すると次へ進む仕組みを作る。

③成功基準は定量化（３回中２回成功など）する。

（5）カラー別ペアワーク／小グループ体験

①色や番号でグループ分けし、視覚的に役割を割り当てた上で反復練習を行う。

②各グループの動きを観察し、ホワイトボードで即座に改善点を図示する。

③短時間サイクル（３～５分）で多くの体験機会を与える。

（6）即時フィードバック用ミニ掲示(チェックリスト)

①コーチの評価項目を簡潔な「できた/改善」チェックリストにして視覚的に掲示する。

②生徒は自分の番号を確認して次回の目標を視覚で把握する。

③項目は３つ以内に絞る。

④体験→視覚確認→再体験のサイクルを繰り返すことで「わかった」を定着させる。

３　「できた」という成功体験を積み重ねる場面の創出

(1)マイクロゴールチャレンジ

①内容：短時間で達成可能な小目標（例：３分間で５回正確なパス成功）を設定して繰り返す。

②成功基準：目標達成で即「できた」判定と称賛を行う。

④目標は個別レベルで調整し、達成履歴を掲示する。

（2）レベルアップ式練習メニュー

①内容：A→B→Cの段階を用意し、各段階クリアで次に進める仕組みを作る。

②成功基準：各段階に明確な達成条件（回数・精度）を設ける。

③各段階は短時間で完了するように設計する。

（3）即時ポジティブフィードバックタイム

①内容：良い動きがあればその場ですぐ個別に肯定的な言葉と簡単な改善指示を与える。

②成功基準：フィードバック後の次のトライで改善が見られることを重視する。

③実施のコツ：

褒める点を具体的に伝える

（例：「いいコントロール、次は視線を上げて」）。



＜写真４
即時ポジティブ
フィードバックタイム＞

（4）ハイライト動画の共有

①内容：練習や試合から短い成功シーンを切り出しチームで視聴して称賛する。

②成功基準：生徒自身が自分の良い場面を確認できること。

③1 分以内・5 シーン以内に絞る。

④成功の振り返りを必ず数十秒行い、次の小目標を決めさせる。



＜写真５
ハイライト動画の共有＞

（5）ペア・グループでの相互承認制度

①内容：ペア練習後に互いの「今日の良かった点」を１つ書いて交換する。

②成功基準：互いに認め合う習慣が定着すること。

③書きやすいフォーマット（３行程度）を用意する。

4 生徒同士の協力や振り返り活動を通じた「やってみる」に繋がる学びの深化

（1）ローテーション観察とフィードバックペア

①内容：生徒をペアにし、一方がプレイ、もう一方が観察者役で良かった点と改善点を１つずつ記録。

②手順：１プレイ（１～２分）→観察者が短く口頭でフィードバック→役割交代→全体で共有。

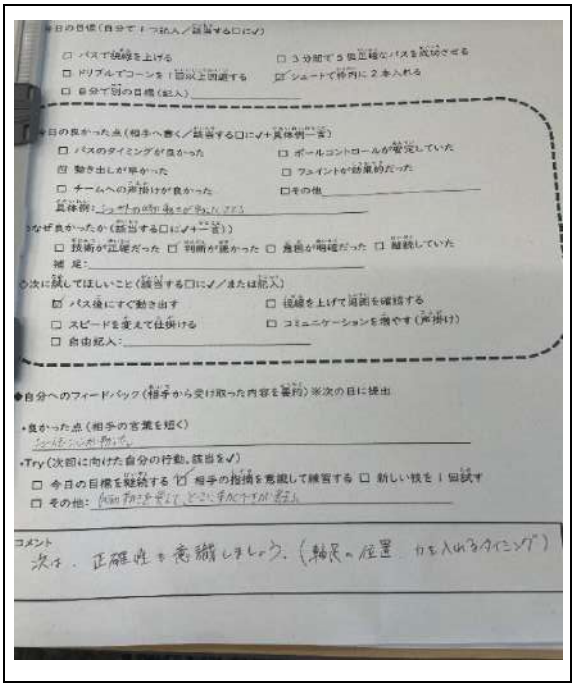
③狙い：仲間の視点から学びを得ることで次のトライに繋げやすくする。

（2）KPTによる即時振り返りサイクル

①内容：Keep Problem Try（Keep：継続すべき良かった行動や仕組み。Problem：改善すべき課題や障害。Try：次回以降に試す具体的行動。）の形式で練習後すぐに短時間で記入・共有する。

②手順：練習終了→各自３０秒で記入→小グループで各１点ずつ共有→Try を次の練習で実行。

③狙い：振り返りを行動計画に結びつけ「やってみる」を習慣化する。



＜写真６　KPT による即時振り返りサイクル＞

(3) ピアティーチングセッション

①内容：生徒が短い「教える時間」を持ち、教える側の準備と教わる側の実践を交互に行う。

②手順：教える内容を3分で準備→2分の指導→観察者が改善点を提示→交代。

③狙い：教えることで理解が深まり、自ら試す意欲が増す。

④振り返りは必ず次の実践につなげる明確なTryを設定する。

⑤個人差に応じて役割や基準を調整し、成功体験を確実に積ませる。



＜写真7　ピアティーチングセッション＞

Ⅲ 実践研究の成果と課題

1 成果

ピクトグラムやライン可視化の導入により、生徒が動きの意図や役割を言語化する場面が増加した。ペア観察やピアティーチングを通じて生徒からの改善提案や自主的な練習案が頻出し、相互承認制度により肯定的な声掛けが日常化して練習の雰囲気が前向きに変化した。これらは学習意欲とチーム内の心理的安全性の向上に寄与したと考える。

2 指導実践から得られた教育的効果

体験→視覚確認→再体験の循環が定着し、短時間での理解定着が促進された。段階基準を個別に調整することで初心者と経験者が同一練習内でそれぞれ達成感を得られ、観察・フィードバック活動は「やってみる」への心理的ハードルを下げ、挑戦回数と自己修正の頻度を高めた。

3 運用上の有効性と実践的示唆

3～5分の短サイクル設計は集中力を維持しつつ多様な成功体験を提供する点で有効であった。ピクトグラムや短尺動画は準備時間に対する効果が高く他競技への転用も容易である。一方、指示を短く一つずつ与える運用は指導者の要点整理能力に依存するため、指導者が実践効果を左右する。

4 課題と制約

成功基準に主観性が残り評価者間で判定のばらつきが見られた。短サイクル運用や動画編集などの準備に時間を要し顧問教員の負担が増加した点も課題である。実践は中期的検証に留まり年度を跨いだ長期定着は未確認で、極端な個人差への対応にも追加工夫が必要である。

5 今後の改善案と研究の展望

観察チェックリストの詳細化と複数評価者による信頼性検証を行う。動画編集テンプレートや簡易フィードバックツールで教員負担を軽減し、学期・年度単位の長期追跡調査で技能定着と主体性の持続性を検証する。練習段階の自動判定や個別目標提示を支援する簡易ツールや指導者研修も検討する。

6 結論

段階化された練習メニューと視覚・体験教材の併用は、生徒の「わかる」「できる」「やってみる」を増やす上で有効であることが示された。評価の標準化、教員負担の軽減、長期的定着の検証を次段階の重点課題とし、これらを組み込んだ実践と検証を進めていく。

【引用・参考文献等】

1）市谷聡啓、新井剛：カイゼン・ジャーニー、たった1人からはじめて、「越境」するチームをつくるまで 、翔泳社、2018/2/7

2）木暮賢一郎：フットサル戦術　トレーニングデザイン～Fリーグ優勝チームが実践する勝利のメソッド～ 限られた戦力・時間・場所で最大限のパフォーマンスを引き出す、誠文堂新光社、2017/11/16

3）須賀雄大、北健一郎：FUTSAL NAVI SERIES＋日本一監督が教える完全版フットサル速効マニュアル220―10分で分かる勝率200%アップのポイント付、ガイドワークス、2014/03

論文 4

地域とともに「パークゴルフプロジェクト」
～スポーツを通して地域と共に～

北海道札幌養護学校白桜高等学園　指導実習助手　西村　信弥

Ⅰ はじめに

1 本校の概要

北海道札幌養護学校は、昭和33年（1958年）5月4日札幌北高等学校における第1回入学式の挙行から令和7年（2025年）で67年目を迎える。養護学校教育義務制実施後、分教室・分校の設置や分離、そして開設など、社会や時代の情勢に応じて変化を繰り返し、現在は札幌市厚別区に本校（児童生徒数196名）、北広島市共栄に共栄分校（児童生徒数22名）、札幌市白石区に白桜高等学園（生徒数134名）を設置し、札幌養護学校グループ3校（児童生徒数352名）で教育活動を展開している。

2 白桜高等学園の概要

本校高等部は義務教育校併設として平成10年に開設された。しかし、児童生徒の急激な増加に伴う校舎の狭隘化により高等部は小・中学部と分離することとなり、令和3年度に北海道札幌白陵高等学校の2階に白桜高等学園として移転した。今年度（令和7年度）で5年目を迎える（令和7年度：普通学級15、重度重複学級6、訪問教育学級3）。

在籍生徒は札幌養護学校中学部の他、札幌市内の中学校特別支援学級を卒業した生徒が大半を占めるが、近年は札幌市外の中学校からの入学も見られるようになってきている。

3 高等学校との関係

小・中学部に併設された高等部が狭隘化を理由に高等学校と校舎を共有する形で移転したのは白桜高等学園が道内初である。

生徒は重度重複障がいのある生徒から単置高等部（高等支援学校）に相当する生徒まで、幅広く在籍している。教室は高等学校の普通教室を半分に仕切って使用している。生徒7～8名、教員2名が入る空間としては狭く感じている。

高等学校とは週に１回教場（第1体育館、第2体育館、格技場、グラウンドその他）の調整会議を行っており、調整会議を行わないと両校の時間割作成や教育活



動に支障をきたす状況である。移転・校舎同居から5年目になり、高等学校の校長をはじめ、教職員の理解も少しずつ得られてきている。また、高等学校も学級減が続いている状況であり、生徒の確保に様々な取組を行っている。

そのような中、この5年間、両校の理解のもと進めてきた取り組みと地学協働の視点から、障がいのある生徒のインクルーシブ教育・共生社会への挑戦の一環として地域と共に取り組んだ共働事業「パークゴルフプロジェクト」の実践をまとめる。

Ⅱ 地域とのあゆみ

1 学校運営協議会（CS）

本校では、令和4年度から学校運営協議会（以下CS）を設置した。札幌養護学校の分校として3名の専属委員に協力をいただき、専門的知見から学校運営について様々な助言をいただきながら進めてきた。



＜写真１　地域との共働作業＞

委員を講師に招いて「卒業後の進路」「障がい者雇用」についての研修会や、町内会の方々と一緒に地域の公園の環境整備活動（除草）を行う「地域共働作業」等、積極的に地域連携を行ってきた。その中で令和6年度の CS において、町内のパークゴルフ同好会との連携について提案があり、連携事業ができないか検討を進めることとなった。

2　パークゴルフ設定の理由

令和7年度から「総合的な探求の時間」に「クラブ」としてパラスポーツの活動を設定した。この取組は、インクルーシブ教育、障がいのある者とない者が共に学ぶことを通して、共生社会の実現に貢献しようという考え方に基づいて、白桜高等学園のグループビジョンに盛り込まれている。そこで、種目を選定する際に CS で提案のあった「パークゴルフ」について検討し、地域連携事業として「パラスポーツクラブ「パークゴルフ」を設定した。

3　パークゴルフ実施に向けた課題の整理

「パークゴルフ」実施に向けて、課題の整理を行い、実施可能か検証した。活動場所や使用する用具、生徒の実態に合わせた形式で実施が可能なのか等を一つ一つ検証し、以下の⑴～⑷について活動環境を整備した。



＜写真２　パークゴルフ同好会と対面＞

(1) 用具

週１回、45分の授業の中で効率的にスキルアップを図るためには、参加生徒分（15名）の用具「パークゴルフクラブ」「ボール」「ティー」「マーカー」が必要となる。生徒人数分を揃えることは困難だったため、パークゴルフ同好会に打診したところ、同好会が所有する用具から人数分の用具を貸与していただけることとなった。



＜写真３　用具の借用＞

(2) 活動場所

まずは学校のグラウンドで練習し、最終的にはパークゴルフ場で実際にプレー（ラウンド）することを目標に設定した。そのため、近隣のパークゴルフ場での活動を模索し、「東米里ゆめの里パークゴルフ場」での活動を計画した。課題は、①一般の利用者も使用している中で生徒たちの優先使用が可能なのかということ、②生徒たちが使用に関するルール、マナーを守って利用できるかという２点であった。その課題についてパークゴルフ同好会に相談した結果、生徒の活動時間は9ホール貸し切りで対応可能となり、同好会の方がルール・マナーについてはサポートしていただけるということになった。

活動は学校のグラウンド、学校近隣のパークゴルフ場、雨天時は室内で行った。活動初期は室内でパークゴルフについて学び、学校のグラウンドで基本練習を行った。中期から後期には近隣のパークゴルフ場での実践練習を行った。

東米里ゆめの里パークゴルフ場
18 ホール・998YARD･PAR66
札幌市白石区東米里 2060

(3) 移動手段

一時限（45分）の中で学習時間を確保するためには、往復の移動にかかる時間は10分以内と想定した。車両での移動は困難であり、移動手段は徒歩に限られたこと、更には安全性が確保されている経路という条件の中では「東米里ゆめの里パークゴルフ場」が最も適した場所にある唯一の活動場所であった。学校から600ｍ（徒歩で6分程度）、道路の横断も１カ所で現地に移動できる、徒歩で移動することとした。

（4）パークゴルフ同好会との関わり

「東米里パークゴルフ同好会」は会員160名、役員13名で構成されており、パークゴルフ場の管理、大会の運営などを行っている。また、利用者に対してパークゴルフの指導や助言も行っている。本校とはパークゴルフプロジェクトで初めて交流を行った。

令和7年１月から打ち合わせを重ね、4月に「地域共働活動パークゴルフプロジェクト」の実施計画（案）を作成した。活動については基本的な部分（打つ、ルールを知る）は学校で行い、パークゴルフ場での活動についてはパークゴルフ同好会の方に実技、ルールについても教えてもらいながら進めることとした。

Ⅲ 生徒の実態

対象生徒は白桜高等学園1年生から3年生までのパラスポーツクラブの希望生徒15名である。比較的障がいの程度の軽い生徒から、重度の生徒まで参加している。運動（パークゴルフ）が主な活動ということで、運動に興味があり、体を動かすことが得意な生徒が多い。一方で、行動面、精神面に問題があり、気持ちのコントロールが難しい生徒や、勝敗に対して執着が強い生徒がいるなど、多様な実態構成となった。

Ⅳ 生徒の活動

1 パークゴルフを知る

「パラスポーツクラブ」での活動はパークゴルフがメインであるということは事前に周知していたが、参加生徒はパークゴルフ未経験の生徒が多く（経験者は15名中3名）、まずはパークゴルフを知るところからのスタートとなった。パークゴルフの動画（ラウンド編・レッスン編）を作成し、初回の授業で視聴した。動画を見て、様々な反応があったが「クラブを持ってボールを打つ」「ホール（カップ）に向かってボールを打ちながら進む」「ホール（カップ）にボールは入ったら終了」という大まかな動作要領の理解を得られた。



＜資料1　ミニブック（ルール解説本）＞

2 ルール、マナーを知る・体験する

ルール説明については、パークゴルフのルールブックを基本とし、本校生徒が理解しやすいように一部ルールを変更して行った。

技術的なルールと、それ以外の安全面、ゴルフ場の使用についてのルールを分けて、技術的なルールの指導は主にパークゴルフ同好会の講師に依頼し、学校での事前学習では安全面、パークゴルフ場の使用について説明した。参加生徒に実態差があることから、ABCの3つの実態別グループに分けてそれぞれ理解度や力量に合った形でルールを提示した。



＜写真４　グループ別のスイング練習＞

（1）Aグループ

ルールブックを基に、口頭での説明を中心に行い、特に注意が必要な安全面については動画も活用しながら確認した。このグループはクラブの中心的メンバーが多く、パークゴルフ場でのラウンド練習の際にはマーカー（記録員）も兼ねる生徒が多かったため、ルールだけでなく、マナーについても説明した。

（2）Bグループ

ルールブックを基に、動画を見て実際に体験するという動作を繰り返し行うことでルールの理解・定着を図った。

（3）C グループ

ルールブックを基に、教師と一緒に実際に体を動かしながら体験を通してルールの理解を深めた。

3 スイングを知る・体験する

スイング動作の指導に際しては、「知る」「見る」「する」の３つの段階に分けて指導した。「知る」「見る」で

は、主に模範スイングと手本となる動画を活用して視覚的理解を深め、併せて安全面の配慮事項を伝えた。「する」では、生徒たち個々のスイングイメージを大切にしながら、基本スイングに近づけるように反復練習をしてスイング動作を覚え、実際にボールを打つことができた。



＜写真５　グループでのスイング練習＞

Ⅴ スコア記入

取り組みの最後に大会でプレーすることを目的としていたため、自分のスコアをスコアカードに記入することが求められる。スコアカードを記入しやすいようにカードを大きめに作成し、打った数をチェックし、そのチェックの数で打数がわかるように工夫した。しかし、打ちながらの打数確認は難しく、全員が自分のスコアを記入しながらプレーすることは困難だった。そのため、競技委員を配置してスコアの確認と記入のサポートを行いながらプレーした。

Ⅵ スイング動作「振り子運動を使った距離感覚」

パークゴルフを行う動作の中で最も難易度が高い動作は用具を使ったスイング動作である。道具（クラブ）を使ってボールを打つという動作は、ボールが静止しているにもかかわらず、なかなか思うようには当たらない。また、力の強弱や調節によって距離感を整合するには、視覚情報をはじめとする感覚を統合し、身体を協応させる必要がある。

ここでは、生徒のボールコントロールに効果的だった「振り子運動を利用して力の強弱をコントロールする方法」を紹介する。

1 最大値と最小値

実際のボールを打って、強くスイングしたときの飛距離と弱くスイングしたときの違いを体感する。そして、スイングの違いを考えさせ、強弱の感覚を意識させる。

2 平均値

強弱の感覚が意識できたら、次のステップは一定の力で同じ動作を繰り返す。動作の再現性と振り子運動の基礎となるクラブ振り幅を意識させる。

3 時計の文字盤の活用

再現性が意識できたら、次のステップはクラブの振り幅を時計の文字盤に合わせて「〇時～〇時までの振り幅で」といった表現で振り幅を意識させる。遠くへ飛ばしたい時はクラブの振り幅は12時～12時、短い距離でカップをねらうときには7時～5時というように、振り幅でボールの飛距離をコントロールすることができるようになった。



＜写真６　時計の文字盤６時にセット＞



＜写真７　時計の文字盤　７時～５時の振り幅＞



＜写真８　時計の文字盤　９時～３時の振り幅＞

Ⅶ パークゴルフ大会

9月29日（月）に「東米里ゆめの里パークゴルフ場」にて第１回校長杯パークゴルフ大会を開催した。クラブに所属している生徒15名とパークゴルフ同好会の方がサポーター兼競技委員として参加して行った。

ルールは5ホール（PAR20）のストロークプレーで実施し、生徒達は練習の成果を発揮し、覚えたルール・マナーを守って楽しくプレーすることができた。

優勝スコアは24ストロークと予想以上に良いスコアとなった。2位は同スコアでプレーオフとなり、全員が見守る中で行われた延長ホールは、長いバーディーパットを沈めた生徒が劇的なウィニングショットで決着をつけた。



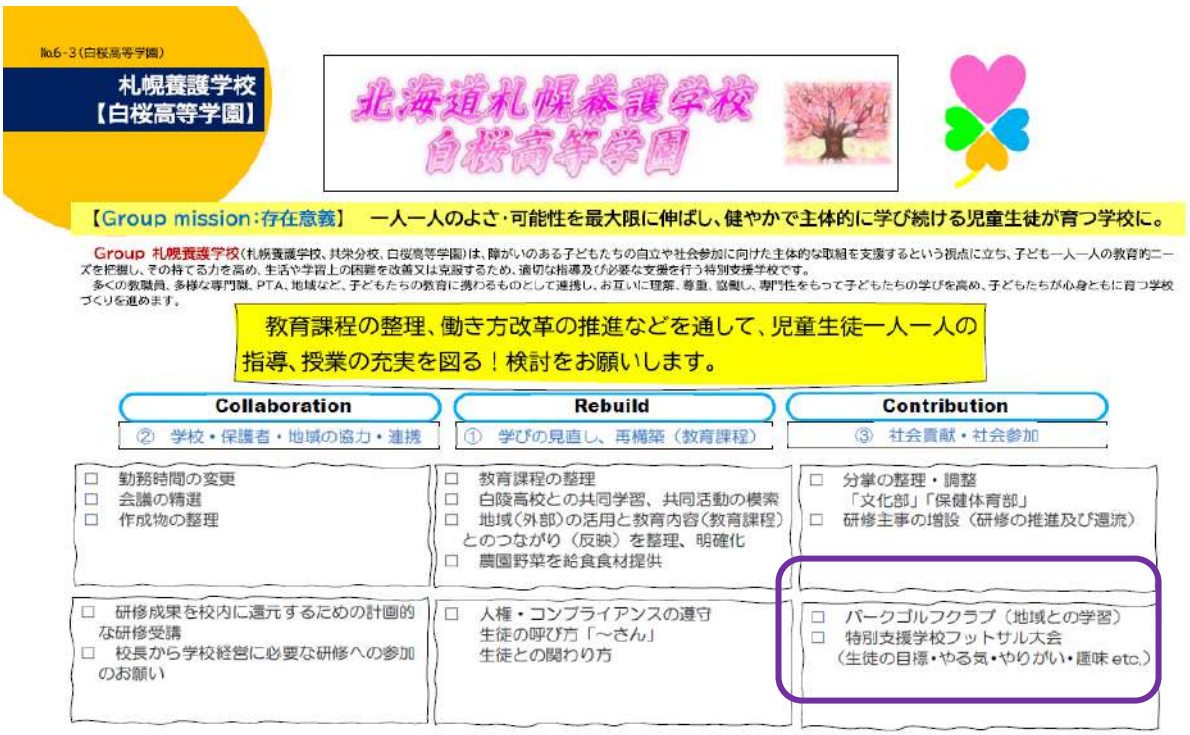
＜写真９　校長杯パークゴルフ大会　開会式＞



＜写真10 校パークゴルフ大会　プレーの様子＞

Ⅷ 地域のちから

このプロジェクトを通して地域との共働事業の素晴らしさ、地域の方々の本校への強い思いをさまざまな機会で感じることができた。事業の立案、計画の検討、活動場所の調整、用具貸与等、地域とのつながり、地域の力がなければ、このプロジェクトを実現することは不可能だった。地域の力を痛感した。



＜資料２　札幌養護学校グループビジョン＞

札幌養護学校白桜高等学園では、学校教育目標を具現化するたに社会貢献・社会参加の一環として令和７年度より「パークゴルフ」を取り入れている。

Ⅸ まとめ

昨今、子どもたちの運動離れが顕著となり、少子化も相まってスポーツ界では競技人口の減少に歯止めがかからない現状がある。その大きな流れにより、中体連の種目の減少、部活動の縮小など、本道においても影響は少なくない。また、スポーツシーンにおける課題も多く、指導者不足、コンプライアンス、用具や施設使用料の高騰等があげられ、スポーツが誰でも身近に楽しめる、体験できるというものではなくなりつつある。本校の生徒たちのスポーツ環境も同様で、幼少期から継続しているスポーツは少なく、ダンスやサッカー経験者が数名いる程度となっている。

そのような中、パークゴルフプロジェクトを実現できたのは、地域との共働事業、地域連携という地域の大きな支援があったからである。東米里パークゴルフ同好会の支援おかげで未体験者が多いスポーツであっても大会を計画し、開催、参加するまでに成長することができた。実際に地域の方と一緒に事業を行い、学校職員以外と活動することで相互理解が深まったこと、お互いが徐々に慣れ親しみ、対話が増え、地域のたくさんの方とコミュニケーションを図れたことは、生徒たちにとって想像以上の成果となり、学校だけでは経験のできない貴重な体験となった。

更に、学校から地域コミュニティーへ出向いて活動に参加することについては、卒業後の余暇活動の広がりへのきっかけとなる。なにより、たくさんの地域の方々と一緒に活動し、声を掛けてもらい、応援してもらうことで、大きな自信につながり、生徒たちも大きく成長することができた。

本校では、パークゴルフプロジェクトの他に地域との共働作業などを行い、地域との繋がりを大切にしている。今後も、共生社会の構築に向けて、地域と協力しながら共に教育活動を行っていくことで学校教育目標である「一人一人の良さ可能性を最大限に伸ばし健やかで主体的に学び続ける生徒達が育つ学校」を目指していきたい。

論文 5

ゴール型競技における生徒の実践
～車椅子サッカーによる生徒の意識の変化について～

北海道手稲養護学校三角山分校　教諭　梅野　綾人

Ⅰ 学校の概要

北海道手稲養護学校三角山分校（以下：本分校）は、「独立行政法人国立病院機構　北海道医療センター西館」に入院する神経筋疾患や重症心身障害などの児童生徒を対象にした学校である。

現在は小学部１名、中学部１名、高等部９名の児童生徒が在籍しており、その多くが筋ジストロフィーである。筋ジストロフィーは進行性の疾患のため、病気の進行に伴って転学及び進学をしてくる場合が多い。この疾患は、今までできていたことができなくなってしまう喪失体験と社会経験の不足により自己肯定感が育ちにくい。また、家族と離れての入院生活に抵抗や不安を感じる生徒も多いため、生徒一人一人の心に寄り添った指導や主体的に「できること」を増やす指導が重要である。



＜写真１　北海道手稲養護学校三角山分校の校舎＞

本分校の教育課程は、児童生徒の障がいの程度や実態に応じて３つの類型を設定している。

＜表１：本分校の教育課程＞

普通学級	重複障害学級	
A類型	B類型	C類型
準ずる教育を主とした教育課程	知的障害教育を主とした教育課程	自立活動を主とした教育課程

昨年度から感染症等の対策が緩和し、隣接している病院の主治医と内容や方法を確認した上で、校外へ出ての学習が可能となった。また、ICTの活用は本分校の指導の充実や生徒が主体的に学ぶためのより有効な手立てとなっている。テレプレゼンスロボットを使用した体験的な学習や間接的な学習は、学びの場や社会参加の方法を充実させるための非常に大切な取り組みとなっている。

Ⅱ 生徒の実態と体育の状況

本分校の生徒は、運動機能の低下により、前籍校では体育の授業に主体的に参加した経験に乏しく、スポーツへの喪失感を抱いてきた生徒も多い。また、体育の授業が「見学」だけになるなど学校体育から実技を免除されてきた生徒もいる。そのような生徒が本分校に転学及び進学し、個々の実態に応じた教材・教具を使うことで、スポーツを主体的に「できる」「楽しむ」ことが可能になり、体育の授業を楽しみにするなどの変容が見られた。

本分校の体育の授業は、高等部のA類型、B類型、中学部のB類型の生徒が合同で学習を進めている。実態に応じてルールの変更や学習方法を模索しながら進めているが、在籍数の減少に伴い団体競技の実施が難しくなったり、チームや対戦相手が限られた中で戦術の幅が狭くなったりする様子も見られる。

Ⅲ 研究の目的

本研究の目的は、車椅子サッカーを通じて、スポーツの楽しさや達成感を味わうとともに、将来的に「見る」「支える」「知る」など多様な形で生涯スポーツに関心をもつことを目指すことである。

過去にはスティックと小さいボールを用いてミニゴールに入れて得点を競う「三角山フットサル」として取り組んでいた年があった。昨年度からは既存の道具でバンパーに見立てた用具を車椅子に取り付け、車椅子サッカーとして競技に取り組んでいる。前年度いただいた研究助成費で車椅子サッカー用のボールを購入し、同じ競技として実施することは難しいが、自分たちでルールや道具を工夫することでスポーツに取り組む楽しさや達成感を一層味わうことができるとともに、そこから生涯スポーツとして「見る」ことへの興味関心に繋げることができるのではないかと考えた。

本分校生徒は進行性の病気のため将来的にプレーヤ

ーとしてスポーツに取り組むことが難しくなることが予見される。そのため、本研究をとおして「見る」「支える」「知る」ことも生涯スポーツを楽しむ一つであることを知り、将来的に余暇の一部となってくれたらとの願いを込めている。

また、過去にはエスポラーダ北海道の方に来ていただいて交流するなど、実際に選手と関わる機会があった年もあり、サッカーを通して他校と交流を深めたり、プロの選手を間近に見たりすることができる種目と考えている。

Ⅳ 研究の内容・方法

1 対象

高等部　A類型　3名　B類型　6名
中学部　B類型　1名

2 実施期間

令和７年8月～１１月　　１４時間

3 内容

(1) アンケート1の実施

サッカーについて生徒たちがどのような印象や考えをもっているのかアンケートを実施した。対象生徒は10名である。

(1) 車椅子サッカーを行ったことはありますか？		
ある（授業で）	ない	わからない
６人	４人	０人

(2) サッカーは好きですか？		
好き	好きではない	わからない
４人	０人	６人

（理由）
- ルールがいまいちわからない
- スポーツ自体あまり見ないから
- かっこいいから
- 授業でやった際に楽しかったから
- サッカーのルールを知らないから好きかどうかもわからない。
- 知らないから

(3) TVやスタジアムでサッカーを観戦したことがありますか？		
ある	ない	わからない
５人	４人	１人

(4) サッカーのルールを知っていますか？		
知っている	少し知っている	わからない
２人	６人	２人

(5) チームスポーツとしてサッカーは楽しいと思いますか？		
思う	少し思う	思わない
８人	１人	０人

（未記入1名）

(6) どのような技術を身に付けたり、どのようなゲームをしたいと思いますか？
- パス・シュート・ドリブル・ゴールができるようになりたい。
- 仲良く、楽しくゲームしたい。
- 相手の動きを見て判断できるようになりたい。
- 状況に合わせて臨機応変に対応する力。
- 仲間とのコミュニケーションを大事にしつつ、実践的なスキルを発揮できるようなゲームをやりたい。昨年よりうまくなりたい。

(7) そのためには、どのような練習や方法があると思いますか？
- 作戦会議やゲーム内でも、お互いに意見を言い合ってフィードバックを行うこと。
- ジグザグドリブル練習。
- ゴールを守る練習。
- パス＆シュート練習。
- 協力して戦略を組む。

(2) アンケート１の考察

アンケート１(1)からは、本分校の授業で行う以外、サッカーに取り組んだことがないことがわかった。(5)からはチームスポーツとして楽しいのではないかという意識は強い。

(2)(3)からは、TVなどでサッカーを観たことがある生徒は半数いるが、好きかどうかわからない生徒はルールを知らない、行ったことがないため好きなのか、

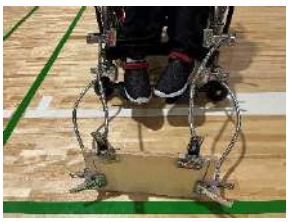
そうでないのかがわからない生徒が多くいた。⑷については、昨年度の授業を経験している生徒や、ボールをゴールに入れる競技という簡単なルールとして「知っている」「少し知っている」と回答する生徒が多かった。

⑹⑺からは技術よりも「相手の動きを見て」「状況に合わせて臨機応変に対応する」「コミュニケーション」と普段の生活に繋がる力を車椅子サッカーを通じて身に付けたいという意見が多く出てきた。そのための方法としても、個人の技術はもちろん、作戦会議での話し合いの中で戦略を練る等、コミュニケーションを確保する機会を考える生徒もいた。

よって、本来のサッカーと同じようなルールで取り組むことはできないため、生徒同士でルール設定の場を設けることでルールを知り、楽しめることを感じることができるのではないか。また、チームでの練習、ゲーム前には必ず作戦会議を行うことで、仲間との関りを深めるきかっけになるのではないかと考えた。

（3）教材教具の工夫

電動車椅子とアシスト車椅子の生徒がいるため、本来ある電動車椅子サッカーのように個人に合わせた強度のあるフットガードを用意して使用できるわけではない（高価である）。よって、他種の競技で使用しているクリップや板を使用し、バンパーに見立てて行っている。本分校で行っている様々な競技は、個々の生徒の実態に応じた教材教具を作成して学習を進めている。




＜写真２　クリップ、板を使用したバンパー＞

写真３の生徒は、常時人工呼吸器を使用している。身体への負担を減らし、良い姿勢で活動ができるようにするため、車椅子をリクライニングした状態で学習や活動を行う必要がある。そのため、視界が常に上向きとなりボールの行方を見ることが難しい。足元が見えるようにミラーを設置することでボールの位置などを把握できるよう見えにくさを改善している。




＜写真３　足元が見えない生徒の場合＞

ボールについては研究助成費から車椅子用サッカーのボールを２つ購入させていただき、５号のサッカーボール・柔らかいボール・車椅子用のサッカーボール・ゴルフボールなど、生徒たちが試しにドリブルをしてみて、一番活動しやすいボールを考え、車椅子用のボールに決定した。



＜写真４　ボールを比べている様子＞

(4)チームの工夫

チーム編成については、最初は教師主導で全体のバランスを考えて行ったが、慣れてきた頃には生徒にチーム編成の方法を考えさせて自分たちで決定させた。また、生徒の顔写真を用意して、ホワイトボードに掲示した。そうすることで視覚的にもわかりやすく、生徒が安心して練習や試合に取り組むことができた。また、作戦会議などでも顔写真を使用することで、自分や仲間の動きのイメージがもちやすく効果的であった。




＜写真５　顔写真を活用したチームの取り組み＞

(5)ルールの工夫

事前学習では、サッカー・フットサルにも様々な種類（サッカー、電動車椅子サッカー、アンプティ、CP、ソーシャル、知的障がい、ブラインド、デフなど）があ

り、障がいを抱えていてもスポーツに取り組んでいる人が多くいることを学習した。車椅子サッカーの動画を見た生徒たちは、スピード感に圧倒されていた。



＜写真6　サッカーの種類について学習している様子＞

ルールについて各種サッカー・フットサルのルールを比べながら、自分たちならどのようなルールであれば競技として行うことができるかを話し合う時間を設けた。

人数については、体育館の大きさや生徒数、動ける範囲を考えて3～4名と決めていた。時間については、最初は7分と意見が出ており、実際に前後半7分で行ってみたところアシスト車椅子の生徒の体への負担が大きいことがわかり、5分間に変更していた。

また、電動車椅子サッカーで適用されている2on1（ボールに対して半径3m以内に各チーム1人しかプレーに関与してはいけない）や3パーソン（ペナルティエリアにディフェンスが3人以上入ってはいけない）ルールも実際に体験してみた。コートの大きさや車椅子の移動速度を考え、2on1 を適用してしまうと試合が進まなくなってしまうのではという意見が出ていた。3パーソンについては、オフェンス・ディフェンス関係なくボールの周りに人が集まりすぎると板を止めているクリップなどが外れてしまう危険があること、それによって試合が止まってしまうのではと意見が出ていた。このことを踏まえ、生徒たちの中で全エリア対象に、ボールに対してオフェンス・ディフェンスともに3人以上入ってはいけない三角山版の3パーソンルールを考案していた。

＜資料1　主なサッカールールと三角山のルールの比較＞

車椅子サッカー	人　数：4人（男女混合、キーパー含む） コート：14～18m×25～30m ゴール：6m 時　間：20分ハーフ 速　度：10km以下 ボール：直径 32.5cm その他：3パーソン、2on1
三角山ルール	人　数：3～4人 コート：バスケットコート ゴール：5m 時　間：前後半5分、休憩2分 速　度：上限 4.5km ボール：直径 32.5cm その他：2on1 適用なし 三角山版3パーソン ペナルティエリア設置なし

(6)練習の工夫

1チーム3～4人で構成し、全3チームで練習に取り組んだ。必ずチームごとに練習内容やポジションを確認する時間を設定した。また、場面緘黙がある生徒については、体育館という広い空間で音が響きやすい状況だったり、人数が多い中で視線が多いと動き出しにくかったりする様子があったため、1チームは場所を変えて広い教室で取り組めるように行った。





＜写真7：作戦会議の様子＞

最初は一人ひとりがドリブルしてからパスをしたりシュートをしたりする練習を選択するチームが多かった。チームのメンバーは毎時間変わるため、練習やゲームで出た反省についてはアンケートの(7)に出ていたフィードバックの機会を授業の振り返りシートで行い（A類型のみ）、次回の練習で新たなチームに共有する様子が見られた。回数を重ねていくとチームの中で様々な状況を想定した練習に取り組んでおり、チーム力の向上に繋がっていったと感じる。

また、場面緘黙の生徒については、動き出すまでに時間は掛かったが、自らボールを押したり、来たボールに対して振り返って追いかけたりする姿も見られた。





＜写真8：練習の様子＞

＜資料２ 振り返りシートの記載内容＞

◇今日の授業を終えて、次回の課題はどんなところだと思いますか？
ボールを相手に上手くパスをすることです。

◇では、その課題を解決するために、どんな工夫や練習をすれば良いと思いますか？
パスをする際には、蹴る前にパスを出す相手に注目し、蹴る瞬間にボールを見ると良いと思います。あた、今回実践したスルーパスを意識すると、スムーズに行えると思います。

◇今日の授業で学んだこと、気づいたこと、仲間の良かったところ、分かったことをたくさん書いてください！！
みんなが協力してパスをする順番や方法を変えるなど、工夫して練習をしているところが良かったです。　くんが率先してボールをパスしていたのが素晴らしかったです。特に、ただ前進するのではなくバンパーの横を使って回転しながら蹴っていたのが車椅子サッカーらしい動きでした。

(7)ゲームの工夫

試合前の作戦会議では、チーム名、リーダー、ポジションの確認、共有すべきことを話し合う場面を設定した。電動とアシスト車椅子で得意なポジションが違うので、生徒同士で「ゴール前行くね」「僕は攻める方やるよ」など、仲間の特徴を考えて取り組む様子も見られた。




＜写真９ ゲームの様子＞

最初はボールをゴールに入れなきゃという意識が高く、敵・味方が何人いようと突っ込んでしまい、バンパーが外れたり、３パーソンが適用されゲームが止まってしまったりすることが多かった。試合を重ねていく中、周りを見て、敵・味方がどこにいるのか、声を出してパスする生徒や、どこのスペースからボールを通せるのか、敵を避けるために車椅子のタイヤの側面を利用してボールを保持したままターンする生徒も出てきていた。

＜資料３ 振り返りシート感想＞

◇今日の授業で学んだこと、気づいたこと、仲間の良かったところ、分かったことをたくさん書いてください！！
初めてのゲーム、３年生の先輩方の攻撃がうまくて、こんな風にやってみたいと思いました。

◇今日の授業を終えて、次回の課題はどんなところだと思いますか？
ボールにあまり集まりすぎないようにすることです。
◇では、その課題を解決するために、どんな工夫や練習をすれば良いと思いますか？
特にゴール付近で滞りやすいので、一度引くように声をかけるなどして試合展開を速く回すようにするとよいと思います。ただ、あまり引きすぎると不利になってしまうので加減を意識するのも大事です。

◇今日の授業を終えて、次回の課題はどんなところだと思いますか？
試合の時に味方にパスするのが難しかった。
◇では、その課題を解決するために、どんな工夫や練習をすれば良いと思いますか？
前もって味方がきそうな場所にボールを運ぶ。
◇今日の授業で学んだこと、気づいたこと、仲間の良かったところ、分かったことをたくさん書いてください！！
無理にボールをおさず止まることで、ボールを前にはこびだせることに気付いた。味方との声掛けを頻繁にすると連携が取りやすかった。

(8)アンケート2の実施

最終の授業時に、生徒たちがサッカーについての意識がどのように変化したのか再度アンケートを実施した。アンケート１と同じく対象生徒は 10 名である。

(1) 車椅子サッカーの授業を通して、サッカーについて知ることができましたか？		
できた	できなかった	わからない
９人	０人	１人
具体的にどのようなことを知ることができたか		
・大会ではもっとスピードが出ていること。 ・３インというルールがあること。 ・パスをすることの重要性 ・味方とプレーする楽しさを知ることができた。 ・ルール、パス ・シュートを打つ時、１回止めてから押すと力強いシュートが打てる。 ・チームプレー ・ルールの内容を知れた		

(2) 授業を終えてサッカーを？		
好き・もっと好きになった	嫌いになった	わからない
８人	０人	２人

(3) 今後 TV やスタジアムでサッカーを観てみようと思いましたか？		
思った	思わない	わからない
２人	２人	６人

(4) チームスポーツとしてサッカーは楽しかったですか？		
思う	少し思う	思わない
８人	２人	０人

⑸ サッカーの授業を通しての感想（身に付いたことなど）
・チームプレーが大事。 ・エリアの使い方、裏の取り方をうまくできるようになった。 ・味方とともに頑張った。 ・仲間と相談して決めてやるチーム競技は面白いと思った。 ・サッカーを通して、味方との連携や声掛けの重要性に気付けた。この気付いたことを今後に生かしていきたい。 ・どう動いていいか周りを見て判断することができた。

(9)アンケート2の考察

アンケート２⑴「サッカーについて知ることができたか」については、ルールだけではなく、技術的な面でも「知ることができた」と感じる生徒がいたということがわかった。これは授業後に自己の動きについて振り返る時間を設定したり、ゲームでは仲間の動きを観察する時間を設けたりした結果だと感じている。

アンケート１⑵の「サッカーは好きですか？」では、「好き」が４人だったのが、アンケート２では８人が「好き・もっと好きになった」と回答している。これはアンケート２⑸の回答にあるように「サッカーを通して味方との連携や声掛けの重要性に気付いた。この気付きを今後に生かしていきたい」とあるように、試合中の選手同士の声掛けに着目し、授業でのゲームに生かすことが大切であると感じた。

また、場面緘黙の生徒については、アンケート１「⑸サッカーは楽しいと思うか」に未記入であったが、アンケート２の記入時、「⑷サッカーは楽しかったか」の問いに、「少し思う」と気持ちの変化を表現してくれたことが見て取れた。

Ⅴ 成果と課題

成果としては、仲間と協力して、道具やルールを工夫することで、今まで自分たちはできないと考えていたスポーツを楽しんだり、作り上げていくことに達成感を味わったりすることができたのではないかと感じている。また、授業の中で繰り返し作戦会議を取り入れたことで、チームの仲間とコミュニケーションのやり取りがとても大事であることに目を向けてくれたことは大きな成果である。

課題としては、競技としてサッカーを楽しめた生徒は増えたが、研究の目的にしていた生涯スポーツとして「見る」ことへの興味関心を増やすことには繋げることができなかった。今後、テレビや動画を観るときの視点として、プロの選手たちの技術や仲間同士での声の掛け合い、励まし合い、ミスした選手への慰めの言葉などをクローズアップして生徒に具体的に知らせることで、より一層「見る」ことへの興味関心に繋げていくことが必要である。また、北海道のプロチームとして活躍しているコンサドーレなどの情報も提供していきながら、いろいろなスポーツの楽しみ方を味わわせていきたい。

Ⅵ おわりに

公益財団法人明日佳のご支援により、昨年・今年度と車椅子サッカー用のボールを購入することができ、教育活動が充実したことに感謝申し上げる。今後も振興会のご支援のもと、児童生徒の実態に合わせて、楽しんで行える様々な取り組みの考案・発信に努めていきたい。

【引用・参考文献等】

1） 一般社団法人 日本障がい者サッカー連盟
https://www.jiff.football/

論文 6

知的障害生徒の「人間関係の形成」を目的とした体操指導の取組

～体育科と自立活動の関連を図ったペア･グループ活動を中心とした実践～

北海道東川養護学校　教諭　霜山　　生

Ⅰ 研究の目的

特別支援学校（知的障害）に在籍する生徒は、学習面や運動面において個人差が大きいことに加え、身体を動かす活動、特に器械運動に対して「怪我が怖い」「難しい」といった苦手意識を持つ者が少なくない。また、コミュニケーションの困難さから、自分の思いや考えを他者に伝えることが難しく、集団活動において誤解や失敗を経験することも多いという実態がある。

本研究はこのような生徒の実態を踏まえ、体育科「器械運動（マット運動）」の指導において、生徒同士の意図的な関わりを組み込んだ体操活動を展開することで、以下の目標達成を目指こととした。

1　自己意識の涵養：自分の身体の動きや、その時の感情（不安、成功体験など）を意識化する。

2　他者意識の涵養：　ペアやグループの仲間の動きや表情を認識し、相手のペースや状態に合わせて行動する。

3　「人間関係の形成」の促進：　相互の意識を涵養する過程を通して、共感的なコミュニケーションを促し、人間関係の質的向上を図る。

この実践では、単に運動技能の習得を目指すだけでなく、体育科の活動を自立活動の視点（人間関係の形成、情緒の安定）と

関連づけることで、体操指導の新たな教育的価値の追求を目指した。

Ⅱ 研究の内容、方法

1 生徒の実態と課題の再整理

本校生徒はコミュニケーションにおける「言葉だけに頼りがち」な傾向や、身体に対する過度な不安感を持つという課題が見られる。このため、言葉による指示やフィードバックに加え、身体の動きや表情、視線などといった非言語的要素（他者を見て活動を修正する、教師のモデルを見て実践してみるなど）を活用したコミュニケーションを促進する必要がある。また、器械運動（マット運動）の基礎となる支持系、跳躍系、バランス系の基本的な運動に慣れ親しませることが不安感の解消に繋がると考える。

2 体育科と自立活動の関連を図った指導の視点

本実践は体操指導を以下の二つの側面から捉え、指導の関連を図る。

（1）体育科の側面（基礎技能の定着と運動経験の拡大）

指導内容：前転や後転などの難易度の高い技ではなく、腕支持、跳躍、バランスといった基礎的な「姿勢づくり」に繋がる動きを中心に構成する。

目標設定：運動の成功･不成功だけでなく、互いの姿勢を確認し合いながら取り組む活動を通して、専門的な姿勢づくりへの意識を高める。

（2）自立活動の側面（自己調整力と他者理解の促進）

指導内容：ペアやグループで協力して取り組む活動を意図的に導入する。

指導の焦点：身体接触（触覚刺激）を含む活動や相手のペースに合わせた関わりが、情緒の安定や人間関係の形成を促進するのではないかとの仮説のもと、以下の２点を重視した取り組みを実践する。

ア 協調と身体的サポートの機会設定

ペアストレッチや補助活動など、互いに身体を支え合ったり、優しく触れたりする場面を意図的に設けることで、安心感と信頼関係を育む。

イ 非言語的コミュニケーションの活用

言葉が不確実な場合でも、他者の動きに気づくような働きかけや、教師及び他生徒のモデル、相手の表情、動きの緩急、視線などから意図を読み取り、自分の行動を調整する機会を設ける。

3 指導期間及び対象生徒

(1) 期間

6時間

体育科「器械運動（マット運動）」の単元として設定

(2) 対象生徒

主とした対象生徒は、コミュニケーション面に課題を有する３学年の生徒２名（知的障害および自閉症スペクトラム障害の男子生徒A、知的障害およびダウン症の女子生徒B）である。

その他、実践指導、アンケート調査についても、共に授業に参加した高等部１学年生徒２名、高等部２学年生徒３名、３学年生徒３名（いずれも知的障害を有する生徒）においても対象としている。

4 評価方法

(1) アンケート調査

授業の初回と最終回に、回答可能な生徒７名において体操（マット運動）や仲間とのコミュニケーションに対する意識の変化へのアンケートを実施し、生徒の意識･感情面での変容を把握する。

(2) 教師による行動観察の評価

授業全６回分のペア･グループ活動時における、生徒間の関わりの状況（発話回数、接触回数など）及び関わりの質（相手のペースに合わせる行動、適切な補助行動など）を動画録画を用いて記録し、授業後に複数の教師で行動的な側面の変容の評価を行う。

Ⅲ 実践の構想と指導計画

1 指導の工夫点

本実践では、特に「人間関係の形成」を促すため、以下の３点を指導の柱とする。

(1)「相互調整」を促すペア活動について

① 工夫点

単純な練習ではなく、「相手に合わせなければ成立しない」活動や「相手の状態を読み取って行動を変える」必要のある活動を取り入れた。

②ペアストレッチ

相手の痛がる表情や呼吸の速さを読み取り、力を加減する。

③協調ジャンプ

二人一組でタイミングを合わせて抱え込みジャンプや開脚ジャンプに挑戦し、声を掛け合ってリズムを合わせる。

(2) 感情･身体の「安心」を重視した導入活動の徹底

恐怖心をかかえる生徒への配慮として、授業の導入（柔軟運動）に十分な時間をかけ、身体接触が安心感に繋がるような活動を意識的に行う。

柔軟運動において、他者による軽い圧迫やマッサージを取り入れることで、リラックス効果と集団内での安心感を醸成する。

(3) 褒め方･フィードバックの共通理解

技の成功だけでなく、「補助が上手だったね」「相手のペースに合わせてくれてありがとう」といった関わり方に対するフィードバックを重視する。

教師が具体的な「褒め言葉」の例を提示し、生徒同士がそれを使ってフィードバックし合う場面を設ける。また、言葉で伝えられない生徒のために、表情やサムズアップなどのジェスチャーによる承認を促す。

Ⅳ 指導の実際

1 柔軟運動

柔軟運動では、ペアで行うという意識をもつこと、押す加減を伝え合うなど簡単なやりとりが自然と生まれることをねらいとして取り組んだ。序盤からペアで行うという意識はもつことができた。実際に取り組んでみると、「どこを押すか、押さえるかわからない。」、「押す側も同じように形をとってしまう」、「相手に触れて柔軟することに若干抵抗がある。」などの様子が多く見られた。



押す側と柔軟する側の判断が難しい様子



押す箇所を確認するが、迷っている様子

模倣だけでは難しい様子が見られたため、教師が押す箇所を目の前で示したり、手を添えたりしながら確認した。





押す箇所や支える箇所を確認している様子

2回目、3回目の授業では、徐々に柔軟の流れを理解し、スムーズに行えるようになり、相手に触れることへの抵抗感もほぼ見受けられなくなった。自然と協力して取り組む様子も見られた。また、進めていく中で、柔軟する側の生徒が手を挙げ、「もういいよ」と言葉を掛けたり、ペアが押す箇所をわかってないときに「ここだよ」と身振り手振りも交えて相手に伝えたりする姿が見られた。普段は自分から依頼することがほとんどない生徒から自然と依頼することができる場面が見られた。

6回目最後の授業には、教師が「前屈」、「足首」など柔軟運動の呼称を伝えるだけで自発的に取り組める場面が増えてた。また「ここだよ」、「痛い」、「押すよ」などの言葉や身振り、手振りで相手に伝え、その意図を汲み取りながら活動するなど、柔軟運動において期待していた以上に生徒間でのやり取りが見られてきた。

最初の授業では、補助し合うことに対して抵抗を感じている様子も見られたが、身体接触してお互いに助け合いながら活動することで安心感に変わっていく様子が見られた。



押してほしい箇所を自分から相手に伝えている様子



口頭の指示のみで取り組んでいる様子

2 体操の基本動作

柔軟運動の後は体操の基礎的な動きに取り組んだ。これは個々の身体の動かし方を高めるとともに、生徒一人一人の実態を把握することを目的として行った。

支持系の動きでは、動物歩行、足上げ、ほふく前進などに取り組んだ。前方だけでなく後方へ進む動きを取り入れるなど、同じ動きでもやり方を変えながら行うことで生徒が自分の身体の動かし方を考えながら取り組めるようにした。



動物歩行



後ろ向きに歩行



片足を上げて歩行



足を前に出して歩行

似た動きや経験のある動きであっても、スピードや方向を変えることで使う筋力が異なり、生徒からは「難しい」という反応よりも、「やってみよう」と意欲的に取り組む様子が見られた。

跳躍系・バランス系の動きでは、複数の技に取り組み、互いの動きを確認し合う活動を取り入れた。これは相手の動きに着目する意識を高めることをねらいとしたものである。開脚ジャンプでは足が開いているか、抱え込みジャンプでは膝がしっかり曲がっているか、水平バランスでは足が上がっているか、２～３秒以上静止できているかなど、見るポイントを明確にし、ペアで確認し合いながら活動を行った。



跳躍を確認し合う様子

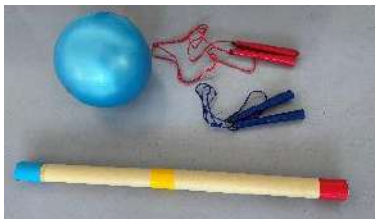


バランスに取り組む様子

回転系の動きでは、ゆりかごや横転を中心に取り組み、今後のペアで行う体操につながることを意識して指導した。横転では、マットからはみ出ないことを意識できるよう、成功例と失敗例を繰り返し示しながら取り組んだ。活動を重ねる中で、「マットから出ない」という意識が高まり、真っ直ぐに横転するために身体の角度を調整したり、自分の立ち位置を確認したりする様子が見られるようになった。

3 ペア体操

ペアで行う体操では、棒・縄跳び・ボールの３種類の道具と、跳び箱（1～3 段）を用いて取り組んだ。



主な動きは「横転」「台を渡る」「ジャンプ」の３種類とし、いずれもペアで協力して行う活動とした。活動の導入では、教師が手本を示すのみとし、生徒同士で動きを確かめながら取り組めるようにした。

使用する道具は、縄跳び→棒→ボールの順に難易度が高くなるよう設定した。縄跳びはある程度距離を取ることができ、動きの自由度も高いため、最も取り組みやすい道具である。棒は長さに制限があり、その範囲内で互いの距離を調整する必要があるため、縄跳びよりも難易度が高い。ボールは形状が不安定で相手との距離も近くなることから、最も難易度の高い道具とした。

横転の活動では、当初は自分自身の動きに集中し、ペアで持っていた縄や道具を途中で離してしまう様子が多く見られ、相手を意識して行う姿はほとんど見られなかった。しかし、繰り返し取り組む中で、教師が助言や手本を示し、「相手に視線を送ること」や「回転のペースを合わせること」の大切さに気づいていく様子が見られた。次第にペアのどちらかが相手を意識して取り組むようになり、回数を重ねるごとに双方が相手の存在を意識しながら動けるようになった。その結果、当初はマットの途中までしか進めなかった横転の動きが、最後まで行えるようになっていった。

横転の動きは、自分だけでなく相手の位置や動きのペースを把握しなければ成立しないため、自然と「相手を意識すること」につながった。ここでは、教師の助言は最小限としたが、生徒自身が「どうすれば道具を離さず、一緒に回転できるか」を考え、動きを工夫する姿が見られた。相手との協力の仕方が分かってくると、難易度の高い棒を用いた活動でも、相手の動きを見たり、自分の立ち位置を意識したりしながら応用できるようになった。



横転（棒）進むにつれ、離れてしまう様子

ボールを用いた活動では、これまで以上に相手との距離感や持ち方への配慮が必要となり、１回転で落と

してしまうペアも多く見られた。しかし、６回の授業を通して挑戦を重ねる中で、距離の取り方や持ち方を工夫するペアが現れた。成功したときの感覚を繰り返し味わうことで相手をより強く意識し、体全体で相手に合わせたり、視線を送って自分の位置を伝えたりする姿が増えていった。回数を重ねるごとに、互いに気を配りながら動こうとする意識が高まっていく様子がうかがえた。また、相手を意識して気遣いながら行っているときには動きが安定し、その意識が薄れると失敗につながるということを生徒自身が体感できたと感じている。



横転（ボール）回数を重ね、相手を意識して、自分の動きも調整しながら行う様子

段差を利用した活動では、跳び箱の上をペアで道具を持ちながら歩いて渡る活動を行った。横転と同様に、道具の難易度や跳び箱の段数を徐々に変えながら取り組んだ。歩行は日常的に行っている動作であるため、比較的早い段階で段差を渡りきることができた。縄や棒を用いた活動では、横転のときよりも早い段階で相手を意識する様子が見られた。

ボールを用いた活動では、当初は苦戦する様子も見られたが、どのペアも数回の挑戦で息を合わせて渡りきることができた。



ペアで一つの道具を持ち、段差を渡る活動

６回目の授業では、ペアの一方が後ろ向きで歩く活動や、ペアを変更して取り組む活動を行った。後ろ向きで行う側は特に慎重になり、「待って」「早いよ」など、相手に言葉でペース調整を求める姿が見られた。また、ペアが変わっても、視線や言葉、身体の細かな動きを使って相手に自分の意図を伝え、コミュニケーションを取りながら活動することができた。特定の相手に限らず、相手に応じた伝え方ができるようになってきたと感じられた。

片方後ろ向き（棒）　　両方後ろ向き（ボール）





ペアで道具に変化をつけて行った様子

本実践では、柔軟運動、体操、ペア体操の３つの構成でマット運動の授業を行い、特にペア体操を通して相手を意識し、気遣いながら関わる力を育てることをねらいとしてきた。

Ⅴ　指導のまとめ

本実践は「知的障害生徒の人間関係の形成を目的とした体操指導の取組」を主題とし、マット運動の授業を通して相手に関心を向け、応じようとする態度や行動を育成することをねらいとして行った。体操指導をあいさつや言語表現に限定するのではなく、「相手を意識し、視線や言葉、身振りを用いて関わろうとする力」と捉え、身体活動を介した指導を構成した。

柔軟運動では、ペアで補助し合う活動を通して相手に触れながら関わる経験を積ませた。当初は身体接触への抵抗感や、相手への伝え方が分からず戸惑う様子が見られたが、教師の具体的な提示や支援を通して、次第に相手の反応を感じ取りながら活動できるようになった。回数を重ねる中で、「もういいよ」「ここだよ」など、相手に向けた言葉掛けや身振りが自然と生まれ、相手に応じようとする姿が見られるようになった。これは体操指導の基盤となる「相手に向けた発信」が育ち始めた段階であると考えられる。

体操の基本動作では、自分の動きに加えて、相手の動きを見る、確認するといった要素を取り入れた。跳躍系・バランス系の動きでは、見るポイントを明確にすることで相手に注意を向ける意識を高めた。また、回転系の動きでは、位置や方向を意識する必要があり、相手や周囲の状況を捉えながら動く力が求められた。これらの活動を通して、相手の存在を意識しながら行動する経験を積み重ねることができた。

ペア体操では、道具や段差を用いることで、相手との協力が不可欠な場面を意図的に設定した。活動当初は自分の動きに集中する様子が多く見られたが、繰り返し取り組む中で、視線を送る、言葉でペースを伝える、身体の動きで合図を出すなど、相手に応じた関わりが増えていった。特にペアを変更した活動や後ろ向きで行う活動では、相手に配慮しながら関わろうとする姿が顕著に見られ、特定の相手に限らず、人に応じて関わり方を調整する力が育ってきたと考えられる。

以上のことから、マット運動を中心とした段階的な指導は、知的障害のある生徒にとって、無理なく他者と関わり、相手を意識して応じようとする「体操」の力を育成する上で有効であったといえる。身体を通した関わりは、言語的なやり取りが難しい生徒にとっても取り組みやすく、人間関係の形成につながる実践となった。

Ⅵ 評価

1 アンケート調査

(1) 友達と話すことに対する意識の変化

「ともだちとはなすのはすきですか」という項目では、授業開始時に「はい」と回答した生徒は３名であったが、全６回の授業終了後には５名に増加した。一方、「どちらでもない」と回答した生徒は３名から２名に減少し、「いいえ」と回答した生徒は１名で変化は見られなかった。この結果から、授業を通して友達と話すことに対して肯定的な意識をもつ生徒が一定数増加したことが分かる。ただし、否定的な意識を示す生徒も依然として存在しており、引き続き安心して関われる環境づくりが必要であると考えられる。

(2) 友達と一緒に活動することへの興味・関心の変化

「ともだちといっしょにかつどうすることはたのしいですか」という項目では、「はい」と回答した生徒が５名から６名へと増加した。「どちらでもない」と回答した生徒は２名から０名となった。

このことから、マット運動を通した体操指導により、友達と一緒に活動することへの興味・関心が高まったと考えられる。ペアや集団での活動を取り入れたことで、他者と関わりながら取り組む経験が肯定的に受け止められるようになったと推察される。

(3) マット運動に対する意欲の変化

「まっとうんどうをやってみたいですか」という項目では、授業開始時に「はい」と回答した生徒は５名であったが、授業終了後には７名となり、全員が肯定的な回答を示した。この結果から、マット運動に対する意欲が大きく向上したことが明らかとなった。基礎的な動きを中心に構成し、友達と楽しく取り組める授業展開を行ったことが、器械運動に対する不安の軽減につながったと考えられる。

(4) 自己効力感の変化

「まっとうんどうをうまくできるとおもいますか」という項目では、「はい」と回答した生徒が３名から６名へと大きく増加し、「いいえ」と回答した生徒は２名から０名となった。このことから、授業を通してマット運動に対する自己効力感が高まったと考えられる。

成功体験を積み重ねたことや、友達と支え合いながら活動した経験が、自分にもできるという自信の形成につながったと推察される。

(5) 友達に助けてもらうことへの受け止めの変化

「じゅぎょうでともだちにたすけてもらうのはいい

ですか」という項目では、「はい」と回答した生徒が5名から6名に増加し、「どちらでもない」と回答した生徒は１名から０名となった。この結果から、友達に助けてもらうことを肯定的に捉える生徒が増加したことが分かる。授業内での関わりを通して、援助を受けることへの抵抗感が軽減され、相互的な関係性が形成されつつあることが示唆される。

（6）総合的考察

アンケート結果から、授業前と比較して授業後には、友達と関わることへの意識、友達と一緒に活動することへの楽しさ、助け合いに対する受け止め方などにおいて、全体的に肯定的な変化が見られた。

特に友達と一緒に活動することを「楽しい」と感じる生徒や、友達に助けてもらうことを前向きに受け止める生徒が増加した点は、マット運動を通した体操指導が自然なコミュニケーションを生み、人間関係の形成に寄与したことを示すものと考えられる。

2 生徒間の関わりについての教師及び動画記録に基づく生徒間の関わりについて

本研究では、コミュニケーション面に課題を有する３学年の生徒２名を中心に体操指導を通した生徒間の関わりの変化について評価を検討した。

評価対象としたのは、知的障害および自閉症スペクトラム障害を併せ持つ男子生徒Ａと、知的障害およびダウン症候群を併せ持つ女子生徒Ｂである。

男子生徒Ａは、言葉が不明瞭であり、自分から相手に話しかけたり、困り感を伝えたりすることに強い苦手意識をもっている。一方で、人と関わること自体は好み、話しかけられると表情豊かに関わることができるという特性がある。

女子生徒Ｂは、基本的な挨拶語や感謝の言葉を発することはできるが、自発的な発信は少なく、受動的なコミュニケーションにとどまる傾向がある。両生徒とも、今後の生活を見据え、自分なりの方法で相手と関わる力を高めることが重要な課題である。

本単元における目標は、男子生徒Ａについては「いくつかのコミュニケーション手段を活用し、相手に要求を伝えたり、相手の要求を感じ取ったりしながら体操に取り組むことができる」とし、女子生徒Ｂについては「相手のことを意識して柔軟運動やペアの体操に取り組むことができる」と設定した。評価は、授業中の教師による行動観察および記録した動画をもとに、関わりの量や内容の変化を中心に行った。

（1）授業初期に見られた生徒の様子（第1回、第2回）

第１回の授業では、柔軟運動やペアで行う体操において、教師の言葉掛けや身体介助がなければ活動に取りかかることが難しい場面が多く見られた。男子生徒Ａは教師の指示により姿勢を模倣することはできていたが、女子生徒Ｂを補助する際にはためらいが見られ、教師が具体的に支点や位置を示すことでようやく関わる様子であった。女子生徒Ｂは、教師の話を聞いてから動き出すまでに時間を要し、ペアとして相手と取り組むという意識は十分に形成されていなかった。

第２回の授業では、補助の際に「押すよ」と伝えることを教師が事前に示したことで、男子生徒Ａから女子生徒Ｂに対して言葉による発信が見られた。女子生徒Ｂは言葉による応答はなかったものの、視線を向ける様子が確認され、相手の存在を意識する瞬間が見られた。この段階で両者とも一方的な活動ではなく、相手を意識しながら体操に取り組む兆しが表れ始めてきていたといえる。

（2）授業中期における変化（第3回、第4回）

第３回の授業では、体操の流れを理解し、教師の指示と演示のみで活動に取りかかることができる場面が増加した。男子生徒Ａは、前屈、開脚などの場面で「ここ」と指差しを用いて自分が押してほしい場所を女子生徒Ｂに伝えることができた。これは男子生徒Ａにとって苦手としていた自発的な発信が見られた重要な変化であった。女子生徒Ｂも、教師の言葉掛けを受けな

がら相手の求めに応じた補助を行うことができるようになってきていた。

第４回の授業では、補助に対する不安や抵抗感が軽減し、言葉掛けのみで行える場面が増加した。ペアでの体操においても、相手の位置を確認しながら動く姿が安定して見られ、相手を意識することが自身の動きの安定につながっている様子が確認された。

（3）授業後期における成果(第5回、第6回)

第５回の授業では、演示のみで自立して活動できる場面がさらに増え、相手と自然に触れ合い、視線を送り合いながら体操に取り組む姿が見られた。ペアが変わっても同様の行動が確認され、特定の相手に依存しない関わりが形成されてきた。男子生徒Ａは普段よりも明らかに声を出す回数が増え、女子生徒Ｂは相手の掛け声や視線を手掛かりに動き出すなど、ペアを意識した行動が見られてきた。

第６回の授業では、全体への演示のみで多くの活動を自立して行うことができ、本単元の成果がとても表れた時間となった。男子生徒Ａは、「ここ」「いいよ」「せーの」など、言葉の種類や使用頻度が増加し、視線や表情を通して相手の様子を汲み取ろうとする姿が随所に見られた。女子生徒Ｂは自発的な発語は少なかったものの、相手の動きや掛け声に合わせて自分の動きを調整し、協力して課題に取り組む姿が安定して見られた。

（4）基本動作における支援状況の推移(評価表)

評価の観点（支援の段階レベル共通）

- 身体援助：教師や他者の直接的な身体介助が必要
- モデル提示：教師や他生徒の動きを見て模倣
- 他者を見て：ペアの動きを手掛かりに自分で調整
- 言葉掛け：最小限の言葉掛けで遂行可能
- 自立：支援なしで遂行可能

評価の基準

〇：支援段階基準の動きが３回以上。

△：支援段階基準の動きが２回以下。

男子生徒Ａ　基本動作の支援状況（第１～５時）

支援段階＼授業回	１	２	３	４	５	６
自立				△	〇	〇
言葉掛け		△	〇	〇	〇	〇
他者を見て		〇	〇			
モデル提示	〇					
身体援助	〇					

男子生徒Ａは、第１回、第２回時では身体援助やモデル提示を中心に支援を要していたが、第３回時以降は他者の動きを見て調整する段階へ移行した。第５回、６回時には言葉掛けも不要となる場面が増え、基本動作において取り組み方への向上が確認された。

女子生徒Ｂ　基本動作の支援状況（第１～６時）

支援段階＼授業回	１	２	３	４	５	６
自立						△
言葉掛け				△	△	〇
他者を見て			〇	〇	〇	
モデル提示		△	△			
身体援助	〇	〇				

女子生徒Ｂは男子生徒Ａに比べて自立までに時間を要したが、第３回時以降はモデル提示や身体援助が減少し、他者の動きを見て行動する段階へと移行した。第６回時には、言葉掛けを最小限とした上で基本動作を遂行できるようになり、段階的な自立に繋がっていた。

（5）個別の最終評価(男子生徒A、女子生徒B)

① 男子生徒Aの最終評価

男子生徒Ａは、体操指導を通して、指差しや短い言葉、視線など、複数のコミュニケーション手段を活用しながら相手に自分の要求を伝えたり、相手の意図を感じ取ったりする姿が定着した。特に授業後半では自分から言葉を発する回数や内容が増加し、相手とタイミングを合わせて活動するなど、双方向の関わりが見

られるようになった。以上のことから、本単元を通して、男子生徒Ａは人との関わりに対する不安を軽減し、体操活動の中で自然なコミュニケーションを形成する力を高めることができたと評価できる。

② 女子生徒Bの最終評価

女子生徒Bは、自ら発語する場面は限定的であったものの、視線や動きによって相手を意識し、相手の行動に合わせて自分の動きを調整する姿が顕著に見られるようになった。特にペアでの体操においては、相手の掛け声や動き出しを手掛かりに協力して課題に取り組む様子が安定しており、相手と一緒に活動することへの理解が深まったと考えられる。以上より、女子生徒Bは体操指導を通して相手を意識しながら関わる力を着実に伸ばし、人間関係の形成につながる重要な基礎を築くことができたと評価できる。

Ⅶ 単元計画に対しての評価

単元全６時間の計画で授業を行った。単元計画に対しての評価、各時間における評価（評価の観点に基づく）について以下に述べる。

第１回目の授業は導入・オリエンテーションとして行った。ここでの評価の視点としてはアンケート、教師の観察を中心に行った。

第１時間目では、単元のねらいや活動内容を共有し、ペアの決定を行った。アンケート結果および教師の観察から、多くの生徒が活動に対して期待と同時に不安を抱いている様子が見られた。一方で、ペアを意識した配置や説明、実際に活動することにより、互いの存在を意識するきっかけが生まれた。

この時間では、ペアの認識や活動内容の把握、実際に体操を経験することで、自己意識を高める基盤が形成されたと評価できる。

第２時間目は柔軟運動・ペアストレッチを中心に行った。評価の視点としては、相手に合わせた関わりができているかということを中心に把握していった。

当初は押す位置や力加減が分からず戸惑う様子や、身体接触への抵抗感が見られた。しかし、教師による具体的な提示や支援を通して、相手の表情や反応を見ながら力を調整しようとする行動が徐々に見られるようになった。特に「もういいよ」「押すよ」といった言葉や身振りによるやり取りが生まれ、相手に合わせて関わろうとする姿勢が育ち始めた。身体接触を伴う活動が、情緒の安定や安心感の形成につながったと評価できる。

第３時間目はバランス系の動きを中心に行った。評価の視点としては相互に適切なフィードバックができているかということを中心に把握していった。

バランス系の活動では、互いの姿勢を確認し合う場面が意図的に設定された。生徒たちは相手の動きを見るポイントを意識しながら活動することで、視線を向ける、指差しで示すなど、非言語的なフィードバックを行う姿が見られた。また一部の生徒には「ここ」「足上がってる」などの短い言葉による伝達も見られ、相手の動きを認識し、それに応じて関わる行動が成立していた。相互的なやり取りの芽生えが確認できた時間である。

第４時間目は支持系の動きを中心に取り組みを行った。評価の視点としては、補助を行う際の関わり方や言葉遣いを中心に把握していった。

支持系の動きでは、補助を通して相手の不安を軽減することが求められた。授業を重ねる中で、補助の際に相手の動きを待つ、タイミングを合わせるといった協調的な行動が増加した。教師の身体介助が減少し、言葉掛けのみで成立する場面も見られるようになったことから、相手の状態を感じ取りながら関わる力が高まっていると評価できる。

第５時間目は複合的な支持・回転系のペア活動を中心に取り組みを行った。評価の視点としては、互いのリズムを意識できているかということを中心に把握していった。

この時間では相手と協力しなければ成立しない活動が多く設定された。活動初期には自分の動きに集中し

道具を離してしまう様子も見られたが、回数を重ねる中で、視線を送る、言葉を掛ける、動きを調整するといった行動が増加した。特に成功体験を共有する中で、相手のリズムに合わせることの重要性を生徒自身が体感し、協調的に動こうとする意識が高まった点は大きな成果である。

第６時間目は取り組みの振り返り・まとめを行った。評価の視点としては、協働して活動を工夫できているか／振り返りを言語化するということを中心に把握していった。

単元の最終時には、ペアの変更や後ろ向き歩行など応用的な活動にも取り組んだ。生徒は相手に応じて言葉や視線、動き方を変えながら活動しており、協働的に課題を解決しようとする姿が見られた。

アンケートや振り返りでは、「楽しかった」「一緒にできた」「またやりたい」など肯定的な反応が多く、仲間との活動に対する満足感の高まりが確認された。自己肯定感や人間関係に対する前向きな意識が育成されたと評価できる。

総括的評価（単元評価）としては、以上の評価から、本単元における体操指導は知的障害の生徒にとって無理なく他者と関わる経験を積むことができる有効な実践であったといえる。各時間を通して、自己意識から他者意識へ、そして相互的な関わりへと段階的に発展しており、「人間関係の形成」を目的とした指導の有効性が確認された。

Ⅷ 成果と課題

（1）成果

本研究では、知的障害生徒の「人間関係の形成」を目的とした体操指導として、マット運動を中心に、基礎的な動きとペアでの活動を取り入れた授業を実践した。以下の４点を成果として挙げる。

第一は、友達と関わることに対する肯定的な意識の高まりである。アンケート結果からは、授業後に「友達と一緒に活動することは楽しい」「マット運動をやってみたい」と回答する生徒が増加し、器械運動や他者との関わりに対する不安や消極的な意識が軽減されたことが明らかとなった。体操という共通の課題に取り組む中で、自然な形で他者と関わる経験が積み重なったことが心理的な安心感につながったと考えられる。

第二は、ペア活動を通したコミュニケーション行動の量と質の向上である。授業初期には教師の言葉掛けや身体介助がなければ関わりが成立しない場面が多く見られたが、授業を重ねるにつれて、視線を向ける、相手の位置を確認する、タイミングを合わせて動くといった行動が自発的に見られるようになった。これにより、言葉によらないコミュニケーションを含めた相互的な関わりが形成されていったといえる。

第三は、個々の生徒の実態に応じた人間関係の形成が促進された点である。男子生徒Ａは短い言葉や指差し、視線といった複数の手段を用いて自分の要求を伝える場面が増加し、双方向のやり取りが成立するようになった。女子生徒Ｂは自発的な発語は限定的であったものの、相手の動きや掛け声を手掛かりに行動を調整するなど、相手を意識した関わりが安定して見られた。このことから、発信の形は異なっていても、それぞれの生徒にとっての「関わり」が確実に広がったと評価できる。

第四は、体操指導の構造化が人間関係の形成を支えた点である。基礎的な動きから段階的に内容を設定し、役割や関わり方を明確にしたことで、生徒は活動の見通しを持ちやすくなり、相手に意識を向ける余裕が生まれた。結果として、体操技能の向上とともにコミュニケーション行動の増加が見られた。

（2）課題

本研究を通して、以下の課題も明らかとなった。

第一は、自発的な言語による発信の定着には個人差が大きいという点である。男子生徒Ａについては言語表出の増加が見られたが、女子生徒Ｂについては自発的な発語が十分に引き出されたとは言い難い。体操場

面における関わりは深まったものの、言語表現を伴うコミュニケーションの拡大についてはさらなる支援の工夫が必要である。

第二は、活動内容や相手が変化した際の汎用性の検証が十分ではない点である。本研究では、マット運動という限定された活動内容の中での成果を検討しており、他の運動種目や日常生活場面においても同様の関わりが見られるかについては、今後の継続的な実践、観察が求められる。

第三に、評価方法の精緻化が挙げられる。本研究では、教師の行動観察や動画記録をもとに評価を行ったが、関わりの変化をより客観的に示すためには、チェックリストの項目や評価基準をさらに整理し、複数の視点で評価する必要がある。

第四は、授業時間や回数の制約である。全６回という限られた授業時間の中で一定の成果は見られたものの、人間関係の形成には継続的な取り組みが不可欠である。単元終了後も同様の関わりを意識した指導を積み重ねていくことが重要である。

以上のことから、体操指導を通した人間関係の形成は、知的障害生徒にとって有効な手立てであることが示唆される。一方で、個々の実態に応じた支援の工夫や、他場面への広がりを意識した継続的な指導が、今後の重要な課題であると言える。

論文 7

つながる ひろがる 北海道から全国へ

～全国盲学校フロアバレーボール大会を中心としたスポーツへの多様な関わり方の実践～

北海道札幌視覚支援学校　主幹教諭　三上　友佳子

Ⅰ 研究の目的

全国盲学校フロアバレーボール大会は、全国の盲学校・視覚支援学校に通う生徒たちのバレーボール（フロアバレーボール）の全国大会である。

この全国大会は、全国を８つのブロック（北海道・東北・関東・北信越・東海・近畿・中四国・九州）に分け、その地域の代表校と、前年度優勝地区の第２位の学校、及び主管校の合計10チームで競い合う大会であり、今年９回目となる。

北海道地区が全国大会を担当するのは、種目変更前の第31回グランドソフトボール大会に続き、今回で２回目である。

今大会は、「つながる、ひろがる、北海道から全国へ」という大会運営ビジョンを掲げた。

このビジョンには、学校（職員）だけで完結しそうな大会運営を、①より生徒たちが関わり活躍できる大会にしていくこと、②他の学校の生徒たちが関わり活躍できる大会にしていくこと、③さまざまな組織や企業が関わり共生社会をより身近なこととして感じてもらうこと、そして、北海道大会を通じて、スポーツへの関わり方や、視覚障害スポーツへの理解が全国へと拡がっていく未来を想像して付けたものである。

ここでは、思い描いたビジョンを基に、全国盲学校フロアバレーボール大会への参加・運営・学習を通じて、生徒たちがスポーツへ多様な形で関わることの教育的効果と実践モデルを明らかにする。

特に競技者だけではなく、運営、サポート、情報発信など、多角的な役割を担うことで得られる非認知能力（協調性、主体性、問題解決能力など）の向上を検証することを目的とし、校内・地域・全国との連携を強化する実践を通して、共生社会の実現に向けた視覚障害教育の役割を示していく。

Ⅱ 研究の内容、方法

この研究は、以下の３つの柱を中心に、その活動実践とその効果検証を主たる内容とする。

１　支える実践
２　観る（聞く）実践
３　する実践

Ⅲ 実践とその効果

1 支える実践

(1) 大会テーマソングの作成

① 実践内容

本校音楽部を中心とし、大会テーマソングを作成。楽曲提供者の許可を得て、歌詞をフロアバレーボール大会用に作成。歌詞の作成は、高等部普通科重複学級の国語科の授業でも行った。

リミックスは、寄宿者指導員が担当した。

② 効果

歌詞作りでは、自分の好きな言葉を選ぶだけではなく、どのような言葉を用いると大会に参加する選手のモチベーションが上がるのか、それぞれの意見に感化されながら活発な話し合い活動が展開された。歌詞を担当した重複学級の生徒たちは、さらに参加記念品である本校のキャラクターマスコット作りも行っていた。自分たちの学習が、フロアバレーボール大会にたくさん関わっていることを理解し、さまざまことを関連づけながら、より主体性が生まれる学習活動となった。

歌唱部分は当初音楽部の生徒が歌入れを行う予定であったが、寄宿舎での活動中に実施したこともあり、音楽部ではない寄宿舎生の小中学部の児童生徒が「自分たちも歌いたい」と自らこの活動に加わりたいと自分の考えを表現する児童生徒が多く現れた。

また、リミックスを担当した職員からは「いろいろな曲作りに関わってきたが、60トラックにもなったのは初！新しくわかったことも多数あった。楽しい音楽作りに関われて、こちらこそありがとうございました」というコメントが寄せられた。

参加した選手・スタッフたちからは、「テーマソングがあり、大会全体が盛り上がった」という声が多く聞かれた。

(2) 大会ポスターの作成

① 実践内容

本校美術部の生徒に声をかけ、大会ポスターの原画作成を依頼。

大会テーマ「仲間とともにつなげ白球　熱闘広げろ北の大地から」の文字配列や色など、iPad を用いて作

成した。

② 効果

原画を作成するにとどまらず、大会テーマの挿入も含めてポスター全体のデザインを自主的に考えた。

最終デザインに至るまでには、テーマから受け取る感情や作品に込めた思いが曖昧になってしまわないように、何度も試行錯誤を重ねていた。少しでもよいものとなるよう、妥協せずに粘り強く取り組む姿勢が見られた。

作成者については、公にしないでほしいという非常に消極的な生徒であったが、新聞社の取材にも応じてくれ、作品に込めた思いを伝えるなど、前向きな心の変化が生まれ、その後の学習場面においても積極的にアイデアを提供したり、自分の考えを伝えたりする場面がより多く見られるようになった。



＜図１　大会ポスター＞

（3）国歌独唱とファンファーレ

① 実践内容

これまでの大会では、CDで国歌を流すことが多かったが、音楽科を卒業した専攻科生がいることもあり、国歌独唱を生徒に担当してもらった。

また、音楽部の有志たちにより、ファンファーレの演奏も行い、大会の開幕に彩りを与えた。

② 効果

国家独唱の練習を聞いている後輩たちが「自分もあんな風に歌えるようになりたい！」と、より意欲的に音楽活動に取り組むようになった。

また、ファンファーレはその楽曲作りにおいて自主的にアイデアを出してくれる生徒が現れ、より主体的に活動に関わろうとする様子がみられた。



＜写真１　ファンファーレを演奏する音楽部員＞

（4）応援ダンス

① 実践内容

本校ではここ数年、コンサドールズさんと一緒に運動会でチアダンスのパフォーマンスを披露している。大会でも各チームを応援しようと、有志の児童生徒、保護者を募ったところ、9名の応募があった（当日は3名の欠席あり）。

チャレンジドチア北海道の12名と、コンサドールズ9名、そしてドーレくんに加え、介護等体験で大会に参加してくれた北海道大学と北海道教育大学札幌校の学生48名、さらに、大会のサポーターとして協賛してくださった、ぎょれんのキャラクター「ホタテリオ」とよつ葉乳業の「みるる」を加えたメンバーで、みんなで応援ダンスのパフォーマンスを行った。



＜写真２　みんなで応援ダンスの様子＞

② 効果

コンサドールズのパフォーマンスでは、北海道ではパラスポーツを応援してくれるプロスポーツがあり、みんなでスポーツを応援している街であるということを全国の参加者たちに広げることができた。

ぎょれんのおさかなダンスを披露することにより、北海道にはおいしい海産物がたくさんあることを楽しく知らせることができた。また、みるるが登場することにより、乳製品を扱う会社も大会をサポートしていることをPRでき、北海道の良さを十分に伝えることができた。参加者からは札幌の小学生たちが応援ダンスをしてくれて感動したという声が寄せられた。



＜写真３　ドールズさんと各キャラクターと審判団との集合写真＞

（5）理療啓発

① 実践内容

本校の理療科教員により、実際のゲームが行われる大会２日目と３日目にマッサージブースを開設。大会参加者や地域の方向けにマッサージ体験をしてもらった。

② 効果

施術数は大会２日目で90名、大会３日目で78名、合計168名だった。

肉離れをしたと思われる他校の選手が来て、応急処置を実施した。

大会参加者からは、「施術してもらったおかげで、安心して大会に臨むことができた」という声があった。



＜写真４　マッサージブースの様子＞

（6）ボランティア

① 実践内容

大会を支えるボランティアとしては、介護等体験の学生（北海道大学・北海道教育大学札幌校）48名に加え、北翔大学の学生12名と、北海道医療大学の学生2名、中外製薬社員3名、保護者7名が加わり、総勢72名であった。

学生ボランティアは２つの係に分かれて活動してもらった。

１つ目はチーム対応係である。コンシェルジュとしてチーム付となり、チームからのさまざまな要望に対応した。

２つ目は競技運営補助係である。モッパーや得点板、ボールリトリーバーを担ってもらった。

さらに、北翔大学から参加してくれた12名のうちの4名はこれまでのバレーボール経験を活かし、線審として審判団に加わってもらった。

大会を大きく支援してくださった中外製薬の社員の方は得点係を担当した。

保護者の方はみんなで応援ダンスを行う人、理療啓発ブースでの受付、協賛品コーナーの担当に分かれて担当した。

② 効果

より多くの学生や健常者の方に大会に参加してもらったことで、視覚に障がいがある人の動きや、視覚に障がいがあっても楽しめるスポーツがあることを知ってもらうことができた。また、チームやフロアに近い場所での活動を行ってもらうことで、初めて観るフロアバレーボールそのものの迫力や魅力を感じてもらうことができた。

障がい者スポーツは健常者の審判などのサポートが不可欠である。「する」楽しみだけではなく、健常者である彼らを通して、一人でも多くの人々に障がい者スポーツを「支える」楽しさもあることを知ってもらい、その楽しさが拡がっていくことを期待している。

（7）最優秀選手賞とベストシックス賞のトロフィ制作

① 実践内容

北海道札幌高等養護学校木工科に依頼し、最優秀選手賞一つと、ベストシックス賞６つの木製のトロフィを作業学習にて制作してもらった。

どのような思いで、どのような工程でトロフィが制作されたか、フォトムービーでまとめてもらった。動画は、大会ホームページに掲載した。

② 効果

木製のトロフィは、北海道らしさをよりアピールで

きるものとなった。また、動画をホームページに掲載したことで、地域の知的障がい特別支援学校の協力も得て、大会が開催されたことをより多くの人に周知することができた。このことは今大会の成果として大会関係者に深い感銘を与えることができた。

この活動は、本校のみならず、他校の教育活動への広がりにも寄与することができた。



＜写真５　制作してくれた最優秀選手賞とベストシックス賞のトロフィ＞

（8）審判団の編成

① 実践内容

全国大会規模でありながら、審判団は競技団体に委嘱せず、全国の盲学校に所属している教員で編成されている。このことは他のスポーツではなかなか考えられないことであろう。

県内に１つしかない盲学校がほとんどであり、転勤すると他障がいの学校へ行ってしまうため、審判技術のある教員の確保が課題の一つである。

今大会では、全国大会専門委員会を中心とし、審判団を各地域からの推薦だけに頼ることなく、障がい種の枠を超え、審判技術のある先生、学校に依頼して審判団を結成した。また、今後の普及発展を目指して、大学生のボランティアを4名加えた。



＜写真６　審判講習会を受講している審判団＞

② 効果

所属先の理解もあり、盲学校に限らず、高い審判技術がある先生方で審判団を編成することができた。

ルールの理解があり、ジャッジの公平性が保たれていることから、スムーズな競技進行を行うことができた。参加チームからの審判団への評価も高かった。

大会に向けた２度の審判講習会を経て、個の審判技術と、審判員同士のコミュニケーションを向上させてきた。引き続きフロアバレーボール連盟と連携を図りながらこのような審判講習会を活用し、正確なジャッジメントができる審判員を増やしていくこと、また、審判をやりたいと思う先生をさらに増やしていく。

2 観る(聞く)実践

(1) CHEEREPHONE の導入

① 実践内容

CHEEREPHONE（チアホン）とは、クラウドサービスにて提供されるリアルタイム音声配信サービスである。現在、プロスポーツ（野球やＪリーグ等）をはじめ、様々なスポーツ観戦時にこのシステムが導入されている。このシステムは特別なアプリをスマートフォンに入れなくても視聴URLにアクセスするだけで利用することができる。また、観ている人がリアルタイムで質問したいことを送信することができ、実況解説側でそのコメントについて答えることができる面白さもある。

② 効果

リアルタイム配信での実況・解説は非常に好評であった。また、このシステムを YouTube にも活用することで実況解説のある YouTube 配信も可能となった。

試合が始まったばかりの時はうまく広報活動を展開できず、会場内でのリアルタイム視聴者数は多くなかった。しかし、YouTube から視聴している視覚障がいの人は多くいたので、馴染みのないシステムの活用に向けて、いかに広報活動を浸透させていくかがとても重要であることがわかった。

このシステムの導入にはお金がかかるが、視覚に障がいがある人もそうではない人も、観ている人全員がよりゲームを深く楽しむことができる、非常に有効的なシステムであると考える。

今後、プロスポーツだけではなく、アマチュアスポーツにおいても、視覚に障がいがあり、ゲームの様子を見ることができない人達にゲームを観る（聴く）面白さを味わってもらえるツールの一つして広く普及していくことが望まれる。



＜図２ CHEEREPHONE のチラシ1＞



＜図３ CHEEREPHONE のチラシ2＞

生徒が担当した。

解説は、本校職員と全国盲学校フロアバレーボール大会の審判団で担当した。



＜図４　大会２日目Ａコートのサムネイル＞

＜図５　YouTube チャンネルの URL＞

② 効果

動画視聴回数は、令和8年１月15日現在で全ての動画を合わせて20,707回である。

実況と解説を入れたことにより、より多くの視聴者を獲得することができた。

CHHEREPHONE のターゲットが視覚障がい者と、フロアバレーボールをあまり知らない人達に向けてのものであったため、簡単なルールの紹介からの解説となっている。フロアバレーについて知ってもらうためにはよりわかりやすい動画となっており、フロアバレーボールや視覚障がいについて知ってもらうための素材の一つとして活用したいという要望が寄せられた。

また、参加選手達にとっては自分のプレーやチームの戦い方について解説してくれているので、競技力の向上のために参考になったとの意見も寄せられた。

展開が早いゲームの状況を声だけで正確に伝えるためにはより高度な技術や練習が必要となるが、素人である我々ができるだけわかりやすく伝えようした今回の試みは大きな１歩であると自負している。

(2) YouTube のライブ配信

① 実践内容

「@全国盲学校体育連盟」というチャンネルを作成し、ライブ配信を行った。開会式を含め、コート毎に、大会２日目、大会３日目の様子を配信した。

配信トラブルの回避のため、連続撮影とした。チャプター機能を活用し、長い動画でも見たいゲームにすぐ飛べるようにした。

使用したビデオカメラは各コート２台ずつで、１台はコート撮影用とし、もう１台は得点版撮影用とした。コート撮影用は、より高画質（4K）で広角撮影が可能な Panasonic 製と、sony 製の家庭用ビデオカメラを使用した。

配信動画は Blackmagicdesign の ATEM Mini を活用し、ピクチャーインピクチャー機能を使ってコート上の競技画面に得点画面の表示を行った。

Ａコートは実況解説付きの動画配信を行った。

Ｂ コートは２階観客席がなく、フロア上からの撮影だったため、実況解説なしの動画配信を行った。

実況は、本校職員と札幌龍谷学園高等学校放送局の

(3) 高校生による実況ボランティア

① 実践内容

札幌龍谷学園高等学校放送局の生徒３名がそれぞれ

実況を担当した。

いつもは本の朗読や原稿を読む活動が多いため、実況を行うことが初めての生徒ばかりであった。夏季休業中に本校のフロアバレーボール部の練習に参加しながら実況の練習を行い、本番を迎えた。



＜写真７　実況解説の様子＞

② 効果

どのように伝えたらよいのか、戸惑うことが多かった生徒達であるが、ゲームが進行していく度に実況技術を身につけていった。

視覚障がい者にとってわかりやすく伝えることの難しさを感じながらも、どのようにすることでわかりやすくなるのかを彼らなりに考え、工夫と実践を重ねていく様子がみられた。

生徒たちからも、視覚に障がいがある人に今ある状況をわかりやすく伝えるためにはどのようにしたらよいのか、難しかったけれどとてもよい経験になったという感想が寄せられた。

また、全国大会終了後に行われた高文連のアナウンス部門の大会において、フロアバレーボールを紹介したいという意向もあった。

CHEEREPHONE や YouTube では、彼らの友人達も数多く視聴してくれており、彼らを通してたくさんの健常者の方にフロアバレーボールや視覚障がいについて知ってもらうことができた。また、その先へと伝わっていき、共生社会の実現に近づくことを期待している。

（4）視覚障害スポーツに特化した北海道パラスポーツ体験会

① 実践内容

大会２日目に、北海道が主催する「北海道パラスポーツ体験会」を大会会場である北海道立総合体育センター内ホワイエにて実施した。

今回の体験会は視覚障がいスポーツに特化した種目であり、「ブラインドサッカー」「ブラインドマラソン」「タンデム自転車」「視覚障害のバイアスロン」「馬術」「ローイング」の種目体験が行われた。

北海道及び各種競技関係者の方々からの協力もあり、体験者数は95名であった。

② 効果

会場の外も活用して自転車やランニングなどの体験を行うことができた。通りすがりの地域の方も来場し体験する様子がみられ、視覚に障がいがあっても楽しめるスポーツがあることを知ってもらう機会となった。

また、盲学校に通う生徒たちでもなかなか経験しない種目も多々あり、参加したチームの選手たちも興味をもって体験している様子もみられた。

この体験会の様子は北海道スポーツみらい会議 note や HBC ニュースにも取り上げられている。

教育やフロアバレーボールの域を超え、さまざまな関係機関とつながりながら今回の活動を展開できたことは今までになく画期的なことである。

1つの団体だけでは難しいことも、さまざまな団体と連携しながら取り組んでいくことで、パラスポーツの理解啓発がより拡がる可能性を感じた。パラスポーツ（特に認知度や競技人口が少ない視覚障がいスポーツ）は今後も教育だけにとどまらず、さまざまな関係機関と手を携えながら、活動を展開することでパラスポーツの振興と理解につなげていきたいと考える。



＜写真８　射撃体験をしている参加選手＞

3 する実践

（1）参加チーム及び大会結果

① 実践内容

参加チームは、次の10チームである。

北海道札幌視覚支援学校（北海道地区代表）

岩手県立盛岡視覚支援学校（東北地区代表）

筑波大学附属視覚特別支援学校（関東地区代表）

石川・長野・松本合同チーム（北信越地区代表）
三重県立盲学校（東海地区代表）
大阪府立大阪南視覚支援学校（近畿第１代表）
大阪府立大阪北視覚支援学校（近畿第２代表）
山口県立下関南総合支援学校（中国四国地区代表）
宮崎県立明星視覚支援学校（九州地区代表）
浜松視覚特別支援学校（アンビシャス枠代表）

参加選手は、合計86名であった。

大会の結果は次のとおり。

優　勝：筑波大学附属視覚特別支援学校
準優勝：大阪府立大阪南視覚支援学校
第３位：三重県立盲学校

札幌視覚支援学校は、１回戦は突破したものの、第３位となった三重県立盲学校に敗戦し、入賞を逃した。

② 効果

選手と引率に分け、それぞれ大会アンケートを実施した。これらによると、大会について次の２点が評価された。

ア　「北海道らしさ」とホスピタリティあふれる「手厚い運営」
イ　「競技モチベーションの向上」と「チームワークの再認識」

大会の企画・運営面については、選手・引率者ともに非常に高い満足度が示された。

また、大会は、選手の競技意欲を大きく高め、チームスポーツの本質を再認識させる場となった。

コメントの中には、大会を通じて技術的な課題だけでなく、精神的な成長やチームとしての一体感を深く感じているものが多く、今後の競技生活への強い意欲を示しているものも多かった。



＜写真９　試合前に円陣を組む札幌視覚のチーム＞

Ⅳ まとめ

「つながる、ひろがる、北海道から全国へ」という大会運営ビジョンの基、校内、校外、教育、行政、競技団体、一般企業等、関係機関との連携を第一に考えながら大会の準備と運営を行った。

さまざまな分野の人達と話をしていくことで、より新しいアイデアや工夫が生まれた。また、自分たちの周りにはこの活動について快く協力してくれる存在がたくさんあることを知った。無事に大会を終えることができるかの不安もあったが、つながることでの安心感はとても大きなものであった。

１つの大きな目的として、この全国大会を大会に出場する選手のためだけのものではなく、関わる人全てにとって価値のある大会運営を目指していた。より多くの児童生徒、また関係者の方々とつながることができ、それぞれがスポーツを「支える」「観る」「知る」ことで、スポーツの楽しさや難しさ、喜びや感動をともに味わうことができたと考える。

次年度以降も続く全国盲学校フロアバレーボール大会が日本の視覚障がいスポーツや視覚障がい者への理解につながる活動となり、視覚に障がいがある生徒たちとともに、他の学校や行政、一般企業、関係諸団体も一緒に、さまざまな形でスポーツを楽しみ、輝ける場にしていきたい。

共生社会の実現に向けて、視覚障害教育が果たす役割として今回の実践が有効であったかどうか、未来が答えを出してくれることに期待している。北海道から日本中へ、さまざまな工夫とアイデアを広げ、パラスポーツを全ての人々にとって身近なものになるよう、これからも尽力していきたい。

そして、大会に向けてご協力してくださった全ての皆様に、この場をお借りして感謝申し上げます。

【参考資料】

1　大会ホームページ

2　大会テーマソング

エガオのミライ～第9回全校盲学校フロアバレーボール北海道大会バージョン

3　ベストシックス賞のトロフィはこうして作られた

～北海道札幌高等養護学校のトロフィの製作

論文 8

パラスポーツのデジタル支援
～自己効力感の向上を目指して～

北海道星置養護学校ほしみ高等学園　教諭　立石　光平

Ⅰ　研究背景

1 本校の概要と教育課程

北海道星置養護学校ほしみ高等学園は、昭和54年に開校した北海道星置養護学校の高等部が前身である。この開校に際し、生徒の多様なニーズに対応するためコース制が導入された。

本校の学校教育目標は、「一人一人の思いを大切にし、豊かに生きる力を育てる」である。この目標に基づき、生徒に以下の５つの力を育むことを目指している。

①物事を考え、伝える力。
②自己選択を通して主体的に関わる力。
③生活する力。
④働く意欲や働くために必要な力。
⑤自分の役割を果たす力。

教育課程は、この目標達成のため、教育的ニーズに合わせて多数のグループに分けることが可能なコース制を基本構造としている。全生徒の自立と社会参加を目指して、カリキュラムを作成している。

2 研究の目的

本校では生徒の進路が福祉的就労や生活介護に集中する傾向にあり、卒業後の生活において、職業ではない場面での地域社会との具体的な接点や、生涯にわたる健康維持・余暇活動のスキルを獲得する機会が不足する。

パラスポーツは競技会や体験会を通じた学外・地域住民との交流を伴うため、「社会参加」を抽象的な目標に留めるのではなく、具体的かつ能動的に地域社会と関わる手段を提供することができる。パラスポーツを通して高等部卒業に向けた社会参加スキルを培うことが目的である。

Ⅱ 研究の内容

1 自己効力感について

社会参加は自己効力感によって促進されることが実証されている（Yeung, Passmore, & Packer, 2012）。自己効力感とは「個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知」である（Bandura,1982）。つまり、自分にはできるという確信（自己効力感）を持たせることが、社会参加を実現する前提条件と言える。Bandura（1977）は、自己効力感を「遂行行動の達成」、「代理体験」、「言語的説得」、「情動的喚起」という４つの要素に基づいていることを明らかにした。

第１の要素は、遂行行動の達成である。これは個人的な熟達経験に基づくものであり、４つの情報源の中で特に影響力が大きいとされる。成功体験は熟達の期待を高める一方で、失敗の繰り返しは特に一連の出来事の初期段階で生じた場合、期待を低下させる。一度強力な効力感が確立されると時折の失敗による負の影響は軽減され、むしろ努力によって障害を克服する経験を通じて自己動機づけられた粘り強さが強化される場合がある。

第２の要素は、代理経験である。人々は自身の直接的な経験だけでなく、他者の行動を観察することによっても効力感を得る。他者が脅威となる活動を不都合な結果を招くことなく遂行する様子を観察することで、観察者は自身の努力によっても同様の結果が得られるという期待を抱くようになる。

第３の要素は、言語的説得である。これは過去の失敗体験にも対処可能であると信じさせる働きかけとして広く用いられる。

第４の要素は、情動的喚起である。激しい動悸や緊張は「自分にはできない」という思い込みにつながりやすいため、心が落ち着いていること自体が成功への自信となる。 ゆえに緊張を鎮めることは、不安の解消にとどまらず、対処能力への信頼感を高めることで、より良いパフォーマンスを引き出す。

なお、これらの要素が効力感の期待に与える影響は、その情報が個人によってどのように認知的処理され、評価されるかに依存する。しかし、知的障害の生徒は認知の低さから過去の失敗経験や周囲からの否定的なフィードバックが多く、成功に対する期待が持ちづらい（Zigler et al, 1986）。

本研究は、Bandura の提唱する４つの要素（遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、生理的状態）に

基づいた多角的なアプローチを行うことで、生徒の不安や緊張を和らげつつ成功体験を積み重ねた。これらを通して、社会参加に必要な「自信」と「意欲」を育成することを目指した。

2 研究の対象

知的障害特別支援学校高等部、重複学級１年生の生徒Ａを対象とした。生徒Ａは明るくコミュニケーションをとることに意欲的な生徒である。しかし、初めての活動に対して強く緊張を持ち、近くにいる保護者や教員に助けを求める。筋力が少なく心臓に疾患があるため、強度の高い運動が難しい。家庭や学校では iPad を利用したゲームを余暇として好んでいる。生徒Ａは、学校のスポーツ大会でフライングディスクに参加し、好成績をとっている。過去に大会で好成績を収めたフライングディスクは、生徒Ａにとって確実な「遂行行動の達成（成功体験）」に基づく、抵抗感の少ない活動である。 加えて、日常的に嗜好性の高いデジタル機器（iPad 等）を導入することは、学習への不安を軽減し、安定した情緒（情動的喚起）のもとで意欲を引き出すための最適なアプローチであると言える。生徒Ａのパフォーマンスを引き出すため、フライングディスクとデジタル支援を支援の中心にした。

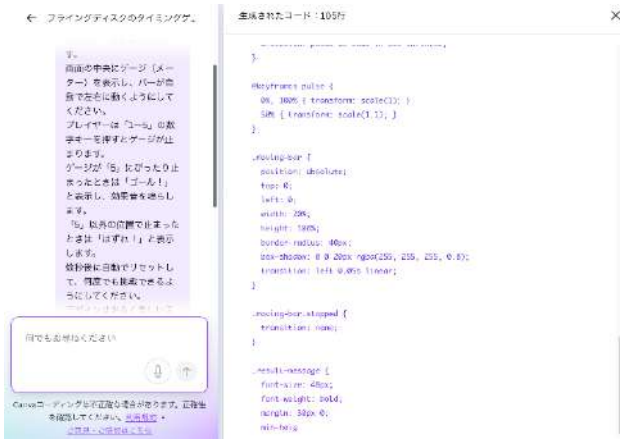
Ⅲ 研究の方法

1 フライングディスクゲーム

成田ら（1995）は、自己効力感を測るのに有効な尺度を開発した。しかし、質問の内容が抽象的であり、生徒Ａが質問の意味を理解して答えることは難しかった。代わりに、行った活動の中から１～５の順位をつけることで、生徒が有効な内容を受け取れるようにした、生徒Ａは、数字を理解しており1～30 までの数字を数唱できる。しかし、数字と具体物のマッチングはできておらず、大小が比較できない。空き時間を使用し、Canva AI を利用したフライングディスクのゲームで数字の学習を行った（図１）。 Canva AI は日本語プロンプトでゲームなど多様なデジタルコンテンツの制作をすることができる（図２）。AI により生徒の興味を引くゲーム形式にすることで、失敗への不安（情動的喚起）を低減させながら、パラスポーツへの導入と、力の強弱を数値化する学習を同時に行った。



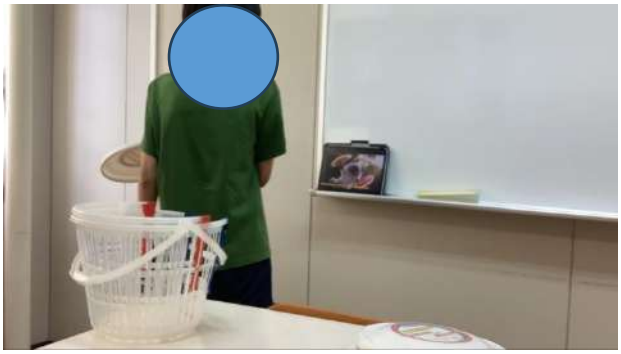
＜図１　フライングディスクゲーム＞



＜図２　ゲームへのプロンプト＞

2 動画によるフィードバック

学校の昼休みや学級活動の時間を活用し、投球練習を日常的に行なった（図３）。村山ら（2007）は、フライングディスクのスロー動作において動画によるフィードバックが有効であることを明らかにしている。iPad を好む生徒の特性を活かし、自身の投球動画を視聴させる活動を取り入れた。当初、生徒の動画への関心は娯楽的な側面が強かったと推測されるが、結果として自身のフォームを繰り返し確認することにつながり、「自分にはできる」というポジティブなイメージ形成（代理的経験）を支える足場となった。教師が「3の強さで」と具体的に声をかけることで、その場での力加減の調整が可能となり、成功体験へとつなげることができた。外部からの共通言語による支援があれば、適切なパフォーマンスを発揮できることが確認された。



＜図３　練習の様子＞

3 AI 画像による強化

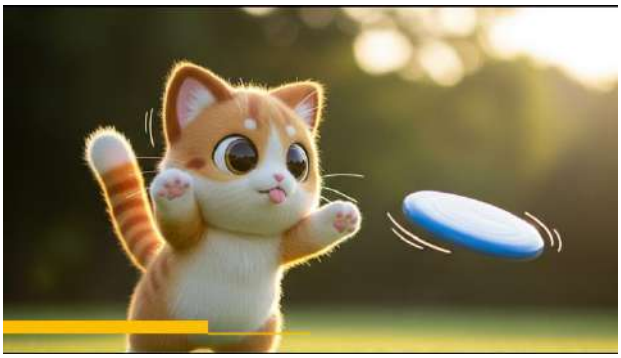
蓑内（1993）は、本人が活動を重要視することで自己効力感が上がり、動機付けにつながることを示唆した。そこで、練習への意欲を持続させるための「説得（報酬）」として、生成 AI（Gemini）を活用した画像生成を取り入れた。当初は、PowerPoint 上に好みのハロウィン画像を配置し、ゴール成功時に iPad をタップするとトークン（丸印）が増え、一定数で画像が変化する仕組みとした（図4）。これは自身の努力がキャラクターの成長に反映されることを視覚化し、ゲーム要素による動機づけを図ったものである。しかし、当初は活動への変容が見られなかった。生徒との対話から、トークンの蓄積だけではゴールまでの見通しが持ちづらく認知的な負荷が高かったこと、またハロウィン画像が現在の興味と合致していなかったことが判明した。そこで改善策として、画像を生徒の嗜好に合わせた「猫」中心の生成に変更した（図5）。さらに進捗表示をトークンから「ゲージ式」に変更した（図6）。左から右へゲージが溜まる視覚的表示はスタートからゴールまでの見通しを明確にし、生徒の不安を軽減させた。この変更後、生徒は「可愛いからもっとやりたい」と発言し、自ら iPad を操作して意欲的に投球を行う姿が見られた。



＜図4　ハロウィンのキャラクター＞



＜図5　猫のキャラクター＞



＜図6　アニメーションでゲージが進む＞

4 フライングディスク大会への参加

学校内の実践で培った自己効力感を、より社会参加という目的に応じて般化させることを目的とし、第28回北海道障害者フライングディスク大会「飛べリンピック北海道 2025 大会」に参加した。特に、校内では得難い以下の２点の獲得を意図した。第一に、障害のある成人がスポーツを楽しむ姿を観察することによる「代理体験（将来モデルの獲得）」の拡張である。第二に、第三者からの称賛や表彰を受けることによる「言語的説得（社会的承認）」の獲得である。これらを通じて、苦手な未知の環境下でも「生理的・情動的状態（不安）」を調整し、実力を発揮できるか（遂行行動の達成）を検証した。

本大会は成人を含む一般参加者が対象であり、生徒Ａは最年少級での出場となった。会場到着時は独特の雰囲気や観衆の多さに圧倒され、表情が硬く強い緊張（情動的喚起）が見られた（図7）。しかし、教師が「学校と同じようにやれば大丈夫」と声をかけ、事前の練習通りのルーチンを確認することで、徐々に落ち着きを取り戻した。過度な不安を自ら鎮め、適度な緊張感を持って待機できるようになった。

競技会場において、生徒Ａは他者が投げる様子を静かに見つめる姿が見られた。他者の技術を自ら模倣するまでには至らなかったが、楽しそうに活動する多くの参加者と同じ空間を共有したことで、「自分もここにいて良い」という安心感を得ることができたと考えられる。これは、技能的なモデリングというよりも、他者が楽しむ姿を通してその場の安全性を確認する代理体験として機能し、集団の中で落ち着いて活動を継続するための重要な支えとなった。

実際の競技では、練習の成果を発揮して最後まで投げ切ることができた（図8）。表彰式で賞状を受け取った際（言語的説得）、会場からの拍手を受けると、緊張

の解けた笑顔を見せた（図９）。活動後、教師に「楽しかった」と自ら発言したことは、不安を乗り越えて課題を達成した充実感の表れであり、自信を持って社会的な活動に参加できた大きな変容であったと考える。



＜図７　緊張が強く、列から外れて担任（筆者）に近づく様子＞



＜図８　競技中は笑顔で活動に向かった＞



＜図９　他の参加者と表彰を喜ぶ様子＞

Ⅳ 考察

1 チェックリストによる分析

本実践では、生徒の自己効力感の変容を客観的に評価するため、成田ら（1995）による「特性的自己効力感尺度（Generalized Self-Efficacy Scale: GSES）」を参考に、本対象生徒の実態と活動内容に即した独自のチェックリスト（以下、本尺度）を作成した。成田らのGSESは、「行動を起こす意志」「努力を持続する意志」「逆境における忍耐」などを測定する信頼性の高い尺度であるが 、項目内容が抽象的（例：「計画を立てる」「新規場面への適応」など）であり、知的障害のある生徒Ａが質問意図を正確に理解し回答することは困難であった 。そこで本尺度では、成田らが測定しようとした構成概念（困難課題への接近、失敗時の持続性など）を維持しつつ、Bandura（1977）が提唱する自己効力感の４つの情報源（遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、生理的・情動的状態）に基づき 、具体的なフライングディスク活動場面における行動指標へと項目を具体化した（図 10）（図 11）。

構成要素（Bandura，1977）	項目No.	質問項目（生徒への聞いかけ・観察点）	測定する内容（成田ら，1995との対応）
Ⅰ 遂行行動の達成	1	ゴールに入らなかった時、もう一回投げたいと思いますか？	失敗への耐性・持続する意志 （成田尺度：できるまでやり続ける）
	2	「3の強さ」や「5の強さ」を自分で決めて投げられますか？	自己調整・コントロール感 （成田尺度：計画の遂行）
	3	ゲーム（iPod）のゲージがたまると嬉しいですか？	達成の可視化・成功体験の認知
Ⅱ 代理的経験	4	自分の投げている動画を見たいですか？	自己モデリングへの関心 （客観的な自己評価）
	5	上手な人（動画や大会の選手）を見て、「自分もやりたい」と思いますか？	他者観察による動機づけ （成田尺度：新規場面への接近）
Ⅲ 言語的説得	6	他の画像（ご褒美）が出ると、「もっとやりたい」と思いますか？	報酬・フィードバックへの反応性
	7	先生や周りの人に「すごいね」と言われると、やる気が出ますか？	社会的承認・他者との関わり （成田尺度：友人関係・対人）
Ⅳ 生理的・情動的状態	8	初めての場所（大会など）でも、iPadやディスクがあれば安心ですか？	不安の低減・情動的喚起の抑制 （成田尺度：不安・困難の回避[逆転]）
	9	投げる時、ドキドキしないで落ち着いていますか？	生理的覚醒の自己モニタリング

＜図 10 チェックリストの要素を整理＞

フライングディスク　アンケート

1　しっぱいしても、　もういっかい　なげたいですか？
（ゴールにはいらなかったとき、　あきらめないで　やろうと　おもいますか？）
1　2　3　4　5

2　じぶんで　「3」や「5」の　つよさを　きめられますか？
（「つよく」　「よわく」を　じぶんで　かえられますか？）
1　2　3　4　5

3　げーむの　げーじが　たまると　うれしいですか？
（iPadの　いろが　かわると　やったーと　おもいますか？）
1　2　3　4　5

4　じぶんが　なげている　どうがを　みたいですか？
（iPadで　うつした　じぶんを　みたいですか？）
1　2　3　4　5

5　じょうずなひとを　みて　「やりたい」と　おもいますか？
（せんしゅの　どうがを　みると　まねしたく　なりますか？）
1　2　3　4　5

6　ねこの　がぞうが　でると　「もっと　やりたい」と　おもいますか？
（すきな　しゃしんが　でると　やるきが　でますか？）
1　2　3　4　5

7　「すごいね」と　いわれると　やるきが　でますか？
（せんせいや　みんなに　ほめられると　うれしいですか？）
1　2　3　4　5

8　はじめての　ばしょでも　iPadや　でぃすくが　あれば　あんしんですか？
（しらない　ばしょでも　いつもの　どうぐが　あれば　だいじょうぶですか？）
1　2　3　4　5

9　なげるとき　どきどきしないで　おちついて　いますか？
（こわがらないで　なげることが　できますか？）
1　2　3　4　5

＜図 11 実際に使用したチェックリスト＞

チェックリストについては、教師と１対１で、他に生徒や教師のいない場所で行なった。文字や言葉で難しい質問において、活動の写真やイラストによって理

解の促しを図った。作成したアンケートを用いて、生徒Aの活動に対する意識を測定した結果（図12）、以下の特徴が明らかになった。

カテゴリ	項目	回答内容（要約）	スコア	評価
Ⅰ 遂行行動	1	失敗してもやり直すか	2	課題(低い)
	2	自分で強さを決める	2	課題(低い)
	3	ゲージがたまると嬉しい	5	強み(非常に高い)
Ⅱ 代理経験	4	自分の動画を見たい	5	強み(非常に高い)
	5	上手な人(他者)の真似	2	課題(低い)
Ⅲ 言語的説得	6	画像(猫)でもっとやる	4	強み(高い)
	7	褒められるとやる気	5	強み(非常に高い)
Ⅳ 生理的状態	8	道具があれば安心(場所)	1	課題(非常に低い)
	9	投げるとき落ち着く	5	強み(非常に高い)

＜図12 チェックリストのスコア＞

（1）娯楽的興味から学習への転化（項目 3・4・9）

「ゲームのゲージ（項目3）」や「動画視聴（項目4）」はいずれも最高値の「5」を示した。これは元来iPadを好む生徒の特性と相まって、ICT教材への関心が非常に高かったことを示している。当初は娯楽的な興味が動機であったとしても、結果としてこれらが強力な「足場かけ（Scaffolding）」となり、自身の投球イメージの形成や、活動への持続的な参加を支える重要な要因となった。

（2）外的支援への依存とパフォーマンスの発揮（項目2）

実際の投球動作においては「落ち着いている（項目9：スコア5）」と回答し、安定したパフォーマンスを見せた一方で、「強さの自己決定（項目2）」は「2」と低かった。この乖離は、生徒Aの成功が内面化された能力によるものというよりは、教師の言語的指示やゲージ等の「外部支援への依存」によって成立していることを示唆している。しかし、裏を返せば「適切な支援さえあれば、課題を遂行できる」という事実の実証でもあり、ICT活用がその外部支援として有効に機能したと言える。

（3）場所限定的な自信と環境依存性（項目 5・8）

大会参加を通じて活動自体は完遂できたものの、「新しい場所での安心感（項目8）」はスコア「1」と最も低く、また「他者への関心（項目5）」も「2」に留まった。これは、本実践における自己効力感の高まりが、慣れ親しんだツール（iPad）と支援者の存在という特定の条件下で維持される環境依存的なものであることを示している。他者の真似をして自ら伸びていく段階には至っていないが、特定の環境設定下であれば社会的な場に参加しうるという可能性が示された。

2 今後の展望と課題

質問紙調査において、「新しい場所での安心感（項目8）」が低かったことは、生徒Aの自己効力感が「慣れ親しんだ環境・教師・道具」に依存していることを示唆している。卒業後の社会生活では、就労先や余暇活動の場など、環境が流動的になることが予想される。今後は、本実践で構築したiPadやフライングディスクを心理的な安全基地として機能させ、これらを携行することで、校外の公園や地域の体育館など、未知の環境でも「いつもの活動ができる」という安心感を保障する。その上で、少しずつ活動場所を広げ、環境の変化に対する慣れを高めていく支援が必要である。

Canvaによる視覚的フィードバックは、生徒の成功体験を支える支援となった。しかし、自分で強さを決める（項目2）のスコアが低かったことからわかるように、現時点では視覚情報に頼っており、自らの身体感覚だけで力加減を調整する段階には至っていない。今後の指導では、徐々にゲージの表示を減らす、あるいは画面を見ずに投げてから「今の強さは3くらいかな？」と振り返らせるなど、外部への依存を少しずつ減らしていく。これにより、iPadがない日常場面でも、自らの身体感覚を頼りに行動を調整できる力の育成を目指す。

失敗時のリトライ（項目1）のスコアが低かったことは、一度のミスで「自分はできない」と効力感が急激に低下しやすい傾向を表している。社会参加においては、失敗しても修正してやり直す力が不可欠である。今後は、あえて少し難しい課題を設定し、失敗した際に教師が「惜しい！次はこうすれば入るよ」と具体的な言語的説得を行うことで、失敗は能力不足ではなく、調整不足であるという支援を行う。失敗を「あきらめるきっかけ」ではなく「成功のためのプロセス」として捉え直させ、粘り強く取り組む態度を養う。

大会参加を通じて得られた「楽しかった」という充実感を一過性のイベントに終わらせず、生涯を通じた余暇活動へとつなげることが最終的な目標である。今後は、地域の障害者スポーツサークルやイベント情報の収集を生徒と共に行い、学校の手を離れても活動を継続できる具体的なリソースとの接続を図る。また、大会で目にした成人モデルによる代理経験を想起させ、「大人になっても続けられる」という長期的な見通しを持たせる必要もある。

Ⅴ 終わりに

本研究では、パラスポーツと ICT 機器を組み合わせた支援が、知的障害のある生徒の自己効力感と社会参加に与える影響について検討した。実践の結果、Canva による視覚化や動画活用は、生徒の元来の興味を学習意欲へと転化させ、不安の強い生徒が活動を持続するために機能したことが明らかになった。特に、生徒が自ら動画を見たいと求めた行動（スコア５）は、ICT が単なる教具を超え、生徒自身の「自分にはできる」というイメージ形成（代理的経験）を支える不可欠なリソースとなっていたことを示している。

一方で、チェックリストの「自分で強さを決める（スコア 2）」や「場所への安心感（スコア 1）」の低さが示すように、生徒の自己効力感は彼個人の内面的な能力として完全に定着したわけではない。これは、自立的な能力は未成熟であっても、慣れ親しんだツールと適切な支援が存在する環境においては高いパフォーマンスを発揮し、社会的な場面に適応できるという事実を実証している。ICT 活用は、生徒のできないことを補うだけでなく、本来持っている力を引き出すための環境調整として機能したと言える。

結論として、本対象生徒における自己効力感の向上は、ICT への依存を伴う場所限定的な自信であった。しかし、卒業後の社会生活において重要なのは、全てのことを一人で完遂することだけではない。自分を助けてくれるツール(iPad 等)を安全基地として携行し、それらを活用しながら社会と関わり続ける力もまた、現代における重要な自立の形である。 今後は、このツールに支えられた自信を起点とし、少しずつ支援を減らしながら、より実践的な社会へと適応の幅を広げていくことが課題となる

謝辞

本実践に真摯に取り組み、多くの気づきを与えてくれた生徒Ａさんと、ご協力をいただいたご家族の皆様に心より御礼申し上げます。また、本研究は公益財団法人明日佳の助成を受けて実施されました。パラスポーツを通じた生徒の成長を支える温かいご支援を賜りましたことに深く感謝いたします。

引用・参考文献等

1）大島寛,&オオシマヒロシ.2004.〈原著論文〉フライングディスク競技の参加者動向にみる過去 25年の歩み. 近畿大学健康スポーツ教育センター研究紀要, 3(1), 15-39.

Zigler,E.,Balla,D.,&Hodapp,R.(1986). Understanding mental retardation. Cambridge University Press.

2）成田健一, 下仲順子, 中里克治, 河合千恵子, 佐藤眞一, & 長田由紀子. 1995. 特性的自己効力感尺度の検討 生涯発達的利用の可能性を探る. 教育心理学研究, 43(3), 306-314.

3）Bandura, A. 1977. Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. Psychological review, 84(2), 191.

4）Bandura,A.1982.Self-efficacy mechanism in human agency. American psychologist, 37(2), 122.

5）蓑内豊. 1993. 課題の重要度の認知が自己効力の般化に及ぼす影響. 教育心理学研究, 41(1), 57-63.

6）村山, 光義, 村松, 佐々木, 清水, 靜代, & 野口. 2007. 動作映像の即時フィードバックを用いた技術指導の効果: フライングディスク・サイドアームスロー導入時の事例. 体育研究所紀要, 46(1), 1-15.

7）Yeung, P., Passmore, A., & Packer, T. 2012. Examining citizenship participation in young Australian adults: A structural equation analysis. Journal of Youth Studies, 15(1), 73-98.

論文 9

生徒の主体性を高めるスポーツ活動の推進と活躍の場について

～卒業後の暮らしと地域でのスポーツ活動との関わり～

北海道札幌稲穂高等養護学校　教諭　永易　健太

Ⅰ 研究の目的

1 学校の実態

本校は開校から15年目を迎えた札幌市手稲区にある通学型の公立特別支援学校（知的障がい／単置高等部）である。本校には現在「生産技術科（資料1）」「木工科（資料2）」「環境・流通サポート科（資料3）」「家庭総合科（資料4）」の4つの職業学科が設置されており、令和7年5月1日付の生徒数は77名と職業学科を設置する高等支援学校としては中規模な学校[1)]である。本校に入学してくる生徒の多くは札幌市内から通学し、１割程度の生徒が札幌市外から通学している。主たる障がいは知的障がいで、協調性運動障がいや自閉症スペクトラム症候群などを併せ有する生徒も在籍している。手稲区は人口約14万人で石狩湾に近い札幌市北西部に位置しており、多くの自然に恵まれた地域である。現場実習では恵まれた自然を支える企業等と繋がり、本校の教育活動に深い理解と協力をいただきながら就労実践を積んでいる。また、卒業後の進路先としては、約9割の生徒が居住地周辺の福祉事業所へ就労し、約1割の生徒が企業に就職している。本校の卒業生はそれぞれに合った事業所や働き方で社会自立・職業自立に向けた力を身に付け、5～7年かけて企業に就職する卒業生もおり、それぞれのペースでステップアップしながら地域定着に向けて自立していく生徒が多いことが本校の特徴の１つである。以上のことから自立した社会生活や職業生活を送るにあたり、働き続ける力や基礎体力の向上は重要な要素であり、地域生活の中で自分に合ったスポーツ活動を行ったり、自らで心身の保持増進をしたりすることが必要な力なのではないかと考えている。



＜資料１　生産技術科　～本校 HP より～＞



＜資料２　木工科　～本校 HP より～＞



＜資料３ 環境・流通サポート科 ～本校 HP より～＞



＜資料４　家庭総合科　～本校 HP より～＞

2 研究の目的

特別支援学校を卒業後、地域で行えるスポーツ活動には限りがあり、21～50 才までの働く世代においてはスポーツ活動との関わりが薄くなることも分かっていることから、メジャースポーツや馴染みのあるスポーツに関わらず職業自立が進むにつれて、スポーツをする頻度が少なくなっていくのは明確な事実なのだろうと考えられる。これからの時代を生きる子どもたちが、明るく豊かで活力ある暮らしをしていくためには、生涯にわたって豊かなスポーツ活動を暮らしの一部に取り入れながら心身の健康を保持増進していくことが重要である。現行の学習指導要領では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の3つの柱を目指す資質・能力として掲げられており、それらに向かってどの教育現場においても取り組まれているところ[2)]である。また、2025年6月には初の大規模改正が行われたスポーツ基本法の中でも、全ての国民がスポーツに親しむことのできる機会の確保や、スポーツを通じた心身のオプティマルヘルスの向上、する・見る・支えるに加えて集まる・つながる等との多様な関わり方を関連付け、人と人とをつなぎ人を幸せにする社会的インフラとしてスポーツの価値を高めながら機能させていくことが示されている[2)]。

現行学習指導要領における体育の見方・考え方としては、運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた「する・見る・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること、とその重要性が整理されており、現行学習指導要領の課題整理の中で「深める・つなげる」という視点が今後の課題として挙げられている[3)]。また、次期学習指導要領と関わりが深い視点に「何を理解し、何ができるか」「理解していること、できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」の3つの視点がある。まさに将来の暮らしとスポーツ活動との関わりにおいて直結する課題であり、どのように実現していくかを目的にしていくことが本校での学習指導や支援の先にある答えの1つなのではないかと考え、より実践的な活躍の場を提供したりアプローチしたりしていくことを本研究の目的に設定した。

研究では、本校の教育の中で取り扱うスポーツ活動全般を通して、将来の暮らしとの結びつきや地域定着の在り方、より深い学びや地域でのスポーツ活動との繋がりが持てる取り組み方について焦点を当て分析する。また、本校卒業生の実績も1つのモデルケースとし、高校生活におけるスポーツ活動が卒業後の余暇活動や地域でのスポーツ活動とどのように関わりながら暮らしに影響していくのかを整理し、本校のカリキュラムや教育活動への還元方法として効果の高い方法を追求する中で、卒業後の暮らし（継続的なスポーツ活動及びコミュニティ形成）に繋げられるかという観点から成果と課題を整理していくこととする。

3 本校部活動の現状

昨年度（令和6年度）の研究から、本校の運動部活動に加入していた生徒の多くは、運動部活動未加入者より「自己理解・自己管理能力」において自分自身が取り組んでいる活動に対する意義を感じ、今後の成長に向けて積極的に学ぼうとする姿勢や態度が養われているなどの成長を理解していることが明らかになったが、生徒のニーズと運動部活動との関連付けの薄さには課題が見られているのが現状である。

また、令和7年度の運動部活動の加入率は昨年度とほぼ横ばいの 28%（令和6年度より+1%）という結果となっている（資料5）。

学年	1学年	2学年		3学年		計		運動部
生徒数	27(18･9)	28(21･7)		21(14･7)		76(53･23)		全体の
(男女比)	今年度所属	今年度所属	前年比	今年度所属	前年比	今年度所属	前年比	加入率
バスケットボール	4名 (14%)	5名 (18%)	+1名	1名 (4%)	+1名	11名 (14%)	±0名	22名 (28%)
サッカー	0名 (0%)	0名 (0%)	±0名	3名 (14%)	−1名	3名 (4%)	−1名	
陸上	2名 (7%)	1名 (3%)	−1名	5名 (24%)	±0名	8名 (10%)	−1名	
文化部	8名 (29%)	9名 (33%)	+1名	2名 (10%)	±0名	19名 (25%)	+1名	
未加入者	14名 (50%)	13名 (46%)	−1名	10名 (48%)	±0名	35名 (47%)	−2名	

＜資料5　本校部活動の加入実績表＞

令和7年度新入生24名を対象に約１ヶ月間の部活動見学・体験期間を設けた後、アンケートを実施したところ、「入りたい部活がない、運動に自信がない」と答えた新入生が25%、現在本校には設置されていない「ダンス部」「バドミントン部」「体操部」があれば入りたいと答えた新入生が54%であった。このことからも昨年同様、生徒のニーズや時代に合った運動部活動が設置できていないことが本校の課題であり、仮に生徒のニーズに合った運動部活動を設置できた場合の学校全体の加入率は、現在の28%から48%となることが想定される（現状本校の運動部加入率 28%は全国の高校平均値よりも低い（資料2[4)]）。

運動部活動の活動環境を整備し、生徒の安全安心を保障しながら運動実績や経験を積み重ねることにより、卒業後のよりよい暮らしに向けた１つのアプローチとして機能させることができるのではないかと考えている。また、運動実績や経験を積み重ねていくためには、生徒のニーズに合わせた部活動の設置やスポーツ活動と地域生活との関連付けを行いながら実践を積み重ねられるように推進していく。



＜資料６　全国の運動部活動参加率＞

Ⅱ　研究の内容

１ 内容

(1) 地域のスポーツ活動への参加

「地域のスポーツ活動と繋げる」ことを大きな視点として捉え、地域でのスポーツ活動に参加した実績とその成果を整理する。生徒それぞれが目的意識を持ってスポーツ活動に取り組み、自身のこれからの暮らし方に興味を持ち、スポーツ活動が自分の暮らしをデザインするための１つのレパートリーとして考えたり、目標に向かって取り組む姿勢や態度を表現したりできる要点を探るため、生徒と参加したスポーツ活動の振り返りを行っていく。

(2) 情報の活用とサポート体制づくり

札幌市内で各種スポーツ団体が主催するイベントやスポーツ活動の情報を集め、生徒に情報提供をすると共に、生徒の希望やニーズに合った活動の実現に向けて、主体的にスポーツ活動に取り組めるサポート体制づくりや仕組みづくりを検討し構築することを目指していく。

なお、本研究での「主体的」とは、自分の考えや目的を持ち他者との関わりの中で自らの行動を選び取る姿勢のことを指す。未知なる活動に対してやってみたいと思えるようにする力や姿勢を育成できるようにサポートしたり挑戦しやすい環境設定をしたりすることが本研究においても重要な視点であると考えている。

(3) 課題の整理

主体性を高める上で地域でのスポーツ活動に参加するに当たり、生徒達にとってどのようなことが課題となっていたり不安に思っていたりしているのかを合わせて整理していく。

２ 校内におけるスポーツ活動

(1) 学校祭有志発表(2025.11.28)

区分	ダンス／器械運動
講師	南　愛佳氏 （Dance Studio Jamgrad 代表）
活動回数	１時間×5回 ※10 月下旬より毎週火曜日放課後に実施
内容	・発表内容のヒアリング(方向性の確認) ・振付、アクロバットの練習 ・ステージ発表本番（資料 7-1、2、3）
実績	①学校祭で行われた有志発表に4名１チームでエントリーした。演目はももいろクローバーZ の「いくぜっ！怪盗少女」を3分程度に編集し、オリジナルのダンスに加え、前宙やバック転などのアクロバットを取り入れた振付を全校生徒の前で披露した。
成果	①昨年度、保健体育の授業で行ったダンスと器械運動に興味を持ったり自信が付いたりしたことから本活動に発展した。 （通常授業との繋がり） ②外部講師（南愛佳氏）が運営するダンススタジオでのレッスンに興味を持ち、発表後ダンスレッスンに行っている。 （地域との繋がり）　☞Ⅱ-3(3)へ

	③東区の体操クラブ及び体操部の活動に興味を持ち、発表後練習に参加している。（地域との繋がり）　☞Ⅱ-3(4)へ ④意欲的に取り組んだことで、より達成感を感じ自己有用感が向上した。（活動意義の理解と適切な目標設定） ⑤余暇の時間や帰宅後など、メンバー間でお互いに連絡を取り合い、振付の確認や変更点について情報を共有していた。（他者との前向きな関わり）
課題	①練習時間や回数、本番までのスケジューリングは都度確認が必要だった。（自己管理能力） ②漠然としたイメージと自身の能力が把握できないことがあるため、自分たちで振付や技を考えることは経験不足により多くの支援が必要か。（情報収集能力／競技経験）



＜資料７－１　ステージ本番でのサビの振付＞



＜資料７－２　ステージ本番でのアクロバット＞



＜資料７－３　本番ラストポーズ＞

（2）バスケットボール部（2025.11.3）

区分	バスケットボール（女子／部活動）
活動回数	1～1.5 時間×約1か月（通常練習） 1.5 時間×4回（卒業生との合同練習）
内容	・大会出場に向けた基礎・実践練習 ・卒業生との合同練習 ・大会出場（資料 8-1.2）
実績	①既存部3名に加え、9月より参加者を募り、卒業生1名、在校生3名を合わせた7名で本校単独チームを組み、市立札幌みなみの杜高等支援学校（札幌市南区）で行われた「2025 北海道 FID バスケットボール選手権大会（予選会）」にエントリーした。3チーム総当たり戦（リーグ戦）を行い、0勝2敗であった。
成果	①出場定数に満たない既存部員数であったが、本校の規定に則り、出場定数を満たし単独チームで出場することができた。（校内規定の整備・活用） ②卒業生を含めた単独チームで、週１回程度合同練習を行うことができた（卒業後の余暇／スポーツ活動の推進） ③「就職したら体力も必要なのでスポーツは続けた方が良い」ということを卒業生が実感している。（活動の意義）
課題	①より安全に活動するための技術力やスポーツ活動の継続には至っていない。（技術の向上／スポーツ活動の継続）



＜資料８－１　試合中の様子①（本校キャプテン）＞



＜資料８－２　試合中の様子②（卒業生）＞

3 校外･地域におけるスポーツ活動

(1) 宮の沢ふれあいボッチャ(2025.10.25)

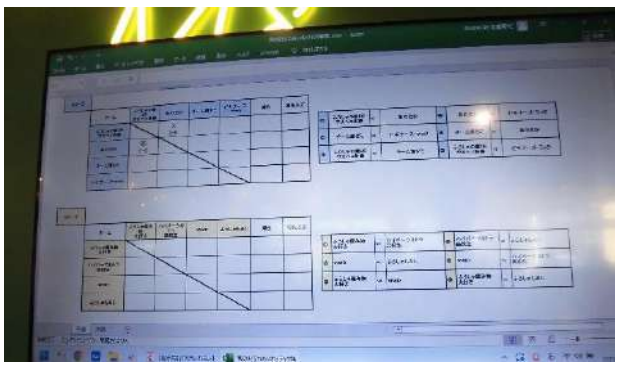
区分	ボッチャ（アダプティブスポーツ）
主催	Route148（石屋製菓）
活動回数	・保健体育1時間×1回 （事前練習･告知） ・12:00～16:00
内容	・チーム対抗戦（1チーム3～4名） ・リーグ戦（予選） ・トーナメント戦（決勝）
実績	①コミュニティスペース Route148（札幌市西区）で行われた「宮の沢ふれあいボッチャ」に7名2チームがエントリーした。（資料 9-1、2、3、4、5）
成果	①１チームが決勝トーナメントまで進み、準優勝することができた。（自己有用感の向上） ②地域の参加者とコミュニケーションを図りながら、取り組むことができた。（地域でのコミュニティ形成） ③参加生徒からは「楽しかったので参加できて良かった」「また参加したい」などの前向きな感想を聞くことができた。（達成感／主体性の育成）
課題	①タイムマネジメントが不十分だったため、予定開始時刻より遅れて参加した生徒もいた。連絡ツールやタイムマネジメント能力を身に付けることが必要である。（自己管理能力）



＜資料９－２　ゲーム中の様子①＞



＜資料９－２　ゲーム中の様子②＞



＜資料９－３　会場に映し出されたリーグ表＞



＜資料９－４　表彰（準優勝）を受ける生徒達＞



＜資料９－５　特別賞を受賞し喜ぶ生徒達＞

（2）インクルーシブダンス（2025.11.15）

区分	ダンス
主催	札幌市スポーツ局
講師	MAME（KING PRO 代表）
時間	14:30～16:00（資料 10）
内容	・チャレンジパラスポーツフェスタ（つどーむ）ダンスブースのイベント ・チャレンジダンスレッスン ・ダンス披露発表会
実績	①つどーむ（札幌市東区）で行われたチャレンジパラスポーツフェスタのダンスブースで実施されたイベントに１名が参加し、昨年度外部講師としてダンスの授業で交流のあったMAME氏とダンスを行った。
成果	①交流のある講師だったことで安心して参加することができた。（信頼関係の育成）
課題	①　「初めての場所で行く自信がない」「交通費がない」という理由で参加できなかった生徒もいた。（移動能力／公共交通機関の利用）



＜資料 10　ダンス協会作成のフライヤー＞

（3）ダンスレッスン体験（2025.11.30）

区分	ダンス
主催	Dance Studio Jamgrad（資料 11）
講師	南　愛佳氏 （Dance Studio Jamgrad 代表）
時間	13:15～14:15（ジャムクラス）
内容	・ウォーミングアップ ・ダンスレッスン体験（ジャンボリミッキー、カリスマックス、私の１番かわいいところ、それもいいね　など）
実績	①Dance Studio Jamgrad（札幌市西区）で 2026.1.12 に開催される「ゴーオンステージ Vol.2」に向けたダンスレッスンに２名が参加した。（資料 12）
成果	①時間いっぱい講師の振り付けを真似し、汗だくになりながらも楽しく踊ることができた。（運動量の確保） ②参加生徒同士で待ち合わせをし、会場まで時間通りに到着することができた。

	（伝達能力／移動能力） ③参加した生徒からは「緊張したけど踊っているうちにだんだん楽しくなってきた」「また行きたいと思う」「講師の振り付けが分かりやすく、スタジオに通いたいと思った」と、今後の余暇活動に繋がる取り組みとなった。（卒業後の余暇活動）
課題	①実際にレッスンを受けると考えた際、利用料金やレッスン時間などを鑑みると、金銭管理、時間管理、体調管理などの力を身に付けていく必要がある。（自己管理能力）



＜資料 11　ダンススタジオのフライヤー＞


＜資料 12　振り付けを覚える生徒達＞

（4）札幌モエレ新体操クラブ体験（2025.12.6）

区分	男子新体操
主催	札幌モエレ新体操クラブ 北海道札幌東陵高等学校　体操部
時間	2時間×2回
内容	・補強運動（縄跳びなど） ・トランポリン（資料 13） ・マット運動（資料 14-1、2）
実績	①札幌東陵高校（札幌市東区）で運営している新体操クラブ及び高校男子新体操部の練習に2名が参加した。
成果	①エアーマットやトランポリンなど普段体験できない練習環境で新たな感覚を取得することができた。（経験拡充） ②新体操部員の技を間近で見ることで、技のイメージや方法などを理解し、新しい技に挑戦することができた。（イメージの具現化） ③同世代の仲間と技を教え合うことで運動イメージのアウトプットがされ、運動感覚を言語化したり高めたりすることができた。（セルフイメージ向上） ④他校の高校生との交流を通し、日頃の学習活動がどのように活かされているのかを生徒らが実感することができた。（通常授業との繋がり／学習意義の理解） ⑤他の技にも挑戦したいという意欲や自分たちの可能性を広げようとする努力が見られた。（主体性の向上）
課題	①それぞれの居住地からは距離があるため、継続して活動するには金銭面や時間管理、自主練習の方法などを学んでいく必要がある。（自己管理能力）


＜資料 13　トランポリンで捻る感覚づくりをする生徒＞



＜資料 14-1　エアーマットを使用し前宙をする生徒＞



＜資料 14-2　ロンダートからバック転をする生徒＞

(5) SAPPORO スポーツバリアフリー(2025.12.13)

区分	アダプティブスポーツ全般
主催	札幌市 一般社団法人札幌市スポーツ協会
時間	12:00～16:00（資料 15）
内容	・アダプティブスポーツ体験 （ミニサッカー、車いすバスケ、ボッチャ、Tボール、フライングディスク、ダンス　など）
実績	①札幌市西区体育館で行われた SAPPORO スポーツバリアフリーに4名が参加した。
成果	①　ダンスに挑戦した生徒は「難しい振り付けにも挑戦できて良かった」「覚えた振り付けを機会があれば発表したい」と、学んだ技術のアウトプットの場を求めるほど主体的に活動することができた。（自己有用感の向上） ②「ボッチャ（資料 16）、フライングディスクなど学校の授業で行ったことのある種目もあり、楽しく取り組むことができた」と、経験していることで不安軽減や解消に繋がり、楽しく取り組むことができた。（通常授業からの汎化／活動の見通し） ③「車いすバスケ（資料 17）を体験できて良かった」と、バスケットボール部所属の生徒は新たな種目の可能性を知ることができた。 （経験の拡充／様々な競技の幅やルールの理解） ④未経験の種目にチャレンジする時はスタッフさんと確認しながら、楽しく取り組むことができた。 （地域でのコミュニティ形成）
課題	①「初めての場所で行く自信がない」「交通費がない」という理由で参加できなかった生徒もいた。（移動能力／公共交通機関の利用）



＜資料 15　スポーツ協会作成のフライヤー＞



◀
＜資料 16
ボッチャを
楽しむ生徒＞

＜資料 17
車いすバスケ
に挑戦する生
徒達＞▼



神面、金銭面など、自立に必要な力に直結するものであるが、これらに加え、
①情報収集能力、
②暮らしを豊かにするための思考、
③スポーツ活動をする習慣づくり、
④コミュニティづくり、
等を本校の教育活動の中に取り入れながら支援していくことが求められる。地域で生き生きと生活していくために、作業能力（仕事）だけではなく、「仕事・生活・余暇」のバランスを取ることが自分自身の人生を明るく前向きにデザインするための土台づくりが行えるようになるのではないかと考えている。

そのためには、生徒がより主体的・積極的にスポーツ活動や地域活動ができる場面や環境を学校が設定してサポートすること、そして生徒自らが情報収集し、それらを実生活で活かすためのノウハウを学習することが必要である。

保健体育も部活動も学校を卒業すれば終了･･･とならないように、「生徒自らが学び続ける、探し続ける、取り組め続ける意欲を持つ」ことができるようにサポートしていきたいと考えている。今後も引き続き、本研究における対象生徒の課題を解決するための学習活動を工夫し、支援していきたい。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1 卒業後の暮らしと地域でのスポーツ活動

地域のさまざまなスポーツ活動に参加したことで得た成果を、「学校で教師が取り扱う内容」と「将来の暮らしや余暇活動」という２つの側面から考えた時、「学びを深めて、地域のスポーツ活動に繋げていく」という取り組みはまだ不十分であると感じている。

日々の学習で積み上げた各教科・各単元の学びを学校という枠の中だけで終わらせることなく、その学びを地域のスポーツ活動に参加していく上で身に付けさせたい力を高めていく必要がある。生徒が地域生活をより豊かなものにしていくために、教師は「生徒が理解していること、得意にしていること、できること等をどのように地域生活に活用するか」という視点を常に大切にしていくことが何よりも重要である。この視点は生徒の「挑戦してみたい、やってみたいと思える思考づくりや行動力」「自己管理能力」を育てていく上で欠かせない要点であることを本研究の成果と課題が示している。

今、課題として挙げた「自己管理能力」は、時間、精

2 まとめ

これまで述べて来たように、日々の暮らしの中にスポーツ活動を取り入れることは重要であり、このことをどのように理解し捉えていくかが課題である。スポーツが共生社会の実現に向かうプラットフォームの１つとなるためにも、
①地域で何ができるかを知り、地域で何をするかを選択・実行する意義
②地域のスポーツコミュニティにおける居場所づくりの意義
を理解し、可能な限り早期に生徒を取り巻くコミュニティを形成していく必要がある。

また、親亡き後の地域での生き方や適切に支援を受ける方策等についてもでき得る限り具体的なイメージを持っておくことは将来の生活像を描く一助となり、その後の日常生活を生き抜く力にもなっていくことだろう。助けてくれたり支えてくれたりするのは間違いなく「人」である。人と人とを繋ぎ、人を幸せにしていくためにも、暮らしにおけるスポーツの位置づけや意

義を理解することは大切な要素であると考える。

ところで、コミュニティ形成にかかる活動は「スポーツ活動」に限定されるものではない。しかし、卒業後のスポーツとの関わり方が「する・見る・支える・知る」、そして「深める・繋がる」のどの視点であったとしても、スポーツしている方々が間近に居り、その様子を見たり真似たりすることで、脳の動きはスポーツをしている時と同じ働きをする（ミラーニューロン）ことが報告されている[5)]。「スポーツ活動」は人と人を結ぶ力に加え、個人の内面を活性化させる力がある。「スポーツ活動」は「コミュニティ形成」を図る上で非常に意味のあることだと捉えてよい。

また、「スポーツ活動」は「心身の最善の健康状態（＝オプティマルヘルス）」の保持増進にも有効であり、地域生活と「スポーツ活動」は切っても切り離せないことであると考える。

今後は、校内だけの学びや活動に留まることなく、地域生活の中で自分を表現したり、活躍したりできる場の実現を目指し、各学習や活動を相互に関連付け、地域の教育力を活用しつつ、学んだことや理解したことを深めたり発揮したりできるようなカリキュラムの検討、そしてスポーツ活動の推進に努めていくことを新たな目標として、本研究のまとめとする。

引用、参考文献等

1）北海道札幌稲穂高等支援学校 HP
2）第64回全国学校体育研究大会北海道大会 研究紀要、2025年
3）スポーツ基本法について、スポーツ庁HP、2025.12.24 閲覧
4）運動部活動の現状について、スポーツ庁「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン作成検討会議第１回」資料2、平成29年5月
5）ミラーニューロンの発見、マルコ・イアホボニ（塩原通緒　訳）、早川書房、2011年7月

表紙デザイン　落合楓雅さん
令和7年3月
北海道手稲養護学校三角山分校高等部卒業
印　　刷　柏陽印刷株式会社
発　　行　公益財団法人明日佳
発 行 日　2026(令和8)年2月